

# 「わたし」に至る道

死は人生の終末ではない 生涯の完成である（ルター）



# 目次

## 巻頭言

日本福音ルーテル教会 東教区長 大柴譲治牧師 . . . . .

## 第1章 主題講演

「この『私』が死んだらどうなるのか？」

— この時代における死の向こう側への希求 — 講師 賀来周一牧師 . . . . .

スピリチュアル・ケアの現場から . . . . .

成熟した宗教性を求めて . . . . .

スピリチュアル・ペインとは . . . . .

(1) 「いる」だけでは価値がない—存在論的問い . . . . .

(2) 何のために生きているのか—目的論的問い . . . . .

(3) なぜ、こんなことがわたしに—不条理の問い . . . . .

聖書からの答え . . . . .

(1) 存在論的問いと創造の出来事 . . . . .

(2) 目的論的問いと終末の出来事 . . . . .

(3) 不条理の問題と十字架の出来事 . . . . .

(4) 社会からの問いに答える . . . . .

スピリチュアル・ケアのあり方

- (1) 寄り添いタイプのケア . . . . .
- (2) 「わたしの物語」をつくる . . . . .
- (3) サクラメンタルタイプのケア . . . . .
- キリスト者としての死の向こう側への希求 . . . . .
- (1) 復活の命を生きる . . . . .
- (2) 終わりの日を待ち望む . . . . .
- (3) 葬儀とスピリチュアル・ケア . . . . .
- (4) 天国での礼拝ーわたしの物語として . . . . .

## 第2章 パネル・ディスカッション

賀来周一牧師

明日が世界の終わりでも、今日、リンゴの木を植える . . . . .

田中良浩牧師

「ターミナル」は「出発点」 . . . . .

共に居ること、聴くこと、折ること . . . . .

石居基夫牧師

一人ひとりが違う死 . . . . .

天国はこの世での最高の幸せ以上のところ . . . . .

自然志向型と共同体志向型 . . . . .

自分の物語を完成して下さるのは神 . . . . .

### 第3章 「死」についての説教など

『死への準備についての説教』マルチン・ルター . . . . .

キリスト者の死生観 石居基夫牧師 . . . . .

### 第4章 質疑応答・意見交換

宗教が違っても天国は同じか . . . . .

体といのち、そして復活 . . . . .

天国と宇宙、どちらが遠い . . . . .

ハンカチで天国の音楽会の席予約 . . . . .

生まれる前は？ . . . . .

函館の町を見下ろして「ここは天国……」 . . . . .

肉体と霊は別々に？ . . . . .

死後のこと、分からなくても . . . . .

### 第5章 アンケート

1. あなたが人生を終わるに際し、  
    あなた自身の死をどのように受け止めたいと思いますか？ . . . . .
2. あなたの死に際し、未了のこととして（ライフワーク、  
    家族、社会的関係）、どのようなことがあると思われませんか？ . . . . .
3. 今後、あなたはどのように生きてその日を迎えたいと思いますか？ . . . . .
4. あなたにとって「天国（神の国）」とは？ . . . . .

## 第6章 参考資料

参考文献 . . . . .

緊急洗礼について 大柴譲治牧師 . . . . .

祈り・式文

- (1) 臨終の祈り . . . . .
- (2) 通夜記念式式文 . . . . .
- (3) 納棺の祈り . . . . .
- (4) 葬式について . . . . .
- (5) 葬式式文 . . . . .
- (6) 出棺に際して . . . . .
- (7) 火葬に際して . . . . .
- (8) 火葬後の祈り . . . . .

(9) 納骨の祈り	.....
(10) 周期記念会の祈り	.....
リビングウイル－医師の立場から－（実際の範例）	.....
いざという時の連絡先・記入フォーム（参考例）	.....
日本福音ルーテル教会・東教区墓地管理運営規則	.....
東教区墓地使用予約申込要領	.....
東教区共同墓地使用申込書	.....
東教区墓地（小平・横浜・我孫子・仙台）使用申込み手続	.....
冠婚葬祭費用覚書例（教会用）	.....
あとがき	.....

## 巻頭言

日本福音ルーテル教会 東教区長・牧師 大柴譲治

「光あれ！」と向こう側から響いてくる確かな声があります。するとその声によって光がそこに創造されたのです（創世記1…2）。

聖書はいつも「向こう側」、つまり「神さまの側」「天」にイニシアティブ（主導権）があることを私たちに告げています。「目覚めよと呼ばる者の声」がするのです。毎朝私たちが「目覚める」ということは、向こう側から呼びかける声によって私たちの意識が覚醒されるということの意味しています。私たちは「永遠の汝」たる神によっていつも呼びかけられているのです。この「汝よ」という呼びかけの声に気づくか気づかないかが私たちにとって人生の大きな分かれ目となります。昨年の宣教フォーラムの主題はそのような声についての主題であったと私は認識しています。

復活の主は鍵のかかった部屋に閉じこもっていた弟子たちにご自身を現され、「あなたがたに平安！」と繰り返し呼びかけつつ、手と脇腹に残る十字架の聖痕（ステイグマタ）を示されました（ヨハネによる福音書20…20）。その傷は、十字架上に死なれたお方と今弟子たちの目の前に立っておられるお方が同一人物であるという主のアイデンティティーを証ししています。その傷には私たちをありのままに包む至高のアガ



ペーの愛が示されているのです。この愛は死によっても揺らぐことのない愛でした。復活の主は、弟子たちにそうであったように、私たち一人ひとりに息を吹きかけられて、聖霊によって私たちを新しく創造してください（同 20.. 22）。ご自身の持っている「罪」を赦す権威と赦さずにおく権威を私たち信仰者の群れである教会に授けてくださるのです。ここで「罪」とは「神さまとの破れた関係」を表し、「罪の赦し」とは「神さまとの和解された関係」を意味します。私たち教会はこの世にあつて、キリストの出来事を通して神との和解が実現されたことを宣言する声としての役割を与えられています。

いつも向こう側から復活の主は心を閉ざしている私たちに近づいてくださいます。そしてご自身の手と脇腹を示してくださいるのです。この「キリストのリアリティー」、「キリストの現臨（リアルプレゼンス）」、「キリストのまこと（ビステイス）」によって私たちの心は開かれてゆきます。この解放の出来事を私たちは「福音」として宣べ伝えてゆくのです。「宣教フォーラム」という際の「宣教」とは「ミッション」という言葉ですが、これは本来「派遣」という意味を有しています。主イエス・キリストの和解の御業を宣言するために私たち教会は主によって呼び出され、この世に派遣されているのです。私たちは「荒野の声」として、「目覚めよと呼ばわる者の声」として派遣されています。

1993年以降コツコツと積み重ねられてきた東教区宣教フォーラムの一つの具体的な実りとしてこの書物は作られました。この本は、最初から最後まで、信徒の自主

的な働きとしてまとめられています。「光あれ！」と響いてくる声に応答するようなかたちでまとめられています。生と死を超えた「神のまこと（ビステイス）」がそこには確かな声として響いています。賀来周一先生をはじめ贅沢なほど優れた講師陣に恵まれました。時満ちた感があります。関係者のご尽力に心から感謝し、敬意を表します。昨年の第17回東教区宣教フォーラムの報告書が、さらに進化したかたちでこのように新書版として出版されるというのも、この主題が時代のスピリチュアルニーズにマッチしたということなのでしょう。このようなルーテル教会東教区の一員とされていることを感謝し、誇りに思います。

この書物は、私たちの人生における神の聖なる霊の働きを示すものとして幅広く有効に用いられて行くことでしょう。賀来周一先生をはじめとする講師、奉仕者の皆さんのご尽力に心から感謝いたします。s.p.g.

「わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。」（ローマの信徒への手紙 14 .. 7-8）

第1章 主題講演

この『私』が死んだらどうなるのか？

# —この時代における死の向こう側への希求—

講師 賀来周一牧師

キリスト教カウンセリングセンター相談所長

日本福音ルーテル教会引退牧師・元ルーテル学院大学教授

あなたが蒔くものは、死ななければ命を得ないではありませんか。あなたが蒔くものは、後でできる体ではなく、麦であれ他の穀物であれ、ただの種粒です。神は、御心のままに、それに体を与え、一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります。また、天上の体と地上の体があります。しかし、天上の体の輝きと地上の体の輝きとは異なっています。太陽の輝き、月の輝き、星の輝きがあつて、それぞれ違いますし、星と星との間の輝きにも違いがあります。死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。

(コリントの信徒への手紙Ⅰ 15章35節〜44節)

## スピリチュアル・ケアの現場から

わたしは生きていますので、死の向こう側に行ったことはありません。生きている人間として死の向こう側をどのように考えるか、とくに信仰者としてこの問題をどのように考えるかが、今日のわたしの話の内容です。

わたしは十数年来、スピリチュアル・ケアと呼ばれる働きに関心もあり、それに関連した所で奉仕してきました。ホスピスも含め、死の看取り現場で、医療従事者と共に、宗教家として終末期を迎えた人にどのように関わるかが働きの内容でしたから、そこで経験したことを通して、得たことをお話し上げたいと思います。

人間は死が近くなると、必ずと言ってよいほど「問い」を残します。ごく一般的なこととしては、この世的な事があります。いわゆるお墓だとか、財産のこと、残される家族とか、未整理の仕事、自分の葬儀のことなどです。

これまで死の看取りは、「ターミナルケア」という形で行われることが普通でした。死に行く人が安心して死ぬことができるように、身体的なケアに加え、心理的な社会的なケアをすることが主でした。最近少し様子が変わってきました。身体的、心理的、社会的なケアだけでは負いきれない、人の「生き死に」の根源に関わるような問題が、死を迎えた人たちに起こってくることもあり、いわゆる「スピリチュアル・ペイン」の問題についてもケアをする必要があると、医療側から主張されるようになってきたのです。

「スピリチュアル・ペイン」をどの様に訳すかについては、いろいろ論議されている

ますが、通常「精神的な痛み」、「霊的な痛み」と訳していました。しかし「精神的」というと人間の心の問題だと受け止められがちで、本来はもっと生きることとか死ぬことの根本に触れるという点では表現に乏しいし、また「霊的」と訳すと神秘主義や宗教の色合いが強過ぎるということで、今は「スピリチュアル・ペイン」と、片仮名表記のままです。

スピリチュアル・ペインとは、たとえば、「こうなったら生きていても仕方ない」、「なぜわたしはこんな病気になったのか」、「もう死ぬ以外に道はないのか」、あるいは「こういう病気になったのは祟りかもしれない」、「これから先わたしはどうなるのか」、「わたしの人生はこれでよかったのか」などさまざまな問いです。人によって、それぞれ問いは異なりますが、「生きること、死ぬこと」の根本に触れるという点では共通しています。

このことについて改めて、正しいケアがされなければならないと主張したのは、WHO（世界保健機関）でした。WHOは1990年、「がん終末期患者の緩和ケアに関する報告」を出し、そのレポートの中で、がんの終末期患者は身体的な痛みと共に、スピリチュアルな痛みがあり、緩和ケアにはその両方のケアを含むと言っているのです。身体的な痛みというのは医療的なケアで済みますが、スピリチュアルな痛みへのケアは医療的なケアの範囲を超えます。そこでわたしたちのような宗教的な立場にある者が引く張りが出されるということになるわけです。

もちろん心理的なケアや、社会的なケアも必要です。しかし、スピリチュアル・ペ

インに対しては「スピリチュアル・ケア」が必要です。スピリチュアル・ケアをどのように理解するかは非常に重要なことですが、スピリチュアル・ペインそのものが、生きること、死ぬことなど根本にふれる問題であり、かつ極めて個人的な問題であって、誰しもが同じ問いを抱えるわけではありません。そうしたスピリチュアル・ペインに対するスピリチュアル・ケアについての正しい方向性をWHOが模索しているわけです。このことが契機になり、最近、医療従事者と宗教的立場にいる者との共同作業がスピリチュアル・ケアにとつて重要なこととなってきました。

スピリチュアル・ペインは、必ずしもがん終末期の人にだけ固有のことというわけではありません。がん疾患の人は通常、終末期症状に至るまで意識のはっきりした方が多く、痛みを取るペインコントロールが進歩し、意識がはっきりしているため、かえって悩みを抱えてしまうことがあるのです。悩みを抱え、意識をしっかりとった人のケアをどうするかが、とくに大事なことになってきたのです。

スピリチュアル・ペインは、難治性の疾患や、予期しない出来事に遭遇した人、突如の事故にあった人、あるいは自分の責任ではなく重度の障害を心身に負った人、大切な人を失って非常な悲しみの中にある人、それらの家族や身近な関係者が抱える問題でもあります。「なぜこんなことが起こるのか」、「このまま生きていてもどうしようもない」、「いっただい、これからどうなるのか」などの悩みをスピリチュアル・ペインとして経験するのです。

このスピリチュアル・ペインに対して、人間の知恵には答えがないことを考えなく

てはなりません。WHOは、その意味で「スピリチュアル・ケア」の必要性を説いているのです。スピリチュアル・ペインを抱えた本人から言いますと、自己を超えたところにあつて、人間の生きること死ぬことの根源を示す答えが必要ということでももちろん心理的な、社会的なケアも必要です。しかし、究極の慰め、安らぎがそこになければなりません。それをWHOが「スピリチュアル・ケア」の業に求めていることなのです。

### 成熟した宗教性を求めて

このようなことを申しますと特別なことのように感じますが、人間は生きるか死ぬるかという瀬戸際になると、そこを乗り越えるには人間の知恵ではどうにもならないことを知っています。

例として、国際線旅客機と聖書のことをお話ししますが、何のことかといいますが、国際線の旅客機は聖書を積んでいるということです。陸地から720 km以上離れて洋上を飛ぶ国際線航空機は、海に着水する可能性があります。その時のために、救命胴衣、水、食料、照明弾、海水着色料などを積んでいます。その中に聖書も積んでいるということなのです。通常のジャンボジェット機は、32種類77品目を15セット積んでいますから、聖書も15冊積んでいるのです。これは国際旅客法で決まっていますので、日本航空であろうと全日空であろうとイラン航空であろうと同じです。これを聞いた時に「えーっ」と思いましたが、いざという時には、人間の知恵が及ばないこと



を人類は知っているといるということです。

もう一つの例として「柴又の寅さん」があげられます。寅さんの映画は好きだと思います。山田洋次監督の下で監督助手をしていた人で、現在牧師をしている方からこんな話を聞きました。山田洋次監督は、人間として生きる上で、いつも求めているものは何であるかを寅さんのセリフに入れたそうです。寅さんの家族は複雑な家族です。さくらとは腹違い、両親は早く死んで、おじさんとおばさんに育てられました。ですから寅さん映画の舞台はお茶の間が主です。彼は本当の心休まる家族が欲しいと思ひ、また人間づきあいとは何かとか、人生とは何か、愛とは何か、普通、世間一般が求めているようなことを寅さんは手にしたいのです。

「寅さん映画名セリフ」という本を読みますと、いろいろなことが書いてあります。あの中に、満男君という妹さくらの子が登場します。彼は寅さんを尊敬していて、あつ時、京成柴又駅の雑踏のなかで、寅さんに聞きます。「寅さん、人生っていったい何かね」「おめえ、難しいことを聞くなあ。人生ってのはさ、何かいいことがあるんだよ」と寅さんが答えるのです。でも寅さんにはいいことがないのです。いつもあの人自分の好きなマドンナに捨てられます。自分の欲しいもの、人間はこうやって欲しい、世間もこうやって欲しいと思うことから見放されています。ですから「それを言っちゃあおしまいよ」と言つては鞆をぶら下げ、雪駄を履いて、ぼそぼそと歩く。後から妹のさくらが「お兄ちゃん」と呼ぶ。すると帝釈天の鐘がボンと鳴る、というお膳立てになっています。

さきほど紹介した、元監督助手で現在牧師をしている方と話しをしていると、「先生、寅さん映画は宗教的な映画ですよ。帝釈天が出てきます」と言われます。寅さんの想いが届かないところを帝釈天が宗教的な象徴として補っています。わたしはそれを聞いて、寅さん映画は奥が深いなと思いました。人間が届かないところを、人間を超えるたもので補おうとする世界があるのです。

寅さんこと渥美清、渥美清の本名は田所康雄といえます。松本市にバプテスト教会がありまして、そのの牧師が田所賢二先生と言います。たまたまわたしが信州に参りました時に、寅さん映画の話を見せて頂きましたが、その田所先生が、「実は渥美清はわたしの叔父です。渥美清は洗礼を受けました」と言われました。びっくりしました。寅さん映画「男はつらいよ」シリーズの第48作目「寅次郎紅の花」は奄美大島などで撮ったもので、これが最後の作品です。その時渥美清は、がん末期、その後亡くなりました。亡くなる前に病床洗礼を受けたそうです。寅さんは、映画の世界では実現しえなかつた思いを、帝釈天という自分を超えた世界の中に実現しました。その寅さんは、実人物田所康雄として、その答えをキリスト教に発見して受洗したことになります。

宗教は、身近なところでなくてはならぬ働きをするものだという例を知っていただけだったのでこのような話しをいたしました。

スピリチュアル・ペインとは

さて、スピリチュアル・ペインについては、研究者によって諸説あり、定説はいまのところありません。以下に紹介するのは、わたし自身の主張です。

スピリチュアル・ペインとは、生きること死ぬことの根源に触れたところに起こる危機的実存的苦悩と言つてよいでしょう。しかしながら、その苦悩に起因する問いには人の知恵で答えることができないので、そのペインが発生するというのがわたしの基本的な考え方です。人間の知恵で答えが出る問いであれば、この世界で何とかなるでしょう。でも、この世界のどこにも答えがないので、苦しみがつるのである。

### (1) 「いる」だけでは価値がないー存在論的問い

スピリチュアル・ペインは発生因から考えて、三つに類別することができます。

第一にあげられるのは、「存在論的問い」と言われるものです。「いる」(存在する)価値を失ったときに出てくる問いです。今日の社会は、「いる」だけに価値を認めません。「する」、「できる」という世界が価値の対象となります。「いる」だけでは人間は怠け者、役立たずとしか見ません。元気な時にはバリバリ仕事をしていた人でも、死期が迫れば、ひたすらベッドに自分の体を横たえるだけとなります。そうなれば『いる』だけでは役立たず、「こうなったら死んでしまいたい」という気持ちになるのは、現代社会の価値観からすれば当然です。

「いる」ということになぜ価値を認めないかというのと、「存在する」ということの根本的な理由を現代社会は答えとして持っていないからです。そんなことはないと言う

かもしれない。なぜ地球があるのか、それは宇宙には星がたくさんあって、宇宙が爆発して、飛び散って、重力によってその星片が集まってきて、地球ができた。そのように説明をすることはできません。でもそれは、あくまでも「存在する」ためのプロセスを説明しているのであって、なぜ宇宙があるのか、なぜ地球があるのかという根本的な存在理由に対する答えではないのです。

小さな子どもが母親に、夜空の月を見ながら、「おかあちゃん、なぜお月様があるの」と言うと、母親は困ります。「バカね、そんなこと聞くんじゃないの。あるからあるの」と答えるでしょう。存在するものは「あるからある」としか答えられない。その答えをわたしたちは当たり前のこととして受け入れてきました。

でも、人は「いる」だけになると「なぜわたしは存在しなければならぬのか」と思うわけです。ここに存在論的問いが発生する理由があるのです。

## (2) 何のために生きているのか 一 目的論的問い

第二の問いは、存在の目的を問う問いであって「何のために存在する（いる）のか」ということになります。何のために存在するのかといえ、何か役に立つことをしなければ、とわたしたちは考えるのが普通です。この役に立つという考え方、つまり存在の有益性を存在の中に持ち込むと、生きている以上は何か役に立つことをしようと思えます。けれども、死が近くなるとただ寝て「いる」だけになり、役に立たなくなると、もっと何か有益なことをすることがあったにもかかわらず、それを途中で諦めて

死を迎えなければならぬ。そうなるに役に立つという価値観は崩れます。そこに「何のために生きているのか」、「わたしの人生はこれでよかったのか」という問いが出てくるのです。

考えてみると、わたしたちの人生は、折角生きているのだから、何か役に立つことをと願う価値観に大きく支配されています。その価値観から遠いところで生を終えることになれば、否応なく、何のための「わたし」の存在かを問わざるをえなくなりま

### (3)なぜ、こんなことがわたしに—不条理の問い

三番目に不条理の問題が浮上します。

誰であれ、喜びのうちに死を願いながら人生を送っている人はいないでしょう。人は命を紡ぎながら生きているのであって、死は人にとってあくまであってはならないこととしてやってきます。その意味においては、死は人間にとって不条理の出来事としてやってくると言えます。もちろん、人は大なり小なり予期しない出来事に遭遇し、「なぜ、こんなことがわたしに起こるのか」と問うような事態に遭遇することはさほど珍しいことはありません。けれども死の出来事ほど不条理なことはないのです。

とくにがん疾患の人は最期まで意識のはっきりしていることが多く、この「なぜ」に苦悩する人が少なくありません。たとえば「なぜ、わたしはがんになったのか」、「なぜ、今わたしは死ななければならないのか」といった問いになって表れます。この「な

ぜ」は「なぜ、わたしなのか」、「なぜ、今なのか」。「なぜ、誰か他の人ではないのか」と三つの問いに分かれ、通常これを「ホワイ・クエツション」(Why Questions) と言っています。

思いがけない病に罹ったり、降って湧いたような災難に遭ったとき、わたしたちの口から出てくる問いでもあります。これに対して、一応の答えがないことはないのです。たとえば、「何かの報いである。罰が当たったのだ」、「何かの祟りである」、「起ったことは仕方がない。諦めなさい」、「そういう運命なのだ」、「時間が経てば分かる」、「あなたが強くなるための試練である」などなのです。でも、これらの答えは、あくまで他人事であって、さて自分がそのような目に遭えば、もはや答えとはなりません。ひたすら、問いだけあって答えのないところに身を置かねばなりません。終末期に差し掛かった人は、自らが死ぬことをなかなか受け入れることができず、苦悩の中に過ごす日々は、この「なぜ、わたしが・・・」という問いが重くのしかかっていることを、近くにあつて看取る人はひしひしと感ずるのではないでしようか。

これらの問いに聖書はどのように答えるのでしょうか。

### 聖書からの答え

これまで述べてきた、人の生き死にの本質に関わるような危機的実存的なスピリチュアル・ペインに対して、聖書はどのような答えを与えてくれるのでしょうか。ここにこそ、キリスト教信仰の大きな役割があると言わねばならないでしょう。

## (1) 存在論的問いと創造の出来事

誰であれ人は「いるだけでいいよ」と言ってもらいたいのです。現代社会では、怠け者、役立たずと見做される「いる」だけの存在が肯定されると人は安心して生きることができるとは、何という皮肉でしょうか。

創世記1…31によれば、「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」とあります。神は存在するものをすべてよしと肯定されるのです。肯定されるとは、存在するものは神から愛されることに他なりません。だからこそ、罪人でさえ救われます。罪人の存在もまた愛の対象だからです。

マタイ6…25に記されている、空の鳥、野の花は「種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない」、「働きもせず、紡ぎもしない」とあります。何もしないのです。世の中の価値観からいえば、まるで怠け者のようです。でも自由に羽ばたき、美しく装われています。なぜか？ 神から造られた存在として愛されているからです。

私は、牧会を担当しているころ、重症心身障害者との関わりを持っておりました。毎年夏になると、その人たちと教会の青年たちが共同キャンプを行います。ある時、参加したひとりの青年が、「健康に恵まれた僕たちは、こういう方のために何ができるかを考えなければならぬ」と言いました。これは、ごく自然な善意に溢れた言葉です。すると、ひとりの障害者がとつとつと申しました。「それは違う。君も僕も同じだ。神さまから愛されているのだから。」

先の青年は衝撃を受けました。「今まで人間を『できる』『できない』だけで見てきた。できる人ができない人にしてあげるのは良いこと、と思っていたが間違っていた。『いる』ということは、神さまに愛されているからそこにいる。そういう視点はとても重要で、これからは人間を『いる』ということで見ていきたい」これこそ聖書の価値観です。「すること」（行為）が肯定されているのではなく、「いること」（存在）が肯定されているのです。

教会も高齢化を迎えるようになってきました。高齢期を迎えた人の中には、日曜日の礼拝に出席するために週6日を休み、体調を整えると言う人もいます。その様な方にお会いしたら「お顔を見られてとても嬉しいです。私も元気づけられました」と声を掛けて下さい。教会の中では「いる」ことが大事です。神さまに愛されているのですから。

神学者バルトは、自殺する人に語りかける言葉は「生きなければならぬ」ではなく、「あなたは生きることが許されている」でなければならぬ、と言っています。それは、その人の存在が神に愛され、生かされていることに気付いてもらうためです。存在することが大事だという価値観を教会は強調してよいと考えます。

幼稚園、保育園で話をする機会がある場合に、保護者の方たち、とくにお母さんたちに、「お母さんは、ご自分が産んだのですから、お子さんに『あなたは、わたしが産んだ子だから絶対大丈夫よ』と言って下さい」と申し上げることがあります。この言葉は、自分が産んだ子どもだけに言える言葉です。時には「口が裂けても言ってく



さい」と申し上げることもあります。

あるお母さんでしたが、お子さんが障害をもつて生まれたのでした。ある時、「先生が、口が裂けても言いなさいとおっしゃったから、思い切って『あなたはわたしが産んだ子だから大丈夫』と言いました。そして、その子がニコツと笑いました」と言われました。「お母さん、それは素晴らしい。お子さんが最も聞きたかった言葉だったでしょう」と申し上げました。

自分の存在をすっかり受け止められた子どもは、どんなに辛いことでも乗り越えられます。

## (2) 目的論的問いと終末の出来事

この世に生を受けたのは、役に立つ人生を送るためなのか、もしこの目的のみが人生を完成させるとすれば、役に立つことなく、この世を去る人たちは、どのような意味を人生に持つことができるのか、この問いの前にこの世の知恵は答えてくれません。

22歳で亡くなったお嬢さんがいます。重たい障害を抱え、学校にも十分に行けず、小さい時から殆ど病室が彼女の世界でした。病状が進み、亡くなる一ヶ月ほど前に訪ねた私に、「私の人生は何だったのか、何のために生きてきたのか」と問いかけたのです。将来に向かつての夢もあつたでしょう。でもそれを断ち切つてこの命を終わらねばなりません。この彼女の問いに対し、人生は役に立つ、立たなければ答えとなりません。

この時、聖餐式をしました。そこには、この世の知恵には答えがなく、問いだけを  
持つて人生を終わる彼女を、その問いごと引き受けて下さるお方が、この場においで  
になるのではないかとひしひし感じたのでした。ここにこそ、存在の目的を問う問いに  
対する究極の答えがあると言うべきでしょう。これは理屈を超えた、言葉では説明で  
きないスピリチュアリティの世界です。

スイス人医師ポール・トゥルニエの著作『老いの意味』に、「老いるということとは、  
未完了の仕事を受け入れていくプロセスである」とあります。多くの人は、人生の中  
に予期しない出来事を経験したり、意に沿わない生活を送ったり、折角の仕事が途中  
で挫折したり、突然の病気に見舞われることもありましょう。未完了の仕事を抱えて  
生きる、これが現実のわたしたちの人生でしょう。自らの人生を振り返る時、この人  
生でほんとうによかったと言える人は幸いと言わねばなりません。

とくに、生まれつき、あるいは予期しない出来事によってか、自分の責任において  
ではなく、不十分な人生しか送り得ない人にとっては、この世の価値判断によれば、  
何のための人生だったのかとの問いを抱えたまま、死を向かえなければならぬので  
しょうか。

しかし、最後には問いごと受け入れて下さる方がおいでになり、そのお方が問いご  
とそっくり未完了の人生を受け取ってください、完成へと導いてくださる、この答  
えを知っている者は幸いです。

そのことをよく表わす言葉に、「明日が世界の終わりでも、わたしは今日、リンゴの

木を植える」(ルター)という有名な言葉があります。明日が世界の終わりでも、その向こうにもう一つの究極の世界が広がっているなら、今日、リンゴの木を植えることができる。信仰者にとつては、これは究極のお方を信じる終末信仰が言わせる生き方であると言えるでしょう。

この生き方は、きわめて宗教的に見えますが、宗教と無縁に見える死の看取りの医療現場、とくにホスピスでは、スピリチュアル・ケアとして、このような生き方が得られるように援助することが求められています。事実、死に臨んだ人々は、「わたしは死んだらどうなるか」という問いを、言語化するかどうかは別として、宗教の有り無しに関わらず問うものです。誰でも問う問いなので、実存的な問いと言われます。なぜ、このような問いを持つかという理由は、人生に未完了のことを抱えるからで、その完成を、死を越えてでも成就したいとの思いがあるからです。

多くの人は、死を前にすると、一層問いが残ります。しかし、明日死を迎えるとしても、なお先を望んで、今日を坦々と生きるためには、死の彼方には、死に行く「わたし」のすべてが受け取られて、究極の完成へと導かれて行く、というスピリチュアルな世界が提示されねばなりません。ここには終末論的な意味を持つスピリチュアル・ケアの重要性が問われるのです。死ねば、天国に行くという安易な言葉ではくくることのできない、深刻な苦悩があり、究極性や永遠性、絶対性を希求する人間の実存がかかっています。

信仰があれば、そこは乗り越えることができると単純に言い切ることはできません。

信仰者なるがゆえの苦しみもまた伴います。死に臨んでの完成を待つ終末的な希求は、人間にとつての生き死にの本質に触れる実存を問う問いである限り、答えを求めての戦いでもあるのです。

このことを死の看取り現場で、どのように具体的にケアの中に展開するか。それが宗教的立場にいる者にとつて突きつけられた、大きな課題となっています。その際、とくに問題となるのは、死を越えて、その先に完成を望む問いは、それを援助する側とそのケアを受ける側との言語的な関係の中で答えを得ようとすれば、ほとんど高い壁の前に立ったかのような困難を覚えるはずです。言語化された世界は、それがどれほど優れていたとしても、限界があります、また相対的な質を残しており、究極的な答えとはなり得ません。むしろ、そこに求められるものは、非言語的な世界に優位性があると言えます。

信仰者にとつては、すでに例としてあげた若い女性の場合のように、サクラメント（聖礼典）がその究極的な答えとなるでしょう。死に臨んだ人が、しばしば洗礼を受け、また聖餐に与ることで、「わたし」の死を乗り越え、究極の完成へと導かれることを経験します。まさしく、それは終末的な出来事が、その場に起こっているとしか表現し得ないことです。その意味では、教会がサクラメントを説教と共に有しているということは、優れた非言語的なスピリチュアルな知恵と言わねばなりません。

けれども、そのような究極的な死を越えた世界への希求は、なにも信仰者だけの問題ではないことを考えれば、あらためて宗教的立場でなくとも持つ「わたしは死んだ

らどうなるか」という危機的実存的な問いを共有し、終末的な完成を感知して『明日が世界の終わりでも、わたしは今日、リンゴの木を植える』ためには、言葉によらない世界を通して、死に逝く人と関わらねばならない事態が、すでに死の看取り現場では起こっていることに気付く必要があります。このような事態に対するケアのあり方を、キリスト教信仰の立場から、どのような形で可能となるかを具体化するのも、キリスト教カウンセリングの役割と言えましょう。

### (3) 不条理の問題と十字架の出来事

ドイツの女性神学者ドロテー・ゼレは、『苦しみ』（邦訳、新教出版社）という本の中でひとつのエピソードを紹介しています。

第二次世界大戦時代のユダヤ人強制収容所の中で、ある出来事が起りました。過酷な状況に耐えきれず、脱走を計った子供たちがいました。二度と事を起こさないように見せしめのために、収容所の中の子ども全員を集めて一列に並ばせ、5番目ごとに銃殺したのです。

ゼレは、この出来事を紹介するにあたって、こんなことを言っています。このような時、愛なる神、全能なる神はどこにもいまし給わない。もし、神が愛であり、全能であるなら、すぐやってくる5番目ごとに並んでいただけで銃殺される子どもを助けに来てくれるはずだ。しかし、そのような神はどこにもいない。もし神がいるとすれば、銃殺される子供と一緒に殺される神がいまし給うだけだ。そういう神は共に苦し

む神であり、それが十字架のキリストに他ならないと言います。

キリストは十字架上で果てられる時、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになつたのですか」と叫ばれたとあります。神の子が神から見捨てられたのです。これほどの不条理はありません。キリストは不条理の極みにご自身を置かれたのです。キリストは、御自身を不条理の極みに置かれることで、わたしたちが不条理の極みに立つ時、共にいて下さるお方だということを、十字架のキリストを通してわたしたちは知ることができなのです。

キリストが十字架の上で叫ばれた「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになつたのですか」この言葉は、本来不条理の最中にあるわたしたちが叫ぶべき言葉です。わたしたちの言葉をキリストが代わって叫んでくださる、そのような出来事が十字架において生起していると言うべきです。そこには、不条理の最中において、「わたし」が問う「なぜ」をキリストが問うておいでになるのです。ゼレが言う「共に苦しむ神」の姿をありありと見るのではないでしょうか。

旧約、新約を通して、聖書の奥底に流れる信仰は、「インマヌエル（神共にいます）」なる神を信じる信仰ですが、わたしたちは不条理の極みにおいて「インマヌエル」なる信仰の具現化をキリストの十字架に見ることになるのです。

究極のカウンセリングは共にいること、だと言われます。苦難の中にいる人と共にいることは辛く難しいことです。しかし、共にいてくれる人がいれば、問いだけあつ

て答えがないところであつても、人はなお前に向かつて生きることができません。

最近では自殺者が多く深刻です。死だけが答えであると思う人も、誰かが共にいて、問いを共有する存在を得るなら、なお生きることができるとでしょう。

不条理の問題に苦しむ人は、これが答えというものはありません。問いだけあつて答えがないのです。答えのない所を問いだけ抱えて生きなければならぬ人の傍には、「意味のあるプロセスの共有者」が必要です。そのことを考えれば、意味のある、問いの共有者としてのキリストを信じる人は幸いと云わねばなりません。

#### (4) 社会からの問いに答える

一般社会は、すでに述べたようなスピリチュアル・ペインを抱えた問題に対する答えを見失っている実態があります。ですから、どこに答えを求めて善いか分からず、不安な人生を送らざるを得ない人々が増えてきました。すでに述べたように、死に臨んだ人々、心身に重度の障害を負った人達、重度の知的障害者、難治性、致死性の疾患を抱えた人々、予期しない出来事と遭遇したり、また重大な意味のある対象を喪失して、心が折れてしまった人々、認知症を抱えた人々、そしてこれらの人々を身近なところでケアをする人々は、それらの問題の原因や経過プロセスについては何らかの説明や援助を提供されることはあつても、「なぜ、どうしてこんなことが・・・」、「このままでよいのか・・・」、「これからどうなる・・・」などといった根源的な問いへの答えを現代の社会の中では得ることができません。

幸いにして教会は、聖書を通し、正しい意味における成熟したスピリチュアリティーの世界からの答えをもつて援助を提供することができます。

とは言っても、キリスト教と無縁のところ生きている人たちにとっては、生のみまでのキリスト教的な答えが提供されたとしても、なじみのうすい食べ物を食べさせられるようなものです。キリスト教信仰の本質を外さず、しかしながら特定宗教としてのキリスト教という衣装を脱いで、宗教と無縁のところ生きてきた人々、しかし今や生き死にの本質に関わる問いを抱えて呻吟している人々の心に届く援助が求められます。

現に、そのような努力が各地のホスピスで行われています。また最近では、生殖医療や臓器移植、ES細胞、クローンなど遺伝子操作の問題を扱う生命倫理の領域でも、キリスト教信仰に基づく、神学的な観点が求められるようになってきました。命の問題を扱う生命倫理においては、命があまりにも「モノ」として扱われる現状を憂慮する声に答えるためです。本来の命が持つ意味や価値は何なのか、その答えもまたスピリチュアリティーの世界からの関わりがなければなりません。そこにもまた、キリスト教はどのような答えを提供することができるかが、今日の緊急な課題となっている現状があります。

こうした社会からの問題提起には、単に心理臨床の領域においてのみ答えを出すことができません。学問的に多様な視点から答えを必要とし、現にそのような動きがあることはいうまでもありません。



すでに述べたような働きの臨床現場では、広い意味での社会への牧会的な関わりと  
なっていることを考えれば、スピリチュアル・ケアの課題は教会としてのこの世に対  
する宣教論的な問題も含んでいることに気付く必要があります。

## スピリチュアル・ケアのあり方

### (1) 寄り添いタイプのケア

スピリチュアル・ペインを持つ人に対するケアには、いくつかのケアの仕方があり  
ます。一つには、寄り添いタイプのケアがあります。まだ認知能力がある人で程度の  
差はありますが、コミュニケーションがとれる人を対象にしたあり方です。

寄り添いタイプのケアに求められるのは、何よりも相手の話をよく聴くということ  
です。それこそカウンセリングの基本ともいえるべき態度が求められます。傾聴を基本  
に、共感的に相手の気持ちに寄り添いながら、言語的に、あるいは非言語的に心理状  
態や感覚の世界を大切にしながら、相手の存在そのものを大切にするようなメッセー  
ジを送ることが援助になります。

しかし時には、「こうなったら早く死んでしまいたい」とか、「まだ死にたくはない」  
などと言う言葉を聞くことがあるかもしれません。こんなとき、私は、「こう答えれば  
いいですよ、という模範解答はありません」と申し上げることにしています。

生き死にかかわるような重要な問いを問うときには、無意味な相手にはそういう質  
問はしないものです。自分にとって重要な人だからそういう質問をするのです。基本

的には、そばにいて一緒にいることが大切なのです。とくに「なぜ、わたしはがんになったのか」、「何のために生きてきたのか」などという不条理を感じる問いには、人間の知恵に基づく答えはありません。問いだけあって答えがないところに身を置いた人が、さらに前に向かって生きるためには、その問いを共に問う存在が必要なのです。究極のカウンセリングは「共にいること」(Witness)であると言われますが、それこそ「共にいることが」もつとも求められるときです。

ある看護師さんでしたが、「先生が、患者さんと一緒にいなさいとおっしゃったから、わたしも許される時間だけは患者さんのそばにるようにしました。しかし先生、死にゆく人のそばにひたすらいるって辛いですねえ」と言いました。「でも分かったことがあります。患者さんが死に向かっていくとき、わたしも死に向かっていくと思います。患者さんと同じ方向に向かっていくと死の向こう側に何かしら大きなものを感じるのです。」「あなたも患者さんも自分を超えたもう一つの世界を、何か分からないけれど感じる。それこそスピリチュアル・ケアと言えるかもしれませんね」と言うのに躊躇しませんでした。

もちろん程度によりますが、認知能力のある人とは、会話を交わすことも当然あります。そのようなとき、どのような言葉をかければよいかと迷うことがあります。しかし、人は危機に際しては、気の利いた言葉や美しい言葉を期待しているわけではありません。真摯に自分に関わってくれる人を、その生き方を通して重要な意味のある人物とするなら、一言でも二言でも生き死に関する意味のある言葉として、当事者の

心に届くことでしよう。ですから、生き死に関わる問いを投げかけられたときには、心に浮かぶ言葉をそのままに返せばよいのです。援助する側の生き死に関わる心根がその言葉には込められているのですから。もし、言葉を見失うなら、ただ黙ってそばにいて、共に死を共有するときを過ごしていただきたいと思います。何事かがそこに起こることでしょう。

## (2) 「わたしの物語」をつくる

程度の差こそあれ、コミュニケーションが可能な寄り添いタイプのケアの過程では、終末期の人は自分なりの物語をつくります。幼かった頃の楽しい思い出、親から叱られたこと、苦労した生活の日々、口惜しかったこと、挫折の体験、反省すべきこと、家族のこと、ゆるし、死後のことなどを物語にしてください。もちろん何も語ってくれない人もいれば、言葉数の少ない人もいます。ときには手記のかたちで、あるいは絵で渡されることもあります。すべての人が同じような物語を持っているわけではありません。一人ひとりの人生が違うように、人はそれぞれに異なった物語をつくりません。

死が近づくにつれ、死と向かい合い、その苦悩のプロセスを重要な意味のある者と共に分かち合うことによって、自己を越えた究極的な存在への委ねる決断が与えられ、死の向こう側へ一条の光を見出すようになります。そうなれば、たとえ苦悩は残るにしても、その呪縛に支配されることなく、自己を相対化することができ、ユーモアさ

え出てくることがあります。

ある方は、ホスピスに入院中でしたが、緩和ケアが行き届いており、痛みがない状態でした。「ここまでこないと分らないことが人間にはたくさんあるものですね。ところで天国ってどんなところでしょうね」と言います。これにはわたしもどう答えてよいものやら考えあぐねて「わたしも行ったことがないのでよく分かりません。でも誰も帰ってこないからよいところには違いないでしょう」と言うと、その人は「そうですね」と笑っていました。これなど信仰者として死を前にして全てを委ねることを知っている者の物語のつくり方でありました。

人にはそれぞれの物語があります。その物語が生きている今とやがて来る死を受容し、死の向こう側を望ませる成熟した物語となるよう援助することが、寄り添いタイプのケアにもっとも求められることです。

同時に、死を迎える当事者が物語を完成しないまま、この地上を去ることもあり得ますが、その物語をさらに引き継いで完成させるのは、家族も含めた周辺関係者です。何らかのかたちで未完成の物語を完成させるために援助するのも、スピリチュアル・ケアの働きのひとつと言えましょう。

### (3) サクラメンタルタイプのケア

死が近くなり病床で受洗する人もあります。信仰者にとっては、病床聖餐を受けるのはごく自然のことです。洗礼と聖餐はサクラメントと言われ、教会では見える神の

言葉であつて、神の働きを恵みとして受け取る重要な教会のしるしです。

サクラメント以外にサクラメンタルなもの存在も重要な働きをします。サクラメンタルなものとはく複合的な意味のある象徴の存在、行為、または儀式による「生き死に」の究極的意味また価値の感知と定義づけられます。意味のある象徴に表れた究極性に触れ、生きることに死ぬことの本質を感じて、自己を越えた存在によつて、死の向こう側へと自らを委ねる決断へと導かれることを意味します。

ホスピスには、音楽、絵画、美術工芸品、書、さまざまな装飾品、植栽、整えられた生活空間、自然の景観も含めて自己を越えて究極的なものに触れるものが多く備えられています。終末期の人は、非常に鋭敏な感覚を持っていますから、たとえ道ばたの名のない雑草であつても生き死にと関連づけて観察し、自分自身と重ね合わせるものです。それこそ当事者にとつてはサクラメンタルなものとなつていゝのです。

人によつては、それは偶像礼拝に通じるのではないかと危惧する向きもありますが、ルターは、当時の教会に残された象徴的事物に慰めや癒しの意味を汲むように勧めています。1519年、ザクセン選帝侯のフリードリヒ賢侯が病氣になりました。当時ザクセンのヴィッテンベルクの教会は、ヨーロッパ最大の聖遺物収集で知られていました。17, 443点もあつたそうです。ルターは聖遺物による贖宥効果を否定し、結果として宗教改革を起こしました。そういう点では、聖遺物はルターにとつて何の役にも立たない、単なる飾りものだったわけです。

彼は、フリードリヒ賢侯のために「勞し重荷を負う人たちのための慰めの14章」を

執筆し、聖遺物を、信仰を通してその意味を見るようにと勧めています。ルターにとって、聖遺物そのものは単なる偶像であり、装飾品にすぎません。けれども信仰の目でそれらを見ると、大切なものがあるとルターは言っているのです。

かつて、ロサンゼルスのエイズホスピスに行ったことがあります。平均在院期間は三ヶ月と案内の人から聞きました。しかし、わたしが会った入院者はニコニコしていて、自分たちはとても幸せだと言います。よく見ると、なぜか、彼らを取り囲むようにいろいろな飾り物が置いてあるのです。ある人は縫いぐるみのテイーベアに埋まるように寝ています。ある人は自分のベッド周りを造花ですけれど、お花で飾っています。ある人は、強い匂いではないのですが、アロマで身の回りを包んでいるのです。それらは、たんなるアクセサリーというより、やがて死ぬと分かっている自分自身を死の向こう側と結ぶサクラメンタルな象徴的なものになつていると思いました。

さらに大事なものに人の存在があります。すでに述べたように死と向き合う人にとって、重要な人物の存在は、その存在自体を通して死を越える決断を促すこととなり、サクラメンタルなものとなります。とくにホスピスのチャプレン、牧師、司祭などは宗教的な象徴性をもっており、何を語るか、何をするか以上に、その存在がきわめて重要な働きをします。

また生活空間も十分にサクラメンタルなものとなり得ます。ホスピスは非常に静かな所です。人の動きが物静かで、ざわめきがありません。そういつた雰囲気の中での人の動きに、自分を超えた何か大事なものを見る世界があるのです。それもまた、サ

クラメンタルといってよいでしょう。

キリスト教主義によってたてられたホスピスには、チャペルがあり、礼拝も営まれます。礼拝はそれこそクラメンタルです。礼拝にはどたばたした雰囲気はありません。礼拝はある意味では、非常に整えられた儀式となっています。雰囲気としてはある種の荘厳さを湛え、意味としては究極性を持ったスピリチュアルなドラマを感じます。その中に自分たち人間の力では及ばない何かに触れさせます。このようなこともスピリチュアル・ケアでは重要なこととなります。

### キリスト者としての死の向こう側への希求

キリスト者が死に向き合うときに求められる信仰は、一つには復活信仰、そして終末信仰です。キリスト者は、キリストを信じる信仰によって、永遠の命が与えられることをよく知っています。この永遠の命に繋がることをもう少し深くどこまで考えたいと思うのです。永遠の命というと「永く生きる」と時間的に考えがちです。もちろんそうではありません。

#### (1) 復活の命を生きる

パウロは、ガラテヤの信徒への手紙2章20節に「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」と言います。ルターはこれを解釈して「パウロは死んだのです。キリスト者が生きているのです」と申し

ました。パウロという存在は、もはやないのです。キリストご自身が生きて働いておられる信仰者がいるということですよ。

さらにパウロは申しました。コリントの信徒への手紙一 15章 35 ～ 36節に「しかし、死者はどんなふうにも復活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかもしれない。愚かな人だ」とあります。考えて分かる、目で見えて実証できることがほんとうの事であるとすると人間の知恵の中で、復活を考えようとしても分からないと言っているのです。

パウロは「天上の体と地上の体があります。しかし、天上の体の輝きと地上の体の輝きとは異なっています。太陽の輝き、月の輝き、星の輝きがあつて、それぞれ違いますし、星と星との間の輝きにも違いがあります。死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです」（コリントの信徒への手紙一 15章 40節以下）と言います。キリストによつて永遠の命が与えられた者は、次元の違うところにいるということですよ。

米国福音ルーテル教会の神学者カントーネンは、よくこういうことを言いました。「君たちは永遠の命を信じているか。永遠の命は存在すると考えているかもしれないが、そうではなく、永遠の命は与えられるものだ」と言うのです。永遠の命を生きるということとは、キリストによつて与えられた命を生きるということですよ。ルターは次



のように言います。「キリスト者が死ぬ時は死に向かうのではない。キリストに向かうのである」と。キリスト者は死ぬ時には死に向かつていない。キリストに向かつている。これは信仰者にとつて大きな約束ではないでしょうか。ヨハネ福音書17章3節によれば、「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」とあります。キリストを知ることとはキリストを信じることですから、信仰者は永遠の命はすでに与えられているということです。そういう意味では、わたしたちはすでに永遠の命に入っているのですから、先のことは心配しなくてもいいのです。そういうことを考えますと、わたしたちは、まことに感謝すべきところに身を置いていることになりました。

## (2) 終わりの日を待ち望む

今一つ大切なことは、終末信仰です。終末信仰を裁判沙汰にして、まるで閻魔大王が舌を抜くようなおどろおどろしい話にしてはいけません。ヨハネの黙示録21章にあるように完成された世界の到来を待ち望むというのが終末信仰の本来的な理解です。

「私は死んだらどうなるか」という問いは、宗教と関係があるうとなかろうと自分が死ぬとなれば、かならず問う実存的な問いといわれます。死んだ後は何もないという人であっても、死後は何もないと言わねばならないのです。

この問いの背後には、生きている間に人は未完成のこと、心残りのことがあり、死を越えてその完成や決着をつけたい思いがあるからでしょう。考えて見れば、私たち

の人生には、あれもしたかった、これもしたかったという思いを残すことがあります。あるいはできることならこんな人生は送りたくなかったという思いもあり得ることで。また死ぬに死ねない事情を抱えたまま、この世を去らねばならぬこともありましよう。人の人生は、有限であり、また相対的です。限りある時間のなかではできることもまた限られます。この人生は善かったのか、悪かったのか、評価は定まりません。人生には未完成のことがいろいろあるものです。物事の完了を見ないまま人生を終わることを受け入れねば、死を迎えることはできません。

死は人生の終わりではありませんが、わたしたちは人生を未完了のまま、究極の終止符を打ちたくはないのです。死を越えたところに究極の完成がある、その願いが「私は死んだらどうなるか」との問いになって表れているものと思われまます。

この問いに聖書が終末論をもって答えてくれるのは、幸いといわねばなりません。終末を待ち望むことは究極の完成を待つことです。終末の出来事を閻魔大王の裁きのようにおどろおどろしく説くならば、いたずらに不安をかき立てるに過ぎません。死をいかがわしい宗教の格好の餌食とするだけでしよう。

成熟した宗教にとつて、終末は完成を意味するものです。造られたこの世界は、相対的であり、有限であり、変化する世界だからです。人はそのなかにあつて、究極のもの、絶対のもの、永遠なるものを求めます。終末はそれが到来することにほかなりません。聖書は、キリストにそれを見ました。「わたしはアルファであり、オメガである」といわれる究極の完成者であるキリストが終わりの日に来てくださいます。

「私は死んだらどうなるか」とは、完成としての終末を望む問いでもあります。やがて終わりの日、来たりたもう究極のお方を待ち望むことができれば、死の彼方を待ち望むことができます。そうすれば、あのキリストの言葉「あなたは、今日わたしといつしよに樂園にいる」が、私のものとなることでしよう。

そして、そのお方にすべてを委ねて生きるときには、「明日が世界の終わりでも、わたしは今日、リンゴの木を植える」日々の生き方となりましょう。これこそ終末信仰に生きる者の極みではないでしょうか。

ルターは「キリスト者は、絶望ですら選び取る勇気を持つ」と申しました。委ねるところを知っているからです。絶望ですら選び取ることのできる勇気は委ねるところから生まれます。信仰とは究極のお方にすべてを委ねる決断です。そういう意味では信仰生活を送る意味は大きいと言わねばなりません。

### (3) 葬儀とスピリチュアル・ケア

キリスト教信仰に基づく葬儀は、神学的な意義とはまた別の視点で、スピリチュアル・ケアの最終到達点と言えるかもしれません。生きている者も死んだ者も共に、ひとりのお方を礼拝するからです。そこには生と死を結ぶのであり、天の国の地上におけるしるしとなっているからです。

キリスト教信仰においては、葬儀は単なる死者を悼む儀式でないことは、誰しもが

知っていることです。礼拝は主なるお方を賛美する最高のかたちであって、生きてい  
る者も死せる者も共に礼拝をします。如何なる教会であつても礼拝をしない教会  
はありません。「キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きてい  
る人にも主となられるためです」(ローマの信徒への手紙14章9節)とパウロは言います。葬  
儀の礼拝は、主に召された者と礼拝に参列するわたしたちが共に主を賛美するのです。  
その意味では礼拝は死者と共にいる世界をこの地上に持つていくということです。こ  
こには主からいただく大きな慰めがあり、究極の安らぎのときがあります。そう考  
えるとき、葬儀が礼拝であるというのは大きな意味を持つと言わざるを得ません。

#### (4) 天国での礼拝—わたしの物語として

「うちの主人は、今なにをしているでしょうね」と長年連れ添ったご主人を亡くさ  
れた夫人が言われます。「天国で礼拝をしておいになります。他にすることはありま  
せんから」とわたしは申しました。その夫人は「わたしよりも熱心に礼拝をしてい  
るのですね」と笑つておいででした。

(補足…「ほかにすることはない」とはユーモアを込めていますが、反面、絶え間なく  
礼拝をしているということでもあります。礼拝は神に捧げる最高の賛美のかたちであ  
り、天国では「昼も夜も神殿に仕え」神を絶えることなく賛美し、神の栄光に包まれ  
た礼拝がすべてです。)

教会は長い歴史のなかで神を賛美し、祈り、信仰告白の行為を礼拝という形に結集してきました。形式的なちがいはあっても、礼拝をしない教会はありません。これ以上の信仰表明の形はないからです。しかしながら地上での礼拝には人間的な要素が影を落とします。説教を聞きながら、つい居眠りをすることがありますでしょう。主の祈りを唱えながら、心のなかでは別のことを考えているかもしれません。地上のことには、欠けたものが常に付きまといまいます。

それに比べ、天国では地上のすべてのことが完成されます。最高の信仰表明としての礼拝もまた天国において完成されます。その礼拝は、絶えることのない賛美と神の栄光に満たされた礼拝です。ヨハネの黙示録に描かれた礼拝のさまは、天国の礼拝をよく表わすものです。

愛する者と共にあつた地上での暮らしが密であればあるほど、それだけ思いも深く残るでしょう。ときには、こういうことになるのなら、あれもしてやりたかった、これもと思いが尽きません。その人生が苦渋に満ちたものであつたとすれば、今は天国で安らかに眠っていると思いつつも、心から離れません。

地上と天上を共通に結ぶものは、礼拝であると信じていることができるのは、なんという慰めでしょうか。毎聖日の礼拝では、地上の礼拝が営まれます。天上でも礼拝が行われています。しかも完成された礼拝です。毎聖日の教会の礼拝では、私たちは聖壇のこちら側から礼拝に参加し、すでに主のもとにある者は聖壇の向こう側で天上の礼拝に参加していると信じていることができるなら、悲しみのなかにいる者にとって、これ

以上の慰めはありません。

## 第2章 パネル・ディスカッション

パネリスト

賀来周一牧師（キリスト教カウンセリングセンター相談所長）

田中良浩牧師（ピースハウス・チャプレン）

石居基夫牧師（日本ルーテル神学校准教授）

## 一 賀来周一牧師

明日が世界の終わりで、今日、リンゴの木を植える

先の講演での話に少し加えさせていたと思います。その前に、死んだ人たちは「天国では礼拝をしている。そしてほかにすることがない」ということを「わたしの物語」として申しましたが、これはヨハネの黙示録に基づいてのことで、天国では最高の神さまへの賛美が絶え間なく捧げられているという意味です。どうぞ誤解のないようにと思い、一言付け加えさせていただきます。

スピリチュアル・ケアに従事しておりますと、死に逝く人がどのような思いで死を迎えるか、ということを考えますと、最も望ましい結果は、皆さんご存じのルターの言葉、「明日が世界の終わりでも、『私』は今日、リンゴの木を植える」に代表されると思われます。この言葉は、『25時』を書いたゲオルギウが言ったとか、ルターが言ったのだとか諸説あるのですが、ルターが言ったということが定説になっております。

「明日が世界の終わりでも、『私』は今日、リンゴの木を植える」、そのような生き方が死を前にしてできれば一番望ましいわけです。そのような生き方ができるように援助するのが、スピリチュアル・ケアの究極の援助目標と言えるでしょう。もちろん、途中で病状が悪化して亡くなる方がおいでになるかもしれないから、そのような結果に至らないことがあるかもしれません。しかし、私たち信仰者にとっては、この生き方は望ましいことと思えます。また、そのようにできることが信仰者の特権で



あると思います。

これに加えて、申し上げたいことがあります。講演でも申しましたが、それこそ人間の知恵では答えることができないような問いが、あつて、それに対して、人間の知恵には答えがないけれども聖書が答えを持っているということは、あらためて、教会が、聖書が持っているという大きな賜物について考える機会が与えられたと思つてい

るのです。いわば、世の中が教会に「どう答えるのですか」と問いかけているようなもので、教会はこれに答える責任があるということであり、また答えを持っているということ

です。これは、現代における宣教師的な課題でもあると思うのです。だからスピリチュアル・ケアというのは、死に逝く人だけをケアするだけの問題ではなくて、「世の中の持つている問題に聖書が答える」という面も含めて考えなければならぬ面も持つています。

わたしたちは伝道というと、「教会が世の中に向けて福音を語る」という方向で考えてきました。しかし、「世の中が教会に答えを求めている」ことにも目を向ける必要があると気付かされました。これは、スピリチュアル・ケアに従事する中で得た、ある意味において副産物でもありますが、これからの教会はもつとこのことを重要視してもよいのではないかと思います。そういう意味では、「スピリチュアル・ケアの問題は、同時に教会の宣教の問題である」とも言えます。

## 一 田中良浩牧師

### 「ターミナル」は「出発点」

田中良浩です。仕事の内容とそのいくつかの経験をとおして、神さまの恵みを分かちあつたり、課題を考えられたりすることができるところを感謝しています。

約3年前、私はアメリカから仕事を終え、4年半ぶりに東京に帰ってまいりました。その時、家に電話が付いてから最初に外部から電話をいただいたのは藤井邦昭牧師で、明るい声で「お帰りなさい」って言うてくださったのです。「今度、歓迎会をするから」とおっしゃったので、「ああ、ありがとう」と言つて電話を切つたのです。そうしたら夜になつてもう一度電話があつて、「ピースハウスのチャプレンをやつてほしい」と、そう言われました。いやあもう帰つて来てひと月もたたないうちに、こういう仕事を与えられる・・・。

その年の秋に、日野原重明先生とお会いする機会があり、「ぜひ牧師がほしい」とおっしゃいました。お話の中で、「ご家族の方はなんておっしゃっていますか」とおっしゃいましたが、それはいい質問でした。娘の一人などは、「その仕事が実現しないようにお祈りしています」などと言ひまして、「アメリカから帰り、かなり疲れているから、もう解放してもらつて、ゆっくりしてほしい」と言つていたのです。けれども、日野原先生からのお電話があり、「一緒にやつてください」という温かいお言葉から、働かせていただくことになりました。

その翌年の1月からインターナショナル・ワークシヨップが始まりまして、1月にも数回おじゃましたり、賀来先生がお話しになったような講演会が、私たちのホスピスでもある、そういう会に出席したりしました。そして、3月には藤井先生との引き継ぎで、ほとんど毎日ピースハウスに行っていましたので、それから数えますとほぼ2年半、この仕事を続けてきております。

仕事が始まる前に、日野原先生が私を牧師として「ピースハウスにお招きくださった」ことを改めて思い出して、どうしたらよいか考えました。私がピースハウスで働く場合に、やはり牧師としての務めであることをはっきりさせたいと、そう思ったのです。なぜかといいますと、ピースハウスでも毎週礼拝が行われますし、聖餐式もあります。洗礼式も行います。しかし、日本福音ルーテル教会の規則では、教会の牧師が外部で働くことについての規定がありませんでしたから、教会としての職務を行う場合、やはり牧師として、承認がなければ難しいということ、考えてしまったのです。その点については、理事長と山之内正俊先生が話してくださいまして、具体的には東京教会からの派遣牧師として、現在はピースハウスで働かせていただいています。この会場には、池袋教会の会員であつて、私たちピースハウスの最高顧問である岡安大仁先生が、私がきちんとした話をするかどうか監督に見えていらつしやるので（笑）、先生からお話をお聞きくださればありがたいのですけれども。

ホスピスに牧師として招かれ、毎週礼拝することができるとは本当に幸いだと思つています。

この宣教フォーラムの冒頭での教区長の大柴讓治先生のご挨拶で、「教会の礼拝というのはターミナルケアである」とおっしゃっていました。「ターミナル」というのは「最終的な」ということ、「ケア」は「看取り」あるいは「お世話」ですから、「一人の人の最終的な看取り、あるいはお世話をすること」を「ターミナルケア」と呼んでいます。通常、ターミナルケアはその様な意味ですけれど、私としては、そこに聖書の持つ意味を込めたいと思っています。話をするチャンスがあるときには、この「ターミナル」という言葉は、英語では「最終目的地」「人生では最後の地」といいますが、同時に「出発」と言う意味もありますとお話しています。「ターミナル・ステーション」というのは「終着駅」ですけれども、同時に「始発駅」でもあるのです。確かに死は人生の最終の駅です。しかし「神さまが約束してくださった新たな神の国での聖なる命、生活、そこへの出発点でもある」と、そういう理解を持って、私はこの仕事をしております。

### 共に居ること、聴くこと、祈ること

賀来先生がこのパネル・ディスカッションの最初のお話の中で、「ターミナルケア、いわゆる最後の看取りを、宣教論的に考えた方がよい」と、そのようにおっしゃいましたが、その一つの事例をお話したいと思います。

私が務めておりますピースハウスの場合は、通常、18人から20人ぐらいの患者さんが入っていらっしやいます。一年間に200人以上の方が亡くなります。最近はい

スハウスに來られてから2〜3日で亡くなるというケースもありますので、もっと増える可能性があると思います。

ほとんどの死を私は看取りますけれども、一人ひとり全部違います。「人は生きてきたように死ぬ」といろいろな人が同じように言うのですが、私は首をかしげることがあります。本当に誠実に生きてきた人が、どうしてこんなに苦しまなければならぬか、というケースが多々あります。まさに不条理な死というのがたくさんあるわけです。

亡くなられる方についての「ホスピスサマリー」という記録がありました、亡くなった方について私がどう関わったかということを一一人ひとり全部書くわけです。もちろん関わりようがなかった方や、短期間の方については書きませんが、それ以外の方々につきましてはほとんど書きます。

ごく最近書いたケースでは、ある一人の方について私は強い思いが残っています。その方は40歳ぐらいの女性で、まだお子さんも二人おり、若い方でした。入院された時には、まだ痛みのコントロールができていないということで、本当に苦しんでおられました。ピースハウスの医師は、大変ペインコントロールには優れた方々です。他の医師が学びに來られるほどの専門家ですから、痛みのコントロールはできなくはないのですが、当初はやはり苦しんで、数日を過ごした方が何人もいらっしやいます。この方もそうでした。

「どうしてこんなに、死ぬ前に苦しまなくてはならないのか。こんな姿は息子や娘

には見せられない。母はまだ健在です。先に逝くことは親不孝・・・とおっしゃいました。私は2回ほどこの方を訪ねたのですけれども、簡単に言えば私は一言も発することができずにいました。ただ、私にとって慰めだったのは、私が病室に入って行った2回目も同じように、非常に自分が苦しいこと、悲しいこと、失望していること、救いがないこと、それをどんどんしゃべってくださったことです。皆さんは不思議にお感じにならないかもしれません、私はそう思いました。お訪ねした2回ともそういうお話をお話しになる。そして、数日たったあるときに、担当のナースが私に、「あの方が私に、チャプレンというのとはどんな仕事をなさるのですかと、聞きましたので、私がどの様な仕事か答えておきました」と言ったのです。

ところで、私が働きはじめた2年半までは、名札にはまだ名前だけしか書かれていませんでした。医師かチャプレンか一般の事務職かも分からない、ただ名前だけでした。ピースハウスでは16年間それで来たのです。けれども2年半ほど前から、やはり名札に職種を記入しないと判らないということがあって、職種を入れ始めました。私は、「チャプレン 田中良浩」と書かれた名札を首に掛けました。その時すぐ事務に行つて、名札の職種を『チャプレン』ではなく『牧師』にしてください」と頼んだのです。事務の担当者は「じゃあそうしましょう」と言つて簡単に承諾してくれました。しかし、私は3く4日経つてから、もう一遍、事務所に行つて、「いや、『チャプレン』がいいです」と言いました。すると、「牧師の方がよくわかるでしょう？」と言つて事務所の方がみんな言うのでした。

私が「チャプレン」のままにしたのはなぜか分かりますか。「牧師」と書くとは分かります、教会の、キリスト教の牧師だと。分からなくても分かった気持ちになつてくれるのです。いいこともあるのですけれども、不十分なのです。「チャプレン」というと、何なのか分からない方が多いので、聞いてくださるのです。「チャプレンってどんな仕事をされるのですか」と必ず聞いて下さるのです。私はチャプレンの仕事が何かをよく話しています。

その担当のナースが「答えておきました」と言ったので、私が「何て答えてくれたのですか」と訊くと、「先生がおっしゃっているように、答えておきました」と言うのです。私は、何て言ってくれたのかなと思つて、もう一回訊きました。「先生がおっしゃっているように、『共に居ること、聴くこと、祈ること』と答えておきました」。

先ほど、賀来先生が『*Witness*』 共にあることが大切だと、最近はやわれている」とおっしゃいました。日野原先生が私たちのホスピスを創る前に、ロンドンにある「セントクリストファー・ホスピス」という新しく創設されたホスピスを訪ねられました。そこで創設者のシシリー・ソンダース医師にお会いになりました。そして、いろいろ教えていただいた最後に、「ところでホスピスの一番中心なこととは何ですか」と訊かれたら、「*Being with the patient.*」と答えました。「患者さんと共に居ること」。それは、医師にとつても、ナースにとつても、チャプレンにとつても、ボランティアにとつても同じ重みがかかる言葉なのです。「患者さんと共に居ること」。

ですから私もそれを第一に、「*Being with the patient.* 患者さんと共に居ること」。

その次は、「Listening to the patient. 共に居て患者さんからお話しを聴くこと」。  
そして、三番目は私が創りました。「Pray for the patient. 患者さんのために共に  
居て祈ること」。これらのことを聴いた人たちの中にはナースもいて、そのことを覚え  
ていて、先ほどのように答えてくれたのです。「ありがとうございます」とそのナ  
ースに言いました。

それから私はその方を訪ねました。そうするとその方は、もう一度私に、「チャプレ  
ンって何をするのですか」と訊きました。確認しようとしたのです。それで私は同じ  
答えをしました。「ナースが言ったでしょう」とは言わずに、ナースと同じように答え  
ました。するとその方はニコツと笑って、「私を助けてください、お祈りしてください」  
と言われました。私はその時、「このホスピスはキリスト教の信仰を中心にして建てら  
れました。それで、ホスピスの入り口には聖書の言葉が定礎の石に刻まれています。  
その詩篇はこういふ箇所です」と言って、その詩篇の箇所（56章14節）を読みました。

『あなたは死からわたしの魂を救い 突き落とされようとしたわたしの足を救い  
命の光の中に 神のみ前を歩かせてくださいます。』

この詩の中から、「命の光の中で」という言葉が定礎の石に刻まれています。この意味  
を少しお話して、お祈りをしました。その方はお祈りが終わると（私はいつもお祈り  
するときに手を取ってお祈りするのですけれど）ずーっと私の手を握ったまま離さず、  
そして涙を流して、ジーツと私を見つめて、「苦しいのですけれど、この涙は、『あり  
がとう』という気持ちから出た涙です」と私にはっきり言ってくれました。



この方のホスピスマリーを書いた時、私はその時の情景を思い出ししていました。それが最後になったのです。

このホスピスの創立理念が「聖書」にあること、そうしてこのような詩篇56編14節という普遍的な「聖書のみことば」が描かれていること、このホスピスの中では患者さんご家族も、命の光の中で生活をしていくのだと—そういう教えがすでに置かれているということは、素晴らしいことだと思われました。

もう一つ、病院には医師と看護師、ナースがいれば、それで事が済むと思われがちで、日本のほとんどの病院がそうでしょう。チャプレンのいる病院というのはごくわずかです。けれども、私たちのいるホスピスでは、医師、看護師、ボランティアのほかに、チャプレンが置かれている。しかも、チャプレンが一人で孤軍奮闘するのではなくて、医師や看護師と協働できる。前述の場合には、ナースが私に代わって、「チャプレンの働きとはこうですよ」と言ってくださっている。私はすごく感謝しています。こういう協働の業というのが行われているところに、私は大きな意味があると思ひ、この働きを感謝しているわけです。

## 一 石居基夫牧師

一人ひとりが違う死

石居・ルーテル学院大学の神学校教諭、教義学の方で教育の働きをさせていただいておられます。私がアメリカで学んで論文を書いてきたことは、きょうの宣教フォーラムのタイトルに表されるような、「私たちにとって切実な生きることと死ぬことに関わること」、あるいは「死と復活に関わること」であり、そうしたことについて学んでまいりました。そして、今もそのことについて研究を続けています。

しかし、私の原点は、神学校の現場ということよりも—もちろんそこで働いていることも非常に大事なことと考えているわけですが—「私の一番はじめの出发点、原点は『教会』」です。教会の働きの中で牧師として育てられました。そのことの中で特に武蔵野教会で働く中で、多くの方々の人生の終わりに私が共に居させていた。いて、その中で教えられたこと、信仰についても深く知らされたことがたくさんありました。そのことが私にとって、自分自身にとってのとても大きな新しい出会いだったと思っています。

それは、牧師であることゆえに、それだけ多くの方々の命の問題について、あるいはそこに関わる神の働きについて、共に祈り、考え、また分かち合うことができたこととは、私だけではないのですが、「牧師としてのすごく大きな、恵み多い事」だと思っています。そのことに支えられて、私はこの研究のテーマを選ばせていただいたのだ

と思っています。

死の事柄ということ、私たちが一般的に語るとするならば、実はたくさんの方が語られると思います。人が死ぬということはみんな分かっていることですが、自分の問題、あるいは愛する者の死ということについては、それは一般的に語るのとはまったく違った、深みと重みを持つてくるものと思うのです。

今日はそのことの中で、賀来先生の先の本当に深い主題講演をいただいたところで。大変興味深いと思ったことは、私が自分の死ということを考えていく、その問題を見ていくときに、賀来先生は「私の物語」という考え方について話してくださいました。実際にワークシヨップのようなかたちで12の項目を考えながら、自分自身の死ということを深く捉え、そこに物語を持つて行くということです。実に一人ひとりがみんな違う物語を持つているのです。賀来先生は賀来先生の物語をお持ちになつて、田中先生は田中先生の、私は私の物語をたぶん紡いでいくことになると思っています。

天国はこの世での最高の幸せ以上のところ

「死んだらどうなるか?」「天国では礼拝だけだ」と言われると、「どうしようか・・・」と。しかし、逆かもしれません。「何をしても礼拝だ」ということかもしれないので、皆さんが何をして、それは神を賛美することにつながるという、そういう恵みに与ることであるかもしれません。私たちが自分自身の物語をどのように紡いでゆくのか

が、実は自分の課題としては大事なことなのだと思うのです。

どういう物語を皆さんは描かれるでしょうか。武蔵野教会で特伝（特別伝道集会）をさせていただいたときに、デーケン先生（イエズス会司祭）をお呼びしたことがありました。デーケン先生は「死後の世界」ということについて、どうお考えになりますか、というようなやりとりがありました。先生が説教でそのことをお話しになられたのを今も印象深く覚えています。デーケン先生がどういうことをおっしゃられたかという、こうです。

「皆さん、死後がどういふところかとお考えかと思いますが、ご自分が一番幸せだったことを思い浮かべてください。そして、それが美味しいものを食べた時とか、とてもいい温泉に入った時とか、いろいろなことを思い浮かべられるわけで、いろいろな思い出があります。その中で一番幸せなことをどうぞ思い浮かべてください。天国はそれ以上のところですよ。」そういう言い方もあるのだなと思いました。

私たちは、おそらくそのように私たちの死んだあとについて、どういふ状態なのかと考える時に、いろいろな物語を紡いでいく、いろいろな言葉を持っていくことが許されているのだと思うのです。けれども、同時に私たちはそのことについて考えると、「いったい私の物語はきちんとしたキリスト教の信仰の物語になっているのだろうか」が心配になったりもするのです。これが、私たち日本人が死の問題を考えていく時の、一つの大きな課題なのです。

その問題を表すことの一つが次のようなことです。私も特伝など講談奉仕で招かれ

て、死の問題や教義の問題についてお話しさせていたとき、ときどきご質問をいただくことがあります。質問受ける時に、「何かご質問がありますか」と訊いたときには、質問は絶対出て来ないです。あとでお茶の時間になると出てくるのですね。

それはこのような質問です。「今日、先生のお話を伺ったので、私は天国に行くのが約束されているということがよく分かりました。でも、うちの爺ちゃんはお寺だったのですけど、極楽浄土に行っているのではないかと思うのです。私と爺ちゃんは、行くところが違いましょうか」と。それが嬉しいことなのか、寂しいことなのか、そこまで私は訊かなかったのですが。別れ別れになるのかどうか、実は私たちにとってそれは、ちよつと考えると、どう考えていいのだろうかと思う事柄なのです。「死んだあとどうなるのだろう」ということ―宗教が異なると、みんな違うところに行ってしまうのか、キリスト教の天国と仏教の極楽浄土とは違うのか―これはなかなか難しいことですね。私がお答えをするとなると、「神さまは、すべての人の神さまですの心配いりません。みんな神さまの懐の中にある者だから」と答えます。

こうした一人ひとりがそれぞれに、そのような探し方をしながら、「きつと包みこんで下さる神の大きな御業」を考えるわけです。しかし、これは私たちがキリスト教の信仰の中で考えてゆくときに、このことは本当のところ、どうということなのか、なかなか難しいことだと思っています。実際、私たちが自分の物語を紡いでゆこうとしたときに、その言葉を、「キリスト教的なものなのか」、「自分勝手な物語を描いてしまっているのか」、私たちはふと不安に思ったりするのだろうと思います。

そこで、私たち日本人が、死後のことをどう考えてきたか、考えているのかについて、改めてしっかりと見つめてみようというのが、私の研究の一つのテーマです。日本人がどういう思いを持っているのか、どういう考え方や感じ方を持っているのか、そして、その思いに対して、キリスト教の信仰は何と答えるのだろうか、ということです。

賀来先生が「キリスト教は最終的な答えを持っている」とおっしゃってくださいました。そうだと私も信じています。その最終的な答えを私たちが聖書から汲み取っていくためにも、私たち自身が「日本人として持っている問い、日本人として持っている求め、それが何か」を改めて掘り起こしておくことが大事なことだと思っています。そのことをもう少しお話しますと、伝統的にたぶん日本人の中には、二つの宗教的な求めが、あるいは霊性（スピリチュアリティ）があるのだと私は考えています。

### 自然志向型と共同体志向型

一つは『自然志向型』のスピリチュアリティです。

自然志向型の霊性あるいは宗教性と言ったらいいでしょう。どういうことかというところ、それは、「死んだら自然の中に帰ってゆくもの」というそういう気持ちです。古くから日本人は、日本人の魂が帰ってゆく場所は「山」であると考えていました。でもこれには、実は南方系からの移民、南方から入ってきた流れと、北方から入ってきた流れとで、少し違う形を持っています。南方から来た人たちは「海のかなたへ帰って

ゆく」というもので、「ニライカナイ」という沖繩の人たちが他界話を伝えてきた、「海のかなた」という一つの思いを持って考えてきた流れでもあります。

北方の方は、「山の上」に死者は宿ると考えます。日本人はそれが合わさりながら、日本はだいたいどこでも山はありますから、海のかなたに流れていっても、それが鳥や月に乗って山に帰ってくる、というふうに考えています。それが日本人の中では「山に霊が宿る」という考えです。大きく言うと「自然の中に帰る」そういう気持ちを持っているということなのです。

これはたぶん私たちの思いの中に、例えば、散骨の思いとか、樹木葬、海洋葬などがあり、最近では宇宙葬というものもあるようですが、それらのことを指します。宇宙葬は、ロケットで宇宙に飛ばして地球を9回軌道を回って、そして最後に落ちるのですが、落ちるときに大気圏に入ると燃えて星になる―死んだら星になる―ということとどそうです。日本人の中には何か、とにかく「自然の中に帰ってゆく」という、そういう気持ちが続けてきたというのが一つです。

もう一つは『共同体志向型』といって、「共同体の中に生き続ける」という気持ちです。

日本人は死んでしまったら居なくなるとは、考えていないのです。死んでも、その死者が自分たちの共同体の中に生き続ける、と考えています。例えば、家の中には仏壇があって、その仏壇に死んだ人の霊はあるとして、何か事があればそこに行つてチンと鳴らして、「お爺ちゃん、今度試験が受かった」とか「結婚します」とか、報告

をしたりします。何か戴き物をしたら、まずその仏壇に供えて、そのあと家族で戴くことになります。また、毎日ご飯を供えたりします。それは、死んだ者はどこかへ居なくなつたというのではなく、「死んだ人も実はずーっと自分たちの交わりの中に居続けている」という気持ちを持つているということです。これらは、日本人の中に、大事にされてきた一つの「死後の世界」「死んだらどうなるか」といったときの一つの受け取り方、考え方なのです。

私はこの『自然志向型』と『共同体志向型』とは、一つの対になっていると思つています。「ふるさとメンタリティー」と言つてもいいかもしれません。「死んだあととは、ふるさとへ帰つてゆく」ということです。私は東京生まれですが、一般に「ふるさと」と言つたとき、何を思い浮かべるかと言いますと、田んぼや畑が広がつていて、そして細い土の道があつて、村があつて・・・という、自分たちに「懐かしいなと思われするような日本の風景」です。そうした場所に自分たちの魂が帰つてゆくという気持ちを持つていて、そこには、「自然の中に帰つていく、あるいは自分を受け止めてくれる共同体の中に帰つてゆきたい」という、そうした日本人の気持ちがあると思います。これは、私たちが自分の「死」ということについて物語を考へていくときに、大事な要素になっていると考へています。

しかし実際に、私たちはこの現代の中にあつて、どういふ現実であるかがもう一つの課題になります。伝統のないわゆる共同体、自然というものが失われてきた現代を、私たちは生きていくのだということ、前述の「ふるさと」が現実にはないということ



です。自分たちの「死」を受け止めていた古い共同体がすでに失われていることだと  
思うのです。

もちろんそれでも、私たちは、最近私も父を亡くしましたが、そういうことが起  
れば、ふだんはなかなか会うことができな親戚が一堂に会し、ああ懐かしいなど言  
いながら、その交わりを確認し、そのことの中で慰めも与えられるのです。しかしそ  
れはやはりたった一度きりのことです。ふだんはそのようには集まりません。だから  
私たちは、そうした大きな共同体などがもう失われてしまっている、そういう中で、  
私たちは死の問題を今、どういうふうに受け止めたらいかがが一つの課題です。

### 自分の物語を完成して下さるのは神

自然ということもそうです。それは思い描けば、「自然」というふるさとの風景を思  
い描けるかもしれませんが、そうしたものがすでに私たちの中に失われているとい  
うことです。そういう現代の中で、私たちは、どういう言葉で紡いでいったらいいのか、  
これはとても大事なことだと思っています。

もし、聖書の言うことが、こうした私たちの「ふるさとメンタリティー」に対して  
答えを持つものであるなら、それは「天」のことですから、そのことの意味を深く深  
くとらえて答えていくということが大切です。神さまが創られたこの世界、自然や共  
同体、私たちの命、それらすべてを回復してくださる「天」、「神の国」、「創造の完成」、  
「失われているものを回復してくださる」その神さまのみ業を、私たちはどう言葉と

して紡いでいくのか。そして、私たちが言葉で紡ぐということは、私たち自身がそのことに責任を持って生きることであると思っています。そのことも私たちの大事な課題であり、そうしたことを考えることも大事な課題だと思っています。

もうひとつ。私たちが語る言葉はいつでも言葉足らずで、私の物語を語ろうと思っても、自分自身のことを本当に自分はわかっているのだろうかと思いません。そういう自分自身の視野の狭さとか、自身の罪深さを抱えていて、「私には語れない」と思われる私たちがいます。ましてやその最後の時まで、「私は自分の物語を分かっているだろうか。覚えていられるのか」だんだん前ものことも忘れてしまうようなことも起こるわけですから、そういう私たち自身をどう語るか。それは私たちのもう一つの課題です。

けれども、「聖書の答え」は、賀来先生もお話になりましたが、「完成してくださいさるのは神さまだ」ということだと思っています。「神さまが語ってください」ことだと思いません。アブラハムの場合、イサクの問題、ヤコブの問題は、罪深く、欠けが多くて、間違いだらけで、迷いだらけの物語に違いありません。けれども神さまが物語られる。そのときに、私たちに知られない意味がそこに置かれているということですね。私たちは、自分がすべて知っているわけではないのです。私たちは許されて分かったことはあるけれど、私たちはいつでも不確かな者でしかないので。

その私たちの物語を神さまにゆだねていく。「神さまがどんなふうに私のことを物語ってくださいさるのだろうか」と。そのことに耳を傾けていく歩みが、私たちの生涯の

「みことばに聴いてゆく歩み」ではないかと思っています。そして、私たち自身がそういう物語を神さまから聴きながら、私たち自身の物語として、私たちが受け取ってゆくためには、教会における交わりがとても大事だと思っています。

牧師は、私もそうですが、先生方もそうだと思いますが、お葬儀でその方を語るのです。しかし、その方の物語ではなくて、それは「神がその方にどのような働きをなさったかという物語」です。それは決して牧師がひとりでできることではありません。それはそういう人々の交わり、そこに関わった教会の群れのただ中の交わりの中で、はじめて紡ぎだされる物語だと思っています。

私たちはそれぞれの教会において、それぞれの交わりの中で、私たちが自分自身の物語を、神の言葉を聴きながら、紡いでいく。そういう交わりを創っていくことができたら、本当に私たちは、「御国とつながった一つの交わりに生かされていく」ということを、私たち自身も受け取っていけるのだと思っています。

### 第3章

### 「死」についての説教など

# 『死への準備についての説教』 マルチン・ルター（1519年）

（注…この時期のルターの著作には、ローマ・カトリックの残滓が残っていると言われています。）

## 第1

死はこの世と、この世のすべての営みからの別離であるから、人は自分のこの世の財産を然るべく適宜に整理し、あるいは死後遺族近親の間に、けんか争論、その他いざこざのたねが残らないように整えておくようにすることが必要である。これは、この世からの肉体的もしくは外的な別離であり、この世の財産への告別である。

## 第2

人はまた靈的にもこの世から別れなければならない。すなわち、わたしたちの心を傷つけたすべての人々を、ひたすら神のゆえに、心からやさしくゆるさねばならない。また反対に、わたしたちも人々の心を傷つけたにちがいない、そうしたすべての人々から、ひたすら神のゆえにゆるしを請うて、わたしたちの魂がこの世の面倒を背負ったままにならないようにしなければならない。

## 第3

こうして地上のあらゆる人々に別れを告げたあとは、ただ神のみを目当てとしなければならぬ。死の道も神へと向かい、そこへわたしたちを導いていくからである。ここに狭い門、いのちに至る細い道が始まる（マタイ7・14）。この道は狭いが長くはない。ちやうど子供が母胎の小さな住居から、この広い天地、すなわちこの世へと生まれ出るようなものである。死という通路が狭いため、わたしたちはこの世の生活が広く、あの世の生活が狭いもののように考えがちである。しかし、死後になお大きな世界と喜びが存在することを知っていなければならない（ヨハネ16・21）

#### 第4

こうした旅にのぼる心備えまた準備として第一に必要なことは、純粹な告解、ざんげをして、キリストの真実の聖体と終油との聖なるキリスト教的サクラメントにあずかる用意をし拝受することである。サクラメントは、信仰に役立ち、信仰を励ますしるし以外の何ものでもなく、信仰がなければそれは全然無益なものである。

#### 第5

罪《に心を労する》よりもサクラメントとその効力とに思いをいたすべきである。しかし、正しく敬うにはどうしたらよいのか、またその効力とは何であるかということを知らねばならない。敬うとはそれが真実であり、その実現を信じて「この身に成り

ますように（ルカ1…38）」と言いつ切ることである。

## 第6

サクラメントの効力を認識するためには、サクラメントが敵として戦うべき害悪を知らなければならぬ。害悪は第1に、死の恐るべき形相である。第2に、罪の戦慄すべき種々相である。第3に、黄泉と永遠ののろいの堪えがたい、しかも回避しがたい形相である。この三つはいずれも、いろいろな要素と結びついて次第に増大し、力を増してくる。人は死の想念の重荷をあまりに多く負いすぎると、神を忘れ、死を避け、死を憎み、最後には神に不従順となりはてる。わたしたちが小心であったり、あるいは不適當な時期にあまりにも死を見つめすぎると、死はその力その強さを發揮する。

## 第7

罪も、またあまりにもこれを見つめすぎると、かえって増大してくる。わたしたちの良心が弱く、自ら神の前に恥じたり、はなはだしく自己を責めたりすると、ますますその勢いを助長することになる。これでは悪魔は願つたりの蒸し風呂を見つけたことになる。どれほど多くの人々がもつと些少な罪で罰に定められたかを力説し、人は絶望し、死を厭うようになり、結局、神を忘れ、死に至るまで不従順にさせられる。これは人が、罪を考へたり取り上げることが当然であり、有益だと思つたりするところから来る。こうして人は自分の準備不足や未熟さを知って、自分の善い業までも罪だ

と思ひ込み、ここから死を厭う心、神の意志に対する不従順、永遠ののろいが生じる。なぜならそのような時は、罪について熟慮する適当な時機でもなければ、またその余裕もないからである。かようなことは健全である時になさねばならない。このように生存中の一切のものを転倒させるものが悪しき霊である。「わたしの罪はいつもわたしの前にあります（詩編51）」とあるように、わたしたちは健全である間に、死と罪と陰府の形相を目の前に見なければならぬ。しかし、悪しき霊がわたしたちの目をふさいで、これらの形相を隠してしまう。そして、死に臨んで、神のもとにおける生命と恩恵と祝福だけに目をとめなければならぬ時になると、悪しき霊はさつそくわたしたちの目を開き、時機に不向きなもろの形相を見せつけて、わたしたちを不安におとしいれ、真実の姿を見せまいとするのである。

## 第8

陰府もまた、時ならぬときに、あまりにこれを見つめすぎたり、きびしく考えすぎたりすると増長してくる。そしてこの勢いを限りなく助成するものは、神の裁きに対するわたしたちの無知である。魂は悪しき霊に駆り立てられ、無益無用な好奇心いな危険きわまりない不敵な料簡を起こし、自分が救いに予定されているかどうか、神の摂理の秘密を探り出そうとする。この時、悪魔はとっておきの最大の奸計と力をふるい、うっかりしている人間を誘って、神より高いところに据え、神意のしるしを求めさせ、自分が救いに予定されているかどうか知らされていないことにもどかしさを感じさせ、



神を疑わせ、別の神を憧憬するように仕向ける。要するにあらしを送つて神への愛を吹き消し、神への憎しみを人々に起こさせるのである。人間が悪魔に従つて、このよ  
うな考えを許容すればするほど、その足もとは危険になり、ついに持ちこたえきれな  
くなつて、神を憎み冒瀆するようになる。悪魔はこのようにして本来なら喜んで死ぬ  
べき人間が死を厭うように仕向ける。人が予定説によつて悩まされるのは、陰府によ  
つて不安にさせられることに他ならない。ここで勝利を得る者は、陰府と罪と死とを  
一挙に克服したことになる。

## 第9

人はこれら三つの形相の一つでも家に入れないように、また禍を招かないようにあら  
ゆる努力をしなければならぬ。でないとならば外観と論術と実証によつて押し入  
り、わたしたちの心を占領するだろう。そうなれば人間はもうおしまいで、神は完全  
に忘れられたことになる。これらの形相がこの世にあるということは、人がそれらと  
戦つて追い出すためである。実際、これらが他の姿を取らず、ただそれだけで存在す  
るとしたら、悪魔が支配する陰府以外にはないのである。これに打ち勝つ秘訣は、こ  
られをまったく無視して、全然相手にしないことである。それには、死を生命におい  
て、罪を恩恵において、陰府を天において見るようにし、神ご自身かと思われるもの  
がこれと異なつたことを見るように提示しても、そこから引き離されないようにする  
ことである。神は異なつたことを提示されない。悪しき靈が見せかけをつくり出して

いるのである。

## 第10

あなたは死を、死そのものとして見たり考えたりしてはいけない。自分において自分の性質において死を見たり考えたり、神の怒りによって殺された人々や死に打ち負かされた人々において死を見たり考えたりしてはいけない。そうしたら、もうあなたはおしまいでその人たちのように死に打ち負かされてしまう。むしろ、あなたは目と心の思いとすべての感覚を死の形相から引き離し、死をただ神の恵みのうちに、ことにキリストにおいて見るようにしなければならぬ。この姿をしつかりと心に銘じ、注視すればするほど、死の形相ははげ落ち、戦い争う必要もなく、おのずから消滅する。こうしてあなたの心は平和を得、キリストと共に、キリストにおいて安らかに死ぬことができる。火の蛇に咬まれた時、イスラエルの子たちはこの蛇にはかまわずに青銅で造った死んだ蛇を仰いだ時、生きていた蛇はおのずから細って死んだ。そのように、あなたはキリストの死にのみ心をとめなければならない。そうすれば、あなたは生命を見いだす。

## 第11

同様に、あなたは罪を罪人において、またあなたの良心において見てはいけない。またいつまでも罪の中に留まっていて罰に定められている人々においてそれを見てはい

けない。そうしたら、あなたは罪の前に後ずさりして、罪に打ち負かされる。むしろ、罪を恵みのうちに、恩恵の姿において、すなわちキリストの十字架において見なければならぬ。十字架のキリストがあなたの罪をあなたから取り去り、あなたに代わって担い、その息の根を止めてくださった。これが恩恵であり、憐れみである。そのことを堅く信じ、目の前に置き、疑わないこと、それが恩恵に目をとめ、心に銘じることである。あなたがこのことを信じるなら、罪は決してあなたを損なわない。

## 第12

あなたは予定にともなう陰府と永遠の苦痛を、陰府そのものにおいて、あるいは罰に定められた人々において見てはいけない。また世界中にいる救いに予定されていない人々に、あなたの気を取られてはいけない。そのようなものを見ないようにしなければならぬ。たとえあなたがそれらと千年関わり合っても何の役にも立たない。神はあなたについてあなたよりも知っておられる。むしろ、キリストが陰府にくだり、永遠に呪われた1人として神から見捨てられた、その姿の中にこそ、あなたの陰府は克服され、あなたの不確かな予定は確かにされている。あなたはあなたをあなた自身において求めず、ただキリストにおいてのみ求めるがよい。そうすれば、あなたは自分キリストのうちに永遠に見いだす。自分たちを選んだ神の恩恵を喜び、そこに留まった聖徒たちの喜びの中にしっかり留まるなら、あなたもまたすでに選ばれている。しかし、キリストに目を留めず自分自身に目を向けるなら、あなたは逆戻りし、神に

嫌悪し、自分のうちに何の良きものも見いださない。悪魔は奸計を用いてあなたをその方向に駆り立てる。

### 第 13

キリストの輝かしい姿のみを夜中に、すなわち悪しき姿を見ない信仰を働かせ、神の言葉を響かせ、自らを励まし強めるならば、死と罪と陰府は全軍を上げて遁走するであろう。しかし、キリストはいつこのことをなしたもうたのだろうか。それはまさしく十字架の上であった。キリストは三つの姿を取り、悪しき霊とわたしたちの本性がわたしたちを信仰から引き離す時に用いる三つの形相に対応された。すなわち死を甘んじて受けその生命で死を克服し、罪を背負い服従によってこれを克服し罪に対する恩恵となり、愛ゆえにのろわれた者として神から見捨てられ、陰府を克服し神の最愛の子となり、誰でも信じさえすれば同じ神の子となる権能を賜うことを証しされた。

### 第 14

キリストはわたしたちが罪と死と陰府において受ける試練を同じように受けられ、死で震え上がらせ、罪で駆り立て、陰府で徒勞させ絶望させる形相に対して、まるでそれらが耳に入らないかのように振る舞われ、黙して争われなかった。キリストはただ父なる神のやさしさにだけ目をとめ、押しつけられる死と罪と陰府を忘れ、人々の死と罪と陰府のためにとりなしの祈りをなされた。このように、わたしたちもこれら三

つの形相が攻撃するに任せ、ひたすら神により頼むことを考えねばならない。

## 第15

サクラメントにおいて働きかけられるのはキリストご自身である。あなたがサクラメントの中に、キリストの生命があなたの死を背負い、キリストの従順があなたの罪を背負い、キリストの愛があなたの陰府を背負っていると堅く信じるなら、心を煩わせることなく、骨を折らず、あなたに対する神の選びと予定はおのずと明らかになる。

## 第16

このようなサクラメントを疑うなら、あなたが信じているとおりにあなたはなる。あなたに示され、与えられ、宣言されていることを信じないならサクラメントはまったく無駄になり、あなたは救われぬ。あなたは自分に示された確かなしるしを信じるがよい。そうすればあなたは価値ある者となり、その状態が続く。それゆえ悪しき霊はまことしやかな考えを持ち出し、あなたに疑いを起こさせ、サクラメントの働きを破壊し、神を言葉を弄する偽り者となそうとする。神はそのようなあなたの上にサクラメントを置かない。あなたが価値あるものとするものの上に、神はみ言葉を置かない。むしろ、価値のないあなたに全くの恵みから、神のみ言葉としるしを置かれ、より頼むようにされる。

サクラメントを受ける者は、自分がキリストの姿と宝において召されている信仰を強めることができる。しかし、見よ。自分が神にどんなふうに使われているか、それを確かめ、そのしるしを天から得たい、あるいは自分に関する予定を知りたい人間が、この世にいかにも多いことだろう。たとえしるしを得たとしても、それが彼らの何の役に立つだろうか。どんなしるしが与えられても、それを信じる信仰がないのに何になるのだろうか。キリストがそこにいたのに、多くの人にとってキリストのしるしは何の役にも立たなかった。今日と言えども、サクラメントのしるしとみ言葉にすぎらうともそれが何の役に立つのか学ぼうともしない人に、それは何の役に立つだろうか。サクラメントのうちにある神の言葉が働いて、死と罪と陰府を抹殺し、キリストの宝のすべてが与えられる。わたしたちがサクラメントを正しく用い、三つの姿をキリストにおいて見、反対の形相を駆逐し、宝を自分のものにする確かなしるしが必要である。これがサクラメントである。

キリスト者は1人で死んでいくのではない。まず、サクラメントにおいて神とキリストがその人に目を注いでいる。次に、すべてのキリスト者が彼を助けようとしている。そこに愛の業と聖徒の交わりが生じている。あなたが信仰にとどまるなら、すべての

ものがあなたを助けようと手を差し伸べ支える。あなたが滅びることはない。

## 第19

これを自分の力で実現しようとしてはいけない。神がそうしてくださるようには請い求めるべきである。これには二つの理由がある。一つは、信仰がますます強められるようにするためである。もう一つは、正しい信仰が与えられるようにするためである。そうやって、神が願い求めておられることと、祈りを信頼するように命じられていることが実現する。

## 第20

神はキリストにおいてすべてを与えられ、どう克服すべきか教えられた。そしてあなたに目をとめ、あなたがそれを受け入れ、求めるようにすべての被造物に命じられている。神はあなたの死にこのような助けと力と利益を添えられた。あなたがその偉大さを喜ぶようにである。これに感謝し、用いよう。そして死をひどく恐れず、恵みをたたえ、愛そう。愛と讚美は死を軽くするだろう。

神がそうしてくださるように。アーメン

# キリスト者の死生観

日本ルーテル神学校准教授 石居基夫

## 現代の「死」の論議

十数年前まで「死」について語ることはほとんどタブーでした。今日でもおそらく基本的にはそう変わらないのかもしれませんが。しかし、たとえば「ホスピス」を中心とした終末期医療また医療技術の発展とともに、「死」の問題はにわかさまざまなメディアで論じられるものとなりました。

「臓器移植」とともに「脳死」問題が論議されるようになったのは、ここ十年のことです。かつては、家の中で年老いた者、病気になった者は死んでいきました。そのように身近な出来事であった「死」を、病院や特定の施設、一連の葬儀システムの中に追いやってきたのが現代です。

その一方で、高齢化社会・医療技術社会を迎えて、「死」の問題が改めて論じられるようになってきているのです。そして「死」を論じながら、「いかに生きるか」ということが、実は同時に問題になっているのが現代の「死」をめぐる状況だといってよいだろうと思うのです。その課題に、答える議論がどれだけなされているでしょうか。



## 日本人の死生観とキリスト教

たとえば、梅原猛や山折哲雄などは「日本的宗教性や霊性」の現代的な意義を主張し、日本の死生観が西欧的な人間中心あるいは個人主義的世界に必要とされているのだといえます。さらには、他人の臓器をもらってまで生き延びようとするのは、「聖餐（キリストの体と血をいただく）」や「聖心信仰（キリストとの心臓交換）」といったキリスト教世界から生まれたもので、日本人の心にはそぐわないとまで言うのです。

このように「日本的なもの」と、「西欧的なもの」あるいは「キリスト教的なもの」を単純化し、対比させて論議をすることには注意が必要です。しばしば、それは一つの意図に基づいて描かれていて、客観的な批判に耐えることの出来ないものです。

「臓器移植」の問題を「他人の臓器を取って生きる」と単純化はするのはまったく誤った考えです。むしろ、自分の一部を捧げて一人の命を助けるといった点を見るならば、個人主義というのとはまったく違った面を語ることになるはずで

確かに、日本人には独特の感じ方、考え方があります。自然の中のありとしあらゆるものの中に命（タマ）があり、それは大きな流れの中に循環していると考えられています。個人の命が終わったとしても、それですべてが終わりとすることにほなりません。むしろ、自然のままに生きて、自然のままに死んでいこうとするのが日本人のありようで、その中で、自然全体の大きな命の流れのなかに一つとなっていくという考えがあります。「大河の一滴」（五木寛之）という表現は、見事に日本人の死生観を言

い表していると思います。

他方で、日本人は家を中心とした共同体に生き、また死んでいくという気持ちがあります。日本人は、死んだ者も生きた者も一つの共同体の中に含まれていて、死はその身分を変えるだけで、絶対的なものとはなっていないのです。仏壇にある祖先の「タマ」も食事を共にするし、家の者はその仏前にいろいろな報告もするのです。「生まれ変わり」といわれることとか、名を継ぐという習慣も、命の連続性を共同体の中に持っている事をあらわしています。生きている者は死者をよく「供養」をし、死んだ者の「タマ」は生きている者を「守り」、「祝福」する。「おじいちゃんを守ってくれている」というのは当たり前聞かれる言葉です。

そうした日本人の心からみると、キリスト教は人間中心で、個人主義的ということになるのでしょうか。キリスト教は、神中心であります。確かに人間は神様の言葉を聞くものとして特別な存在ではありえませんが、聖書は人間を他のすべてのものとともに神の被造物としています。決して、人間中心ではありません。また、キリスト教は、神の民であることを旧約の歴史に引き続いて大事に考えてきています。隣人に仕える、愛の信仰は決して個人主義ではありません。

### キリスト教の「死」の理解の基本

それでは、キリスト教は、「死」あるいは「死者」をどのように理解しているのでしょうか。キリスト教では「死」について大きな二つの理解の筋道をもっています。

第一に、「死」は人間の被造物性を現しています。永遠なるものは神様以外にはありえないのです。古代ギリシヤの考えは「靈魂不滅」で、人間は永遠な魂を持つている存在と考えられました。キリスト教はそのように考えません。神様に造られ、与えられたこの世での命を生きることにこそ意味があり、尊いものなのです。けれども、その命は、神様のように無条件に永遠な存在ではありえないのです。「死」は土のチリから造られた人間の有限性・被造物性を意味しているのです（創世記2・7）。これが、聖書的な意味での「自然死」の考え方であります。人間が、年老いて死ぬということはごく自然な出来事として考えられているという側面があるのです。

第二に、キリスト教においては「死」は人間の罪の結果として理解されてきました。パウロが「罪の支払う報酬は死である」（ローマ6・22）と語っている通りです。私たち人間は神様に「よきもの」として造られたはずでしたが、神様に逆らい、罪を犯しました。それゆえに、「樂園」からは追放され、「死」を恐れて生きるものになっています。人間の罪こそが被造物全体を「虚無」に服せしめたのです。

この二つの考えはそれぞれに異なる強調点を持っているといえます。しかし、共通するところは、神様との関係の中で私たちの命が考えられているという点でしょう。そして、とりわけ第二の点、つまり罪とのかかわりの中で私たち「死」を考えることが重要な問題になっているのです。

「生きる」と「天国」

精一杯生きただけなら、その行き着く先として「極楽」「浄土」を無条件に望む日本人に限らず、死後に行く場所として「天国」が思い描かれるのは、人間の自然な願いでしょう。聖書にも、「天国」が語られています。けれども、キリスト教でいわれる「天国」は、わたしたちが死んだ後に行く場所として描かれているのかどうか、よく注意しておく必要があります。イエス様は「神の国」とか「天国」ということばで、神様と私たち人間との関係をお話になられています。生きている者も、死んだ者も神様との正しい関係の中にあることで「天の国」にあると考えられているのです。

つまり、大事なことはまず私たち一人一人がどのように神様とのかかわりの中に生きていくかということになります。そして、聖書は私たちの神様との正しい関わりを、イエス様を通して与えられるものとしています。天国は私たちが死んだ後に行く場所ではなく、イエス様とともに私たちがいるところに行きつてきた出来事なのです。イエス様は言われます。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない」（ヨハネ 11:25-26）。つまり、「死」はイエス様との交わり・一致において、克服されたものとなるのです。生きることの結果「天国」に行くのではなく、「天国」を生きているのです。

そして、このイエス様との関係の中で私たちは、第一に罪の赦しが与えられるのです。そして、このイエス様ともにあることで、私たちは神様と隣人に仕える者、愛する者とされるのです。そのような神様の出来事が恵みとして与えられるところに、

「天国」があるといえるでしょう。キリスト者の死生観は、まさに「キリストの愛に生かされる」ところにこそあるのです。

### 「私の死」

私たちが「死ぬ」ということは、ある意味では当たり前のことですが、これを当たり前と言ってすませていることはできません。トルストイが短編『イヴァン・イリイチの死』で見事に描き出したように、「人間はだれでも死ぬ」ということと、「私が死ぬ」ということとはまったく別のことなのです。そして、実際私たちは皆、「私が死ぬ」というこの抜き差しならないことに直面しているのです。その「抜き差しならなさ」に、日本的靈性・宗教性は答えているのでしょうか。つまり、やがて自然の命の流れのなかに帰るといふ考えや、共同体の中に形を変えて行き続けるというような死生観は、この「私の死」に救いを与えているのでしょうか。

この問題は、簡単に答えを出すことの出来ない問題です。しかし、少なくとも日本的靈性においては「私」という存在を自然の中に、あるいはまた共同体の中に消していく傾向があります。そうすることで「私の死」を超えていこうとしているといえるのかもしれませんが。けれども、それで「私」の問題は本当に慰められるでしょうか。慰められない「私」は、「怨霊」になる以外にないのかもしれませんが。

### 罪と死

パウロ以来、（あるいはアウグスチヌス以来）もちろん、キリスト教の歴史の中でもはもつばら「死は罪の値」として考えられてきました。しかし、その伝統にあっても「私の死」を直接に神の裁きとは呼ばないで、「罪によって神から離れた魂は肉体を治める能力を失い、その結果として魂が肉体を分離するのが死だ」という説明をしています。それは、たしかに「死」を「罪の結果」としていますが、その切実さはありません。

宗教改革者ルターは、こうした伝統の中で、ある意味最も深く「私の死」の問題に取り組んだ一人といえます。それは、ルターが「自分の死」を神様との直接的な関係の中で見ているからです。つまり、ルターによるならば、「私の死」は第一に「神の怒り」として理解されるのです。肉体からの魂の分離、つまりいわゆる肉体の死は、死の本来の姿の影に過ぎません。

死の本来の姿とは、私の罪に対する神様の怒りであり、裁きなのです。つまり、神様との人格的な関係の中で、そして、「私の罪」との関わりの中で、死の問題が問われているのです。それはあくまでも、「私」の問題なのです。消えてしまう存在に過ぎない「私」ではなくて、裁かれるべき「私」の問題を見据えています。神様の前に、私の存在はゼロでなく、マイナスなのです。そんな「私」の存在こそが実は私の深い嘆きの源です。ですから、この問題は私の「死」によって解決はしないのです。神が裁きたもうのです。

しかし、神様は裁くだけのお方ではありません。「私」をまた裁くことにまして、

愛してくださいませ。それがイエス様の十字架の愛の御業にほかなりません。どうしようもない「私」が、かけがえのない「私」として愛され、生かされる。それが十字架を通して与えられる「赦し」の奇跡なのです。私たちはこの赦しの中でこそ、「私の死」に対する救いと慰めを与えられるのではないのでしょうか。もし、私たちがこの「赦し」を知らないなら、たとえ肉体は生きていても、恐れと不安、また悲しみと嘆きの中で、喜びのないものとならざるを得ないのです。

## 悪と死

それでは、キリスト教は「死」あるいは「死者」をどのように理解しているのでしょうか。キリスト教では「死」について大きな二つの理解の筋道をもっています。

第一に、「死」は人間の被造物性を現しています。永遠なるものは神様以外にはありえないのです。古代ギリシャの考えは「靈魂不滅」で、人間は永遠な魂を持っている存在と考えられました。キリスト教はそのように考えません。神様に造られ、与えられたこの世での命を生きることにこそ意味があり、尊いものなのです。けれども、その命は、神様のように無条件に永遠な存在ではありえないのです。「死」は土のチリから造られた人間の有限性・被造物性を意味しているのです（創世記2・7）。これが、聖書的な意味での「自然死」の考え方であります。人間が、年老いて死ぬということはごく自然な出来事として考えられているという側面があるのです。

第二に、キリスト教においては「死」は人間の罪の結果として理解されてきました。

パウロが「罪の支払う報酬は死である」（ローマ6・22）といている通りです。私たち人間は神様に「よきもの」として造られたはずでしたが、神様に逆らい、罪を犯しました。それゆえに、「樂園」からは追放され、「死」を恐れて生きるものになっています。人間の罪こそが被造物全体を「虚無」に服せしめたのです。

この二つの考えはそれぞれ異なる強調点を持っているといえます。しかし、共通するところは、神様との関係の中で私たちの命が考えられているという点でしょう。そして、とりわけ第二の点、つまり罪とのかかわりの中で私たち「死」を考えることが重要な問題になっているのです。

### キリストによる救いは、キリストとの一致によって

「死」を考える時に、私たちは本当に「私」の問題に気付かされます。そして、その「私の問題」は、私が死によって消え行くことなどでは解決されない問題なのです。私たちが本当に赦され、「私の死」が克服されなければなりません。「私」が愛されていること、「私」の存在に意味があることを、キリストの十字架と復活の出来事において知らされなければなりません。私たちは自分自身がやがて消え行くむなしものと思つて、なお今を生き抜くことは出来ないからです。

ルターは、もう一つ大事なことを言っています。すなわち、私たちは、このキリストの十字架の恵みを、ただ自分自身の苦難と十字架をとおしてのみ受け取ることができるといふのです。つまり、それは自分のためではなく、他者のために生きること



と、神様を証すること、その苦しみの中でこそ、キリストを受け取っていくことになるという事です。キリストと一つになること。しかし、それは具体的な信仰の生活の中で神様から私たちに与えられることなのです。そしておそらく、自分の意図に反してさえも与えられてくるのです。

そうしたキリスト者としての信仰の歩みを通して、私たちは実際にキリストの恵みに与り、「私の死」を克服するのです。つまり、自分に死んで、キリストに生きることが私たちに実現されていくのです。

### 実際の「死」を迎えて

私たちは、信仰にあつて死を迎える時、その「死」はもはや私たちを滅ぼす力ではありません。ですから、その死は「眠り」にたとえられます。私たちが朝起きたときに、眠っていた時間を知らないように、この眠りとしての死から私たちは復活の命に覚めるのです。そして、目覚めた時は天の祝宴が用意されています。信仰にあるとき、私たちの死はもはや、不安や恐れの中にはありません。そのような死を死ぬことは「祝福された死」です。

ルターは具体的に、こうした「祝福された死」を死ぬために、目前に死が迫ったなら、「死」そのものを見ず、キリストを見るように勧めています。「祝福された死」は私たち自身によるものではなく、キリストが分かち与えてくださるものだからです。

それでは、その眠りの間、私たちはどこにいたのでしょうか。私たちは、それがどこか知りません。ただ、神の言葉に休んでいるということがいえません。そうであれば、私たちはキリストを証する神の言葉とともに、死んでも生き、働くものであるかもしれない。実際、すべての聖徒たちはキリストとともにいつでも慰めを人々に運んでいるといわれるのです。死んで「証人」に加えられるということは、まさにそうした意味であると思います。

私たちは、あの罪人と共に「あなたは今日私と一緒にパラダイスにいる」と約束されて、死を迎えるのです。それは、キリストとともにある永遠の命の約束なのです。

## キリストと共に

どんなに信仰があっても、だれも死を逃れることはできません。しかし、どのようにこの死を生き抜くか、そこにこそ信仰の働くところがあるといつてよいでしょう。死を避けるのではなく、確実にやってくる死を克服する信仰は、死が私たちにとつて最後の言葉ではないと知っているのです。キリスト教は、私たちが死を克服することとはキリストの十字架の死と復活のみよることを伝えてきました。ですから、私たちは死を考えることに増して、このキリストの十字架と復活の出来事に出会い、生かされるということが肝心なことなのです。それは、具体的に礼拝を中心とする信仰の生活の中で与えられてくる出来事なのです。

私たちの信仰生活は、洗礼によって始められます。洗礼はキリストと共に死にキリ

ストともに復活の命に与ることだといわれます（ローマ6・4）。ルターは『小教理問答』において、洗礼は一回限りだが、その霊的意味は私たちの日々の悔い改めとともに与えられ、終わりの時あるいは私たちの肉の死によって完成されると教えています。私たちが、実際に罪に死んで復活の命に結ばれて生きるようになるのは、御国の完成の時まで待たねばならないわけですが、むしろ、私たちは自分の今の現実にもかかわらず、神様の御業に生かされていく希望を持つことが許されていると知りたいたいです。

また、聖餐において、私たちはキリストの体と血をいただき、主と一つとされて生かされます。同時に、御国の祝宴を先取りしつつ、私たちは生きている者も、すでに主に召された者も共に主によって豊かに祝福された交わりにあることを知るので。そして、何よりも語られる御言葉によって私たちがキリストに導かれ、癒され、慰められ、キリストと共に生かされる出来事の中で、私たちは、「わたしを信じる者は、死んでも生きる」（ヨハネ11・25）といわれるような信仰の命へと招かれているのです。

## 死への備え

実際に死を迎える時、ルターは何より自分の与った礼典に立ち返り、そこから慰めを得るようにと教えます。私たちは自分の信仰の確かさに立つことは出来ないからです。ただ、神様の御業に信頼をすることしかありません。キリストは死に対し勝利さ

れたのですから、私たちもその勝利に与ることが約束されているのです。しかし同時に、キリストはご自身の受難と死に対してどこまでも従順であられました。キリストの勝利はこの従順な姿の中に、そしてまったく望みの見えないことの中に隠されていたのです。神様の御業への信頼は、まさに勝利への確信と、そしてまた徹底した従順さにおいて、死を克服する力となります。

けれども、たとえば椎名麟三は洗礼を受けた時に「これで自分は死にたくない、死にたくない、じたばたして死んでいってもいいことになった」と言ったといわれます。つまり、私たちは自分が必ずしも強く雄々しくある必要はないのです。すべては神様が引き受けてくださっているのだから、どんな自分もありのままに神様にゆだねてよいというのが、キリストに信頼することなのです。

具体的には、いつその時がくるかわからないわけですから、準備のしようはないかもしれませんが、逆にいつでもその時が来るものだと思え、御言葉を聞いていくことが大事です。ルーテル教会が、今の式文の最後に歌うシメオンの賛歌は、その礼拝で御言葉を受け、主の救いを見た私はいつでもこの世を去っていくことができるという信仰の告白を表しています。そして、同じ賛歌が葬儀においても歌われます。つまり、毎週の礼拝において、私たちは終わりの時への備えを与えられているということでもあるのです。

もし、病气や体の状態などから、「その時」を近くに感ずることがあれば、特別に注意をしておかなければならないこともあります。この世のことをきちんと整理して

いくことも一つです。また、とりわけ牧師や教会員とのつながりは大切です。家族や近しい者には、普段から「もしもの時」にはどうするか伝えられるように工夫しておくことよいと思います。教会は、また、いつでも祈りとまた実際のな手だてとを持ってその時に適切に対応するのです。

葬儀がキリスト教式で行われなければ救われないなどということはありません。救いについては、本人と神様との関係の問題ですし、最終的には神様にゆだねる以外にはありません。ですから、葬儀の形式にこだわる必要はないわけです。しかし、キリスト教式で行われる時には特に信仰を持たない人々にも慰めと希望が分かち合われるように、具体的な配慮も必要でしょう。信仰において不必要に思われることでも、キリスト教の信仰があいまいにならない限り、キリスト教的方法に変えたり、説明をくわえたりして、できることは大胆に取り入れてもよいと思います。献花は焼香に代わるものとして、日本のキリスト教葬儀の中に定着していますし、弔辞に代わり、故人の思い出を話したり、遺族に対する感謝や慰めを語ったりすることも一般的になっています。

### 異なる信仰の下にあるとき

日本においての一番の問題は信仰を持たないで亡くなった家族についての問題です。信じるための機会が得られなかった者たちについてはもちろん、チャンスはあっても、受け入れられなかったままにその生涯を終えることとなった者もいます。いったい、

その人たちは救われないのでしょうか。

キリスト教は「信じて洗礼を受ける者は救われる」（マルコ16・16）と教えています。また、すべての人が等しく救いに与るということを無条件に教えることはありません。キリストによる救いをゆるがせにすることもありません。それらは、しかし、信じることによる救いへの強い招きの性格を表しているのです。神はひとりの滅びも望まれません（ペテロⅡ3・9）。また、すでに世を去った者についての救いを語るときに、その「救い」とはどういうことが考えられているかということも問題の一つです。キリストにある救いは、信じるものに生きることに対する勇気と希望を与え続けるものです。その希望は死によっても打ち砕かれることのない希望なのです。死んだ者の救いについては、神様にゆだねること以外にありません。その救いは、終末の時、つまり神の国の完成のときのみ知らされるのです。

私たちに確かなことはイエス・キリストによる救いの約束のみです。そして、イエス様ご自身が絶えず心を配ってくださるのは、救いから遠いと考えられていた人々であります。つまり、罪人の救いこそが福音なのですから、私たちは信じることなく世を去った人々の救いを安易に語ることは控えなければなりません。これを積極的に退けることは正しいこととは言えないでしょう。教会がキリストの体であるのであれば、この体はどういう人々のところへと出て行き、誰に救いの喜びをもたらすのか。そういう脈絡の中で、亡くなった人々についても考えていきたいものです。

具体的には、異なる信仰の下にあった人々についても、キリストのとりなしを信じ

祈りつつ、その人を通して与えられた神様の恵みを覚えることを、教會的脈絡の中に位置づけることを考えてよいように思われます。何を信じていてもよいのだというのではなく、どんな私たちであつても、神様は恵みと愛をもつて招いてくださることを示したいものです。また他宗教に対する寛容と敬意を表すことは、自らの信仰を証することにもなるのです。

### 神の国の証して

私たちが自分の死をいかに克服し、喜びと希望に生かされるか。それは、私の救いの問題です。しかし、この福音は主イエス・キリストの罪と死と悪魔に対する戦いとともに戦い、その勝利に与ることなのです。つまり、これは私の救いであると同時に、この世に与えられる救いの出来事と切り離して考えることは出来ません。ですから、私たちは自らの罪に死んで、キリストの復活の命に生かされつつ、来るべき神の国を証し、正義と公正、また平和を求め祈り、その喜びを分かち合うよう求められているのです。そのようにして、他者の死について私たちが心を砕くことこそ、キリストの命を生きる信仰者の働きなのです。

(三鷹教会「みどりのセミナー2003」より)

## 第4章

### 質疑応答・意見交換



## 宗教が違っても天国は同じか

A・・私は九州学院の出身なのですが、後輩で昨年の末、ピースハウスで最期を看取っていた者がおりました。その後輩が病床洗礼を受けたと伺っていました。お葬式の際に、彼は会社経営をしていたためか、お寺で葬儀をしました。社葬なのでそういう形になったと思われます。本人はもう亡くなっているわけですから、葬儀について遺言があったかどうか分かりませんが、そうしたことをとらえると、天国へ行ったのか、極楽へ行ったのか、気になります。

彼の場合だけではなく、私の家庭の場合でも同じ問題があります。私はクリスチャンですが、妻は「あなたが死んだら仏教でお葬式をする」と言うのです。「ああそうかい。じゃあ、あなたが死んだらキリスト教で葬儀をしてやるよ」と言っているのです。私はあまりそういうことに囚われない性質なのですが、お墓を造る際にはいろいろな揉めました。ラテン語の墓標など、素晴らしい墓碑銘を掘っておきたかったです。反対されて、最終的には母校の教訓である「敬天愛人」ということばで妥協しました。質問は、同じ宗教だとそういう問題がないのに、日本人はそのような問題を抱えていますので、何かお気づきのことがありましたら教えてください。田中・・お友達の方のお話がありましたけれども、その方はピースハウスに入院なさったときには本当に末期でした。その方がなぜピースハウスを選んだのか分かった時には、わたしは「ああ、こういうことがあるのだ」と思いました。私がそこで働いているので。そこで最後を迎えたいということでした。

しかし、私はその方とは事前に面識がありませんでした。けれども九州学院の現在の事務長の紹介で、ピースハウスには、東京教会で牧師をしていた者が今チャプレンとして働いている、ということをお話されたのです。そして、最後に彼はここに来ました。でも、入る時から彼は、洗礼を受けようと思っておられました。神さまのみ業だ、ということをお強く感じました。

確かに、ミッシェンスクールをたくさんの方々が卒業していきますが、大半の方々は消えてゆくように私たちの目には見えません。しかし、それ以降、社会に出てから、仕事の中で私生活でいろいろな出来事に出合い、あるいはその方のように会社を起業し、また奥さんと生活をし、お子さんの養育をしていきます。そのような中で、お話にあった九州学院の校訓の「敬天愛人」、それが、単に聖書の何の何章から来たというというだけではなく、聖書の中の言葉として「神を愛し、人を愛しなさい」という、その意味があるということをお話し、長い長い人生の生活の中で知った。そして、そのお友達は、人生の完了を迎える前に、帰る。けれども、彼の内にある思いというのは、神さまの働きだったのだということをお話します。

私だけでなく、医師も、担当の看護師も参列して、その方の病床洗礼式を行いました。それで、東京教会に教籍を出されました。亡くなったのはそれから10日後ぐらいでした。亡くなってからの社葬は、もう会社の人が準備をしているのでやむを得ない、申しわけないということでした。けれども、教会員としてすでにお名前をいただいておりますので、その年の召天者記念礼拝には奥さんも見えまして、礼拝を行います。

した。その後、二回ほど奥様ともお会いしましたが、「私も洗礼を受けたい」と現在も思っているらしいです。これが神さまがなさったそのお友達の「物語」です。

### 体といのち、そして復活

B「永遠のいのち」を与えられたのだと賀来先生がおっしゃりましたが、ちよつとこだわった質問です。「永遠のいのち」の「いのち」という言葉は、言語的に聖書の中では独自の言葉なのか、それとも普通に使われている「命」として使っている言葉と同じなのか、ということが一つです。

それから、我々は「生命」と書いて「いのち」と言いますが、先生のおっしゃる「永遠のいのち」という意味とは、ぶしつけな言い方をすると、生物の「生」という字が抜けている「命」で正しいのでしょうか。

さらに、コリントの信徒への手紙(一) 15章44節に「自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。」において、たまたまですけれども、「霊」の文字の後に二箇所とも「いのち」という言葉が抜けていますが、ここには、「いのち」を入れてもよいのか、いけないのか。たぶんそうだと思いますが、賀来先生、よろしかったら解説をお願いいたします。

賀来…これは釈義の問題になると思います。基本的にパウロがここで言いたいのは、「自然の命」、つまり我々有限の世界、肉の世界における命ですね。それに対して、「霊の体」というときには、「肉なるものでない」ということを言おうとしているのだと思

います。「肉なるものでない」とは、次元が違うということです。肉との連続性がない。ですからパウロは、人間の知恵をいくら働かせても「永遠の命」は分からないと言っているのです。そういう意味に、私は理解しています。（\*補足：聖書では永遠の命という場合は、命に「ゾエー」という言葉を使い、自然の命の場合は「プシケー」という言葉を使います。質問にあった「霊の体」の霊には「 Pneuma」という言葉が使われていて、「神の霊が吹き入れられた体」という意味です）。

田中…ご質問は、「体」という言葉が使われているので、私たちの理解としては、それは「肉」、けれども、「いのち」とある場合は「体」という言葉を使わずに「命」という言葉を使う、そういうことですね。

私はルターの大教理問答書から、こういう場合によく話したのですが、大教理問答書の最後に「体の復活」というところが出てきます。使徒信条に、「体の復活と永遠の命を信じます」と、私たちは毎週日曜日の礼拝の中で告白します。このことをルターが説明して、「私たちの肉が朽ちて滅びるとき、聖書は、一瞬にして<聖化>を完成する。そして、最後の二つのもの（復活と永遠のいのちを与える）によって私たちをその状態に保持される」。キリストの復活に与って、永遠の命を与えるということと、やがて私たちは復活させられる、ということなのですけれども。

ところで、この聖書の箇所には「体」「肉」について書いてあるのですが、復活する、永遠の命が与えられているという時に、ルターの時代は、ドイツ語で「肉」という言葉が使われていました。「肉」と「復活」というのは、ドイツ語では非常に大事です。

『肉』というところには肉屋の店先あたりのことしか、私たちは考えていないからである。」そういうふうになっているのです。「しかし、それらの言葉も、こうした復活についての考えを正しく理解していれば、大した問題ではない」と大教理問答書の中に書いてあります。私はこれには非常に安心するのです。

もうひとつは、ルターは「自然の中で種が蒔かれて、やがて、それが地に落ちて死ぬと実を結ぶ」と、ヨハネによる福音書の中やコリントの信徒への手紙「15章についても言っています。そのときに、『種』というのは、「復活する、蘇る」の意味です。でもそのときの種をルターは、『私たちは神の種です』と言っている。そこで規定は、「洗礼を受けたことは、『神の種』です。だから、「蒔かれたものは必ず復活します」と言っています。これも、私たちが安心させてくれる、希望がある言葉だと私は理解しています。

B…ありがとうございます。安心して帰れます。

### 天国と宇宙、どちらが遠い

C…今日はたたくさんのお話しを伺いまして、本当に死んだらどうなるのかな、でもあまり怖くない、死んでも全然心配ない、という気持ちになりました。しかし、不安ということは、死ぬ前にどのように人間らしい生活が送れるのかということの方が、私にとっては非常に大きな疑問になっております。

質問させていただきたいことは、以前、何かで読んだ本の中に、子供が「天国は、

宇宙と天国とはどちらが遠いのか」という質問をする部分がありました。そうしたら、そのときに答えた先生は、「天国はもう帰ってこないところだから、ずーっと宇宙より遠いところにあるんだ」ということが答えだったのです。私は、その答えが不満なのです。もし、三人の先生方が小学校の子供から、「天国と宇宙はどちらが遠いか」という質問を受けたら、どのようにお答えになるのか伺いたいです。

**賀来**…えらく難しいですな。(笑)でも、子供の時代というのは非常に字義的に物事を考える、文字通りに物事を考える世代でもありますね。天の方が宇宙よりも大きいとか、高いというようなことは、いずれ年をとってゆけば、やがて訂正されていきますから、私はそれでも悪くはないかなと実は思っているのです。例えば、小さいときには、神さまにも目があり、手があり、足があると考えますね。そのような考え方というのは子供の時には自然ですから、それがやがて大きくなって知識や体験が増えてゆけば、訂正します。子供の時は字義通りにこの世界が映るのは、ある言意味では当然かもしれません。しかし、もつと信仰的に答えるならば、「天」とは、「神がいましたもう処」ということで、聖書の中では「天」は「神そのもの」でもあります。「(天の)国」と書いてありますが、これは「支配」という意味です。したがって「神が支配する」ということになります。マタイ福音書では「天の国」、ルカ福音書では「神の国」ですが、「天」と「神」とは同じですから、「神さまが働いておいでになる処」というふうに理解しているわけです。子供の時代は、ある意味では神話的な表現であります。が、やがて大きくなれば、それなりに分かってくるのではないのでしょうか。素朴でい

いのだという気がしないでもないですね。(笑)

田中…子供の質問というのはとても難しいですね。どう答えたらよいか迷うのですけれども。身近に孫がいます、その小学校一年生の孫は、例えば、サンタクロースを見て、「これは教会の先生が(衣装の中に)入っている」とか言います。ところが3年生の女の子は、頑として、「これは神さまからの使い」だと、いまだにそう信じています。例えば、そういう子がこの質問を訊いたらどう言ったらいいか迷いますが。

たまたま私は2週間ほど前に、礼拝説教の中で、旧約聖書を読んだのです。申命記18章でした。その中には、「何かしなければならぬことというのは、そんな天の彼方にあるとか、また、海の深いところにあるのではなく、あなたのすぐ近くにある」と、そういうところがあります。やはりそのような思いで、パウロも使徒たちを養成していったのではないのでしょうか。「隣人になりなさい」ということはそういうことで、そのことを今思い出しているのです。

やはり、古いかもしれないけれど、「天にいますわたしたちの神さま」と言いながら、「星は遠いかもしれないけれど、神さまのいる天の方が近いよ、私たちと共にいてくださる神さまだから」と、私だったら答えるしかない、いまそう思います。

石居・ルカによる福音書の17章のところに、弟子たちが天の国はいつ来るのかと尋ねますが、そのときにイエスさまが、「あなたがたの中にある」と言われました。私たちが「天の国」「天」というふうに大きく考えるならば、そういうことですね。

そのお子さんはそのときに、どういうふうに何を尋ねられたのか、居合わせないと

分らないですが。例えば、身近なお父さんかお母さんが病気で、その命を終えて「天国に行ったのだ」って言われたときに、「その天が、天の国が、宇宙よりも遠いところだよ」と言われたら、きつと寂しいだろうと思うのです。私たちが、「天国にはね・・」と言うとき、「天国に行った人たちはどんなふうに分かたの傍に居てくれるのかな」と、そういうことかもしれません。そうすると、私は、「あなたがそう思ったときに、あなたの一番近いところに天の国が来ます」と、そう答えてあげたいと思います。

でも、そのときに大事なことは、死んだその人だけのところではなく、「一緒に居てくれるイエスさまの居るところ」、「イエスさまが居るところが神さまの居るところ」そこが天の国ということなんです。そのことはキリスト教の中でもすごく大事なことだと思っています。天の国をどういうふうに話していいか分からなかったら、教会に来てほしい。聞いてもよく分からなかったら、聖餐式を受ければいい。私たちはそういうキリストを通して、死者の国があるというか、死んだ者も一緒に生かされている交わりを考えることができるのだと思うのです。

私が答えるならば、「イエスさまのことを考えたら、いつでもそこに天国はあるよ」ということです。

## ハンカチで天国の音楽会の席予約

D・死んだらどうなるかということに一所懸命に臨んで、そのようにしたという私の家内の話です。死んだら天国に行きたいと言って、死への準備をしながら、最後の10



日間ぐらいの間を過ごしました。死を前にして茫然としたということではなく、手に取るように家内は天国を具体的に想像していました。それは、天国にいったときの状況をはつきりさせるために、まるで先取りするように、ハンカチを用いてイメージしました。天国に行くときにそれを持って行くからと言って、棺の中にたくさんのハンカチを入れるように申しておりました。私たち家族で、そういう死への準備を日常的に行って、体験をしていたと思います。

家では死について語ることへのタブーな雰囲気はありませんでした。それは実は私たち家族がクリスチャンであり、そのような死への準備ができるような環境を持っていたということでもあります。私たちと共に、関わってくださった川越厚先生や賀来先生がいてくださいました。そして、妻は天国でまた会いましょうと言って、地上にいる中で具体的な天国の世界を先取りして、やすらかに亡くなりました。その看取りの経緯を『やすらかな死』という本に書いていただきました。このような看取りが可能なのだということ皆さんも家族の方や教会の方にも、知っていただけたらと思います。充実したひとときが送れたと思います。

**賀来**…Dさんの亡くなった奥様のことで、少し私なりに話をさせていただきたいと思えます。時期としてはちょうど石居基夫先生が武蔵野教会の牧師でいらしたころに、奥様は召しを受けられました。私は前任者として、石居先生と共に夫人を看取りました。

亡くなる前に、ピースハウスのような施設で最期を過ごすか、在宅で最期を過ごす

か選択をされ、最終的には在宅で最期を迎える方を選ばれました。その指導を川越厚先生がされました。三ヶ月ほど在宅で過ごされ亡くなられましたが、その記録が、田坂さんが紹介された『やすらかな死』（日本キリスト教団出版局刊行1995年）という本になっています。すでに15年前ぐらいに書かれたものです。川越厚先生とご主人のDさんと、看護師の田中さんと、そして私がスピリチュアル・ケアを担当して、4人で書いたものです。

これに柳田邦男さんが序文を寄せ、「これは非常にめずらしい本である」と書いておられます。「なぜかというところ、みんなが正直に書いている」とあります。ケアした者も自分の言葉が届いたかどうかと、自分で自己検討しながら書いているし、亡くなった奥様自身も、ときには愚痴を、ときには怒りを、と正直な気持ちを出しています。そういう意味では、他の類書にない闘病記だと柳田氏は書いています。

Dさんの話しにあった「ハンカチ」の話は、奥様の「わたしの物語」です。夫人は音楽がとても好きな方で、「天国は音楽会」と考えていました。子供さんたちに「お母さんは先に行っているけれども、あなたたちも、後で来るでしょう。そうしたら、音楽会の席を予約しておくから、ハンカチを椅子のところに置いておくので、一緒に入れてちょうだい」と言っていて、ハンカチをお棺の中に入れました。私の分と、石居先生の分も入っていると思います。（笑）

「わたしの物語」を自分の本音として家族に伝え、それが棺の中のハンカチになりました。そして、次の日、亡くなられました。ご主人のDさんは、今まで過ごした夫

婦の生活の中で「至福の時だった」と述懐されていました。この本は、まだ売っておられますので、もし本屋さんで見つけられなければひたすら読んでいただきたいと思います。

### 生まれる前は？

E…人が生まれる前というのはどうなのだろうかと興味があります。命がこの世に創り出されるとき具体的なイメージを持ちたいと、また、生まれても亡くなってしまった赤ちゃんはどのように天に帰ってゆくのか。いま、先生方のお話を伺いながら思いました。

石居…こういう問いは古くからある問いの一つだと思います。私たちが生まれる前はどうかであったか、ということです。私たちは神さまによって造られる、母の胎内の内に、神さまが造られるのですが、その前は無いのです。しかし、実は、例えば古い例ですが、オリゲネスという神学者います。オリゲネスは「生まれる前に天に居た」と言っているのです。天から魂がやってきて、人間として生まれた、という話になる。

これは「靈魂回帰」というギリシアの考え方です。

この説はオリゲネスがギリシアの哲学を勉強しているうちに、たぶんそれに強く影響されてそのような言葉になってしまったのだと考えられます。けれど、オリゲネスが本来、伝えたかったことは、ギリシアの哲学ではありません。それは「神さまの御心のうちにある」ということです。「神さまの御心のうちにある」ということは、「永遠」のことです。私たち、一人ひとりの存在は、神さまが永遠のうちに定めたもうこ

とであると。そして、神さまが、一人ひとりの命を大事に考えて、この世に送り出してくださったのだということ。そのことをオリゲネスはたぶん伝えたかったのでしょうけれど、それはギリシアの言葉になったときに、ギリシア哲学の靈魂不滅の考え方のようになってしまったのです。

そうではなくて、私たちは、神さまによって母の胎内に造られているときに、はじめて私たちの存在として造られるのであって、その前は存在としては無いのです。

それで、生まれ出たばかりの子供を看取るということ、その前の状態をどう考えたらよいか、とても難しいことだと思います。しかし、こういう言い方ができるのかもしれない。命の問題を私たちは、一人ひとり掛替えのないその人の命として、そこに存在する命、オギヤーと生まれたその人の命、その一人の命ということの掛替えのなさを絶対に見切ってはいけないということです。

そして同時に、その命はただ一つの命、ただ一人でそこに存在している命ということではありません。私たちが生きるということとは、「関係の中にある命」ということです。その子の命は、私たち一人ひとりの命は、関係の中で私たち自身がはじめてつくられていく、誰かの子供として生まれた、あるいは誰かの親として私が造られている、こういう関わりの中で、それぞれ一つの命があります。

だから、その子の命についている御心を、神さまに委ねるといふほかはないのです。しかし、私はその子の命を分かち合っていく、その子を覚えてその子の命を神さまの前で見守っていく、そのことの中で、一人の命を掛替えのないものとして、神さまの

御心にある命として、そしてまた私たちの内にも位置づけるということを考えてもいかなど、私は思っています。

### 函館の町を見下ろして「ここは天国・・・」

F・・・今の話を受け賜わっていて、母のことを思い出しました。横浜教会の東和春先生が函館教会にいらしたときのことです。私たちはその当時、孫は一人だったのですが、今は三人が函館にいます。その孫がよちよち歩きころに、東先生の説教の最中に中央の通路を歩いて行って、先生の真ん前で大の字になって寝たのです。私はその子の親が引き取りに行ってくれるのだと思っただけですが、母親は知らんふりしています。

私は出るに出来なくて、大変苦しみました。これが新宿の東京教会であつたら、私は次の日曜日は教会に出られないと思うぐらい恐縮しました。礼拝が終わってから、牧師室に参りまして、「先生、今日はどうもすみませんでした。あの子があんなことをするとは思っていなかったのです、すみません」と申し上げました。先生は、「いいんですよ、あれでいいんです。あるがままでいいんです。今にきつと分かるようになります」と言ってくださいました。私はとても気が軽くなりました。その子は今、高校一年生になりました。父親はすでに亡くなりましたので、年の離れた弟や妹と一緒に、母親と一緒に函館教会に通っています。

今のお話の中で、幼い者の心が、教会という環境の中で、そこで育てられるのだというのを、東先生はちゃんと教えてくださいました。そのことを思い出して、今、

大変、感謝しております。

それから、天国はどういうところなのか、何か大変退屈するような場所のように、いま受け賜ったのですけれども、私は生きている間に、天国のような思いを積み重ねることは、とても大事なのではないかと思うのです。

私の母は、もう亡くなりましたが、生前九州にいました。造花を作るのが趣味で、亡くなる4日前まで造花を作っていました。最初で最後だったのですが母と札幌に行きました。その時にあるバラ園に行きまして、母がバラの花の香りのするアイスクリームを舐めながら、札幌の街を見おろしました。その時の母の言葉ですが、熊本人ですから、「わー、ここは天国のことやんね」と言ったのです。私も本当にうれしゅうございました。母にとつてはその場所は天国だったのです。きっと母は、あのバラ園に行っているのではないかなと思つて、私の心は安らぎます。

ということを、今日思い出して、先生方のお話しに感謝すると共に、その思い出をお捧げしたいと思います。

### 肉体と霊は別々に？

G：「千の風になつて」という詩がありますが、そのことについてずっと思い続けていくことがあります。「この私が死んだらどうなるか」というのは、肉体に関しては、この私も彼も皆、同じだと思えます。「霊」は「アニマ」と言いますが、その語源は「風」とか「息」とか「そよかぜ」とかあり、同じ字義だと思えます。「千の風」にしても

風はどこからか来てどこかへ去ってゆく。霊もまた同じように私は思います。

つまり私が言いたいのは、肉体と霊の関係です。そして、死んだ瞬間、霊とは一対一の関係を離れて、肉体は土に戻ります。霊は風のように分解して空気に代わり、あちこちに行くのだと思います。

賀来先生の主題講演のお話しにお言葉をお返しするようなのですが、死んだら忙しい。どこかへさまよい続けること。場合によっては他の生物の体内に入って行ってそこで再生するのではないかと思うのです。私はそういう考えを絶えず持ち続けてきました。

賀来…誤解のないように申し上げたいのですが。天国は退屈したりするような場所ではないのです。礼拝するということは、誠に賛美と誉れを尽くしている世界ですので、退屈どころの騒ぎではないですね。「天国では礼拝をしている」とは、聖書に基づく「わたしの物語」ですので、その辺は誤解のないようにしていただきたいと思えます。(補足…とくに大切な人を亡くした方にとっては、慰めになると思ひ、こうした話しをする必要があります)。

今のお話についてですが、キリスト教の考え方の中には、霊魂不滅という考え方はないのです。これは、人間を心と体に分け、その心にあたる部分を霊魂というふう理解することがあります。しかし、二元論的な考え方というのは聖書の中にはありません。パウロはむしろ、心も体も含めて、それが人間であって、心も肉なるものに属するというのが正しい理解です。それに、神さまが霊をくださるのです。「霊は神の賜

物」です。

創世記2章7節では、神が命の息を吹き入れられたので、人間は生きるものとなったとあります。神が「命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」ということは、「命は与えられたもの」ということを意味します。神が与えられた霊、吹き込まれた霊は、永遠のものなので、永遠に残るのです。肉なるもの、つまり人間の肉体も心も肉なるものですから、これは朽ちるものです。こうしたことは聖書に基づいて考えるのが望ましいと思います。

田中・「千の風になって」という詩について、最近ラジオでこのことについて解説していたのを、お聴きになった方がおありかもしれません。結局、原作者が分かったんですね、クリスチャンだったのです。それで、「もう私はここには居ません。もう泣かないでください」っていうのは、キリストが復活されたように、私もこのお墓には居ません、ということですよ。キリストの復活に与って私も復活します、というそういう言葉だったのです。かなりいろいろなネットワークを使って調べた結果、ラジオで解説していた方は、キリストの復活に做った表現だと言っていました。私自身もこの詩は「復活の詩」だと思っただけでしたが。

## 死後のこと、分からなくても

H・質問と申しますより、私の提案なのですが。私は、永遠の生命というのは、イエスと共に、イエスの信仰において、この世において働きをしたことだと私は考えてい



ます。

それから、天国、地獄ということについては、聖書には、天国とはイエスさまが「ここにある、あそこにある、というものではない。実に生きているところにある。」とのお言葉あつたと思います。私はいま、天国に棲んでいる、毎日が非常に楽しくて、感謝です。天国、地獄は死んでからのことではなく、この世において天国がある、ということとはイエスさまを信じてこの世に生きていること、それが私は天国だと思っています。

私たちの死後のことについては、単純にイエスさまがおっしゃっているとおり、「信じる」「それはわからなくてよい」という表現があります。私たちはいまこの世で解明しなくてもよいと。イエスさまと一緒に礼拝すること、それを信じて生きることが、私は死後の世界ではないかなという理解を、賀来先生のお話しを伺ってから、教えていただいた想いです。

**賀来**…ルターという人が面白いことを言っています。『卓上語録』という著作の中に、ある人が「あなたはきつと天国に行かないで地獄へ行くかもしれない」とルターに言いました。すると、ルターは「私は喜んで地獄に行く。なぜならキリストがいましたまわらないところはない」と答えたそうです。天国だろうが地獄だろうが、キリストはどこでもいましたもうと言っているのです。これはルターのキリストを徹底して信じる信仰的な考え方です。そして、『死への準備の説教』の中では、「地獄は私たちの心の中に発生する」と言い、罪の苦しみ、自分ではどうしようもない自分の性分、そう

ところが地獄だと言います。ルターは自由自在に天国や地獄を考えていると思いますし、人間が自分の内面の問題を理解するための主題としても捉えていると思います。

そういう点ではわたしたちはどこに行ってもキリストからは離れられない。キリストがおいでにならないところはないという意味で、信仰者という者は、どこに居ても、安心できるところに身を置いていると思えました。お話しをお聞きして、いろいろな思いが浮かびましたのでお話し申し上げました。

# 第5章 アンケート

1. あなたが人生を終わるに際し、あなた自身の死をどのように受け止めたいと思いますか？

・ 死後の世界は賛美の世界と聞き、安心した。

・ いつも、最善のものを与えてくださる神に感謝して死を迎えたい。

・ この世の役割を終え、天の国に入れてくださるときが来たと受け止めたい。

・ 神の御心のままにすべてをイエス様に委ねたい。 18名

・ クリスチャンらしく死を迎えたい。

・ やむをえないこと。

・ 家族との関係を大切に生きたい。

・ 充分生きた。

・ 最後まで癒やされて生きたい。

・ 身近な人の死をみて参考にしたい。

・ 命は永遠にあると信じている。

・ 神に導かれて悔いのない終末になればと思う。

・ 罪深い人生を想うと、神との関係を離れずに死を迎えたい。

・ すべてを主にゆだねて安心して逝きたい。(70代男性)

・ 墓碑銘の「s.d.g. (soli deo Gloria)」という賀来先生の言葉は貴重な遺言として心に刻ませて頂きました。そのような生涯を送ることができれば、本当に幸いです。

あると思います。(50代男性)

- ・『我らは神の中に生き、動き、存在する』（使徒言行録 17章 28節）のみ言葉に倣い、全てを主の御手にゆだねます。（50代女性）
- ・ただイエスを信じ、喜んで（80代男性）
- ・動物の中で、死を知っている人間は最も不幸でないかと思う。（70代男性）
- ・さけることのできない現実である。
- ・「与えられた命。与えられた人生」を感謝して、その終わりをおだやかに受け入れられるようになりたい。（50代男性）
- ・生かされたことに心から感謝し、やがて亡くなった親しかった人たちと天国で会えるのを希望する。（60代女性）
- ・積極的に受け止めています。（50代男性）
- ・キリスト者は「委ねることができる」という引用はすばらしい！（70代男性）
- ・これまで具体的に考えたことがなかった。これから、少し、。。。 （70代女性）
- ・現状を受け止め、次に世界での完結を祈ります。（60代男性）
- ・仕方ないと思う。なぜなら、神様が与えた寿命はこれ迄と思う。（60代男性）
- ・神の召し。（60代男性）
- ・御国に移る、転向の時。（30代男性）
- ・ゆだねる方を知っているということがどんなに素晴らしいことか。あらためて、感じる事ができた。（70代女性）
- ・風のように拡散して、風のように姿を変えて存在する。（80代男性）

・自然の成り行きと受け止めたいです。(70代女性)

・神と共にありたい。(70代女性)

・全てを「みこころ」だと受け止めたい。人智では測ることの出来ない方を賛美したい。(70代女性)

・一連托生。(70代男性)

・身近な人の死を送り、ノンクリスチャンであったこと、若い命であったことを思うと、今日のお話しは「宗教・聖書により、信仰か希望の生から、賛美と栄光へと変わる」ことをきき、嬉しく聞きました。(70代男性)

・神と共に受け入れたい。(60代男性)

・今ある信仰をさらに深め、死を希望と受け止めたい。(50代女性)

・「ありがとう」といって、すべてを神様にゆだねて行きたい。(60代女性)

・ある意味で余力を残して、自分から死に向かって突進して行きたい(感謝と共に)  
(70代女性)

・運命とわりきり、ごく自然の形で受け止める。なるようにしかならないといった感じ。周囲の人々(家族)に、迷惑や心配をかけない。(50代男性)

・やがて、死は必ず来ると思いますが、苦しまない事を望み、皆に、地上に居た間のお礼を言って死にたい。(70代女性)

・今日の話をよく理解して臨めればよいのですが、多分、じたばたすると思います。  
(50代男性)

・辛いことも、痛いこともあまり起こらないように、誰の迷惑も掛けずに召された  
い。「良い人生だった」と思いたい。(70代女性)

・ホスピス病棟で、自分の死の物語を描きながら、イエスさまにお会いする日を待つ  
(60代女性)

・人間、私もいつ、どこかは神様の思うままに。(60代男性)

・おそれることなく、充実感をもって、死に向かい合いたいです。(30代女性)

・「生き抜いた」と満足して死にたい。(60代女性)

・受け入れるほかありません(希望と感謝をもって受け入れたい)(60代女性)

・イエス・キリストを信じて永遠のよみの国、先に召天された方達の元に帰りたい(60  
代女性)

・主人も死ぬ前に病院で洗礼を受けたので、待っていると思います。(60代女性)

・死んだのではなくキリストにかえるのだと受けることの重要性。(60代女性)

・イエス様にすべてを委ねて、静かに死ねたらいいと願っています。(70代女性)

・自然の真理として受け止めてゆきたいが、叶うなら、後10年自分として生きてゆき  
たい。(80代女性)

・これから、イエス様に会いに行くんだと確信したい。生かされて良かったと思いた  
い。(50代女性)

・完成していらっしやるイエス・キリストにすべてをゆだね、お任せしたい(60代女  
性)

- ・素直に受け止めたい。(70代男性)
- ・神が、必要なこととして準備してくれた。(50代男性)
- ・天国に行く。(40代女性)
- ・人生を三つに分けて、生まれてきて3分の1はとても裕福に育ててもらった。中の3分の1は戦争や終戦に続いて結婚、姑との間で苦労を味わった。そして、年を重ねて現在、3分の1の後半は静かに幸福に夫と共に暮らしている。死はやがて来る。人生は平等だと思う。(70代女性)

2. あなたの死に際し、未了のこととして(ライフワーク、家族、社会的関係)、どのようなことがあると思われませんか？

- ・家族との関係
- ・子供と孫の行く末を見届けたいが、未完のまままでよいと思う。
- ・お寺と親しいので、寺、家族の問題はある。
- ・すべてに満足して終わるとは思えない、未完のまままでよい。
- ・障害を持つ子供の先のが心配(3名)
- ・何もないと思いたい。
- ・家族にキリスト教を伝道できなかったこと、が気がかりである。
- ・家族、医療者への伝道が怠慢であったことへの許しを願う。
- ・未完のことは多いが、次代に委ねる。



- ・ライフワークの作品も完成し、やるべきことはやった。
- ・ライフワークをやること。(2名)
- ・周りの人への感謝。
- ・何も無い。(3名)
- ・子や孫を主に委ね、感謝して死を迎えたい。
- ・家族の絆を深めつつ、牧会伝道に励みたい。
- ・やるべきことが多くてわからない。(2名)
- ・家族への信仰の伝承。
- ・子供たちがキリスト教信者になっていないこと。
- ・資産の整理、自分の葬儀の指示。
- ・家族と楽しい思い出を残したい。
- ・すべてが未完成のままかもしれない。
- ・結婚していない子供の老後が心配。
- ・残された子供たちが苦勞のないようにしたい。
- ・主の十字架は伝えていくものなので、伝える努力をしたい。
- ・常に祈っているが、死の前には許してくださいと祈る。
- ・現在しているボランティアをあとの人に託し、葬儀の意思表示をする。
- ・自分がいなくなると、家族がバラバラになるのでは、と心配。
- ・礼拝を守り、仕事をがんばりたい。

- ・子供の生きる道筋を共に探していきたい。
- ・生きる喜びを家族に伝えたい。
- ・パターンと最後を迎えたい。
- ・世のために働きたい。
- ・日々、感謝の気持ちを忘れずに身の整理をしていきたい。悩み、苦しみはあるが、それらに誠実に向き合い、あわてず、恐れず、喜びを持って迎えたい。
- ・まだ結婚していない末っ子のことなど。これから困難な道を通る若い人たちのこと。  
(70代男性)
- ・すべてが未完了のまま、今がある。(50代女性)
- ・未だに自分自身が何者か、自分の果たすべき役割は何か、が分からないままである。しかし、死を目前にしたとき、きつと、思うことは、「今日、神の国を伝えるために、誰かのところに行きたい」である。(50代女性)
- ・家族のこと。家族の信仰を。入信を祈りつつ。(80代女性)
- ・特に未完了なことは無い。したいことはいっぱいある。(70代男性)
- ・親孝行一少しても親の気持ちを理解すること。(50代男性)
- ・社会的関係は一周圏の人々へ感謝すること。(50代男性)
- ・(世界中のいろいろな街にゆき、いろいろな出会いを楽しむ)スペインの巡礼街道を歩く。(50代男性)
- ・身の整理。死への準備(家族への遺言等)(60代女性)

- ・ 孫の成長、教会の成長が心に残ります。(70代女性)
- ・ 現段階では、子供のことが気にかかります。(50代男性)
- ・ いろいろありすぎます。しかし、「楽しかった!」と最後を迎えられれば良いと思う  
(70代男性)
- ・ 信仰の継承(70代女性)
- ・ まだ深く考えたことがありませんでした。これからじっくり考えてみます。(60代男性)
- ・ 私の「生」とは関わり無く「昨日迄と同様、運営されていく」。一時的には妻・子供は悲しむが、その後は……。 (60代男性)
- ・ 絆の余音(60代男性)
- ・ 教会活動(30代男性)
- ・ 文学作品を書き続けること(80代男性)
- ・ 家族に信仰を伝えられなかったことを残念に思うでしょう(70代女性)
- ・ 子供が傷害者なので、そのゆく末が心配でしたが、いかなる人生であっても主のみこころなので、辛いことがあっても耐えることが出来るでしょう(70代女性)
- ・ 家族の救いを祈る(70代男性)
- ・ 共にいて下さるに死に向かう人に隣り人となれる会員同志でありたい(70代男性)
- ・ ケアは共に喜び、苦しむことです。教会の中で語り合いたい。(70代男性)
- ・ 家族に自分の信仰を伝えたい(50代女性)

- ・今、未完了のことはありません（60代女性）
- ・家族に伝えたいことを計画的にピックアップして、一つ一つ計画的に片付けたい（70代女性）
- ・自分には子供がいないので、土地家屋など、自分の財産をどう処分するか（50代男性）
- ・妻にいつぱい負担をかけた。これからもかけるだろうけど・（50代男性）
- ・思い煩うほどのことは無いはずです。いくつになっても長生きしたいと思うでしょう（70代女性）
- ・たくさんあり。大したことはできなかった（60代女性）
- ・私自身のもつ技を出し切ってない（60代男性）
- ・??? 生きていても完了することなどありえない？（30代女性）
- ・仕事の後始末。予定を断るのに迷惑を掛けるなあと思います（60代女性）
- ・兄が信仰をもつようになること（60代女性）
- ・死の床で牧師から聖餐を受けて、感謝の言葉が云えたら、いいなと思います（70代女性）
- ・永遠の命とは、キリスト者は死に向かっているのではない。キリストに向かっている、あまり、先のことは考えなくても良いと賀来先生は云われました。（70代女性）
- ・家族。（60代女性）
- ・死の際には、キリスト教の葬儀を望み、牧師・会員に連絡してもらおう。（70代女性）

・本日の学びの中にあつた様に、受容し←共存することが大切な・・・？ 命の重さをキリストの十字架と復活を通して、愛の喜びとして伝えられればと思つています。(60代女性)

・子供、孫たちがまだ教会に来ていない。どのような形で夫々、考えてくれるか祈つている。(80代女性)

・自分よりも弱い人々にちゃんと手を差し延べてきたのか？ イエス様を知らない人々を導いたか、自分は神様を喜ばせることをして来たか？ (50代女性)

・それぞれ独立した子供家族(2家族)に對すること。わたし自身がなくてはならない財政的なこと。(60代女性)

・召された時が定められた時と思ひ、未練は残したくない。(70代男性)

・特に考えない。子供の生活を考える、気にする。(50代男性)

・のこしていく。家族が心配。(40代女性)

・両親、兄、姉、友人、娘。身近なひとが逝つてしまった現在、人間に生を受けて、自分自身そうにもならないことである。でも、私は自分の死に不安は無いです。どうしてか、私は分かりません。(70代女性)

### 3. 今後、あなたはどのように生きてその日を迎えたいと思ひますか？

・認知症の夫、障害のある子のサポートをしているが、許されるなら、二人を送つてから、逝きたい。

・できることを精一杯こなし、感謝をしつつ、和やかに過ごしたい。(9名)

・ルターのように日々を神に委ね、守られて生きていきたい。

・人々に役立つことをしつつ、身辺の整理をしていきたい。

・クリスチャンとしての立ち位置をはっきりさせる。

・障害のある子供のことは、自分ではどうにもならないが、教会の先生たちをお願いする。

・祈りをもって生きたい。

・導きのうちにあると思う。

・自然体でよい。

・日々古い自分に死ぬこと。

・大切に生きたい。

・神に与えられたことをまっとうすること。

・神に感謝して、優しい心で接していくこと。

・命ある限り、教会生活を大切に。

・人のために、生きる。

・死を迎えるまで健康で静かに天に帰りたい。

・ありのまま。

・癒されない悲しみを持った人々に役立ちたい。

・家族・親しい人に「ありがとう」「よい生涯だった」と言って感謝をしながら天国に

ゆきたい（70代男性）

・ 神から創られたように、成るように、一瞬一瞬を生き、神の定められた時に召天したい。（50代女性）

・ 信仰の日々。（80代男性）

・ 年齢にふさわしい明日の生活をしてゆきたい（70代男性）

・ 日々の（日常の）生活を大切にすること。一日一日を地道に、つつましく。しかし、充実させて生きてゆくこと。（朝・夕の祈り、音楽、学び）（50代女性）

・ やるべきことはできるだけ済ませ、平安な気持ちでその日を迎えたい（60代女性）

・ 一日一日を充実させ、大切に生きたい。（70代女性）

・ それが問題です。（50代男性）

・ 「神は耐えられないような試練には合わせられない」。何事もルンルン気分で生きれば、ルンルンでその日を迎えられる気がします。（70代男性）

・ 聖書をもう一度読み、神の世界を学んでいきます。（60代男性）

・ 朝、起床した時…今朝も生かされていたことに感謝し、神の言葉に応えられるよう、一日生かしてくれるよう祈る。就寝時…一日を感謝し、もし、御心なら明朝も目覚めさせて下さい。でも、死ぬことが御心なら、それも仕方ないと思う。

・ やらねばならないこと、および、やりたいことを精一杯やり続ける。（60代男性）

・ 死ぬ、その日まで、がむしやらに。（30代男性）

・ 毎日毎日を精一杯に生きてゆきたいと思う。（70代女性）

・文学作品を残してゆきたい。(80代男性)

・総てを神にゆだねて生きたいと切に願うのですが？(70代女性)

・自然のまま。(70代女性)

・できれば、自分で最後まで判断し、身体を使って生きられたら良いけれども、不幸だと思える状況だつて、お恵みだと思ふ。(70代男性)

・日々、神の出現を願う。(70代男性)

・日々、神と共に前向きにすごしたい。(60代男性)

・今を与えられたことを感謝しつつ成し遂げる。(50代女性)

・神様のみちびきにより、生きてゆきたいと思ひます。(80代男性)

・いつでも、そのときがきてもあわてない様、心がけていたい。(60代女性)

・死を覚えながら、一日一日を生きたいと思ひます。(70代女性)

・まだ、50代なので、60代は働いて、地元の教会(新大久保の東京教会)で洗礼を受け、教会と地域の人々にご奉仕し、教会で葬つて頂きたく思っています。(50代男性)

・人生の整理をしたい。そのような年代になりました。聖書を読んで準備したい(70代女性)

・祈り、学び、毎日のつとめに励みたい。(50代男性)

・平々凡々と波風立てず、贅沢をせず、誰とも仲良くして、元気な間はあちこち出歩き、健康寿命のまま終わりたい。寝たきりにはならないよう努力したい。(70代女性)



性)

- ・伝道・宣教に力を注ぐこと。子供達の役にたつこと。(60代女性)
  - ・一日一日を楽しく思うままに、神様にまかせて。(60代男性)
  - ・腹八分目の満足度が得られるような努力をもって、充実感をもてるよう生きてその日をむかえられれば。(30代女性)
  - ・ライフワークを続けたい。信仰と愛を貫きたい。(60代女性)
  - ・これからも、どのようなことがあるうとも信仰を持ち続けたい。(60代女性)
  - ・足が動く限り、教会に行きたい。凡てをイエスさま、神様にゆだねて、祈りながら歩んでゆきたい。(70代女性)
  - ・障害者の息子にも死ぬときは、聖餐を受けさせたいと願っている。(70代女性)
  - ・信仰、希望、愛を大事に、教会生活を大切にしたい。(60代女性)
  - ・家族・隣人に証のできる生活をしたい。「愛をもって仕える」、祈りつつ・・・、神を賛美し、祈り、死を迎えたい・・・理想。(70代女性)
  - ・愛されていることを信じ、笑顔で迎えられたらと思っています。緩和ケアに関する仕事に従事していますが(介護士/支援員)、きっと、自分の最後は、悩みの中にも祈りをもって過ごしてゆきたいと希望しています(60代女性)
  - ・毎日を神様に守られ(身も心も)、精一杯、私のできることをやってゆきたいと思う。(80代女性)
- ・つねに赦しの心をもって、助けを求める人々に手を差しのべることができるように、

神様に褒められる日がくるように生きたい。(50代女性)

・日々、キリストにお聞きし、イエスさまと共に生きてその日を迎えたい。明日が世界の終わりでも、「私」は今日、りんごの木を植える精神で。(60代女性)

・与えられている日々がお役にたつものであるように。死の瞬間までそうありたい。

(70代男性)

・神が与えられた時として受け入れられるように。(50代男性)

・やさしく、おだやかに生きたい。(40代女性)

・その日が来る迄、私は予定通りに生活していると思っています。ただ、身近な用品を片付けたいと思っただけで、日々が過ぎていくだろうと思っています。(70代女性)

#### 4. あなたにとって「天国(神の国)」とは？

・この世で終わらない御国があると信じている。

・イエスさまも、先に逝った夫も待っていてくれるところ。

・身近にあると思う。

・神を賛美できる世界。

・必ず、居場所を作ってくださいと思っています。

・幸せな日々が待っていると思う。

・自身の心が天の国と思う。

・ 教会

・ 人の心の中。

・ 先に逝ったひとびとに会えるところ。

・ 主に支え。

・ すべての人を暖かく迎え、花園の中で心身を癒してくれるところ。

・ 思い煩いのないところ。

・ 先に逝った家族に会え、草花に囲まれ、そよ風、川の流れ、小鳥のさえずりがあるところ。

・ 信じられない、人間の弱さ、つらさが創ったフィクション。

・ 神の栄光を賛美し、礼拝をささげるところ。

・ すべてがあるところ。

・ すばらしいところ。

・ 神の支配に預かるところ。

・ 先人の地。

・ 永遠の現在。

・ 神を賛美するだけの時をもてる幸せの国。

・ どんなどころか、楽しみです。

・ そんなところはないと思っっているので、今生きていることに全力です。

・ わからない。

- ・宇宙と一体の世界。
- ・祈りの場。
- ・先に逝った人に再会できるすばらしい所。
- ・理念。
- ・今も天国。
- ・帰るべき実家。
- ・この世で交わった人々と再会でき、イエス様とお会いできる場所。
- ・神の国はすでに垣間みているが、先に逝った人、家族に会える場所。
- ・あこがれ。
- ・仏教信仰者であった家族たちと再会できる場所。
- ・天地創造の神、イエス様のいるところ、そこに希望をもっている。
- ・苦しみや悲しみのない、イエス様が居られるところ。
- ・「神の御心」そのものであり、「神のみ心が成る」ということです。（50代女性）
- ・今、ここで、キリストと共に、生きること。（50代男性）
- ・生きている中、イエスを信じて。（80代男性）
- ・①地にあつて、天国がある。②天にあつて、天は異次元の世界である。（70代男性）
- ・死んだ後、行く所。すでにこの世にいない友人、知人に再び会える場所。（50代男性）
- ・神様と亡き家族に会える平穏な場所。（60代女性）

- ・安心の場所。友人、知人、そして両親が大手を拡げて待っています。（70代女性）
- ・早く行きたいです。（50代男性）
- ・いうことなし！（70代男性）
- ・生きている時の、死んでからも、神様と共にいるところと思っていますが、・（70代女性）
- ・みえない、さわれないのですが信じていきます。（60代男性）
- ・実在しないと思う。私のことを慕ってくれる人の心の中に生きる。その人がキリストを求めるならキリストを媒介として心が共存する。そこにキリストがいる。それが私の天国。（60代男性）
- ・神（主）が共にいらっしやる＝主の平安。（60代男性）
- ・憩いの場。（30代男性）
- ・イエス様の近くにいることのできるころ、一日中、神を讚美しているところ、とお聞きし、素晴らしいと思う。（70代女性）
- ・今、現在。（80代男性）
- ・素晴らしいところと信じています。（70代女性）
- ・未知。（70代女性）
- ・上ではない。今、自分の横にある、見ることが出来る場所。（70代女性）
- ・今、ここにあり。（70代男性）
- ・教会の先達が多くおられ、お会いできると思っております。（60代男性）

・今をよく生きること。

・永遠のやすらぎのある所。(60代女性)

・地上の普通の生活を、神と共に生き、その延長線上にあるものと思う。(70代女性)

・むずかしい問いですね。考えれば考えるほど、どうどう巡りになり応えられません。

(50代男性)

・毎日、礼拝している所。(70代女性)

・神様の「さそい」です。ずっと見えず、わからず、たどり着くかどうかかわからないけど、段々にそちらに向かう……。それが天国かな……。(50代男性)

・休めるところ、身も、心も、心も。(60代女性)

・天国はあると思いたい。そして、入りたいと思う。でも、神様におまかせします。

(70代女性)

・今、教会の人々と、様々なことを分かち合い、話し合うとき、ここは今、天の国だ  
と思う。(60代女性)

・きつと、素晴らしい所でしょう。解らない。(60代男性)

・楽園であってほしいです。(30代女性)

・分らない世界。でも、いいところと信じています。(60代女性)

・一言、「希望」です。(60代女性)

・ちよつと、むずかしいとおもいますが、召天された方々がいらつしやつて、向こうでも礼拝をしていて、私を待っているのかもしれない。

- ・キリストの園。(60代女性)
- ・主と共にある国。永遠の平和。先に召された方々との再会。(70代女性)
- ・神さまのみご存知のこと。たのしみにはしていません。(経験したことがないので)(60代女性)
- ・いつも心の中にある。死んだ人たちも、友人や親しい人の心の中に思われることで永遠の生命を生き続けていると思う。(80代女性)
- ・争いのない(神様に全てをゆだねて)、イエス様と一緒にの所である。(60代女性)
- ・イエスさまがいらっしゃるところ。いつしよに。(60代女性)
- ・神のみ知られるところ。(70代男性)
- ・イエス・キリストとともにあると知ること。(50代男性)
- ・すべてです。(40代女性)
- ・いつの頃からか、天国の門をお開け下さいと祈るときが多くなりました。信仰薄い私ですが、イエス様にお願ひし、天国に入らせて下さいと祈るのみです。(80代女性)

## 第6章 參考資料



## 【参考文献】

石居正巳著 「ルターと死の問題」 (リトン 2009年)

人はそれぞれ自らの死に自覚的に対面しなくてはならない？ 死の恐怖を動機として修道院入りしたルターと死について考察する。ルターの「死への準備についての説教」の抄訳も収録。

キリスト教カウンセリング講座ブックレット1 賀来周一著「キリスト教カウンセリングの本質とその役割」(キリスト新聞社 2009年)

現代社会と人間の問題、「いやし」のわざとしてのカウンセリング、援助の基本、信仰とパーソナリティーの成熟性など、キリスト教という立場に立つて行うカウンセリングの本質とその働きについて解説する。

キリスト教カウンセリング講座ブックレット6 大柴譲治・賀来周一著「聖書のスピリチュアリティー・スピリチュアルケア」(キリスト新聞社 2011年)

現代人は「スピリチュアル」なものに飢えているようである。その現象は今の時代が持つ根源的な不安と閉塞感を表しているともいえる。本書では、現代に生きる私たち

に対し、聖書がどのような「スピリチュアリティ」を提示しているのかを探り、また、臨床牧会の立場から「スピリチュアルケア」について取り上げる。

賀来周一著「サンタクローズの謎」(キリスト新聞社 2008年)

不思議な魅力で世界中から愛されながら、キリスト教会で聖人の座を用意されなかった謎に迫る。

川越厚編「やすらかな死」(日本キリスト教団出版局 1996年)

「私は今、今までの自分の人生の中で最も幸せです」死を目前にした様子さんにこう言わしめたものは？〈在宅ケアこそ究極のホスピス〉という理念を実践した家族と医療スタッフたちの看取りの記録。

T・A・カントネン著、間垣洋助訳「死後の生命 Life after death」(聖文舎 1965年)

窪寺俊之著「スピリチュアルケア学概説」(三輪書店 2008年)  
スピリチュアルケアを体系的に、かつ臨床実践に即した学問として記した本格的教科書。

T・G・タツパート著、内海望訳 「ルターの慰めと励ましの手紙」 (リトン 2006年)

献呈文、序文、公開書簡、意見などを含め、約3000通にも及ぶ現存するルターの書簡の中から、彼の多面的な霊的助言を示すために編まれた選集。病める者へ、遺された者へ：などといったテーマ毎に、時系列に編集する。

アルフォンス・デーケン著「死とどう向き合うか」(NHK放送出版協会 1996年)  
この世に生を享けた全てのものにとつて避けられない現実「死」とどう向き合ってきたらいいのか。日本において「死への準備教育」の普及につとめてきた著者が、その思索の跡を、具体例を交えながら語る。

A・E・マクグラス著、本多峰子訳「キリスト教の天国」(キリスト新聞社 2006年)

「天国」つてどこ? 意外に知らない「天国」のこと! 聖書やキリスト教を素地に、文学・芸術・神学の諸方面で展開した天国の歴史を概観。歴史の中で織りなされた天国のイメージの数々が、今を生きる私たちに慰めと希望をもたらす。

信徒の友セレクト「慰めと希望の葬儀」(日本キリスト教団出版局 2010年)

『信徒の友』に掲載された「葬」に関する記事を精選。キリスト教葬儀の核心となる

死生観や聖書の教えを学びつつ、「遺言書の書き方」「葬儀の流れ」「グリーフケア」などの具体的な段取りや備えを詳述した手引書。

ワルデマール・キツペス著 『スピリチュアルな痛み』 (弓箭書院 2009年)

病む人の苦しみは身体的、心理的なものだけではない。WHOの「がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケア」において身体、心理、社会、そしてスピリチュアルな苦痛の総括的緩和の重要性が指摘されている。本書は「スピリチュアルな痛み」の存在を正しく理解し、その緩和・解放へ向けて、さまざまな事例をまじえながら解説する。

キューブラー・ロス著 『死ぬ瞬間―死とその過程について』 (中央公論新社20

01年)

死とは、長い過程であって特定の瞬間ではない―人生の最終段階と、それにとまなう不安・恐怖・希望…二百人への直接面接取材で得た“死に至る”人間の心の動きを研究した画期的な書。末期患者を会話へと誘い、病院における患者管理の長所と欠点を彼らから学ぶ。69年初版以来、全世界で広く読みつがれてきた、ターミナルケアのための「聖書」。

カール・B・ベツカー著 『死の体験』 (法蔵館1992年)

“臨死体験について書かれた最高の本の一冊”(遠藤周作氏評)。日本の死生観と医療

倫理、自殺と安楽死、ホスピスとターミナル・ケア、命教育とスピリチュアル・ケアを研究テーマとする京都大学大学院人間・環境学研究科教授の代表単著。世界的権威の日本語書き下ろし。

## 【緊急洗礼について】

日本福音ルーテル教会 東教区長・牧師 大柴讓治（武蔵野教会）

### 〈はじめに〉

まず最初にJELC青式文（1996）に掲載されている緊急洗礼に関する二つの式文を転載しておきましょう。緊急洗礼に関する式文が式文の中に位置づけられたのは、もうすぐ120年になるうとするJELCの歴史の中でもこれが初めてだったのではないでしょうか。それは、以下のように極めてシンプルなものですが、とても重要な意味を持っています。このようなものがあるということをご存じない方も少なくなかったのかもしれませんが、この式文が公にされた時に私は牧師として内心深く驚きを禁じ得ませんでした。公におけるサクラメントの執行は、按手を受けた牧師にのみ許されているものだからです。しかしそこで明確に告げられていることは、教会の秩序を乱すような無用な混乱は避けられなければなりません、そのルブリックの3が明示しているように、緊急の事態には、「牧師を招く時間がない場合、すべての信徒は緊急の洗礼を授けることができる」のです。このことの前に教職も信徒も共に襟を正したいと思えます。もちろんこのことは後日、ルブリック6が明示しているように、教会の承認を必要としています。

**緊急の洗礼**

1. 死の危険にある者に緊急の洗礼を施すことができる。
2. 洗礼を受ける者が幼・小児の場合、親が信徒であるときは当然、親が信徒でないときでも、正当な申し出があれば緊急の洗礼を授けることができる。  
洗礼を受ける者が青年・成人に達している場合、本人が過去、または現在、なんらかの方法で受洗の意志を表しているときは緊急の洗礼を授けることができる。
3. 牧師を招く時間がない場合、すべての信徒は緊急の洗礼を授けることができる。
4. 洗礼の方法は、滴礼でもよい。
5. 緊急の洗礼は、それが証明されるために、少なくとも一人（以上）の信徒の同席が望ましい。
6. 信徒が緊急の洗礼を授けた場合、速やかに洗礼の執行を牧師に報告し、牧師は洗礼が正当に授けられたかどうかを確認し、後日、教会に報告する。
7. 洗礼を受けた者の氏名は、その洗礼日、生年月日、および両親・教保、洗礼執行者の氏名と共に、速やかに教会の教籍簿に記入されなければならない。



緊急の洗礼式は、「洗礼式文」の「6. 授洗」によって、キリストのみ言葉・洗礼・祝福の順に行なわれることが望ましい。但し、事情によっては以下の通りの洗礼であってもよい。

洗礼の執行者は次のように言い、受洗者の頭に水を三度注ぐ。

〇〇〇〇。私は、あなたに洗礼を施します。

父と、

子と、

聖霊のみ名によって。

(受洗者) 「アーメン」

続いて、「主の祈り」を祈ることが望ましい。

また、「新しいしるし」として、「十字架のしるし」及び、「洗礼名」を与えてもよい。

.....

緊急の洗礼を受けた者が、回復した場合は後日、教会の礼拝で公の祝福をする。

## 緊急の洗礼者への公の祝福



緊急の洗礼の執行者が信徒である場合、司式者は次の通り尋ねる。

この祝福は、通常の礼拝では「16・信仰」の告白に続いて行なう。

初めに讃美歌を歌ってもよい。

教保が定められていない場合、この祝福に際して教保が置かれることが望ましい。

会衆は着席し、受洗者（幼・小児の場合はその親、但し、親が未信徒の際には教保が伴う）、および洗礼の執行者、証人、教保は聖壇上中央部に進み、聖卓に向かって立つ。

### 洗礼の執行の確認

司) 洗礼を施したのはだれですか。

(洗礼の執行者) 「○○○○が洗礼を施しました。」

司) 洗礼に立ち合ったのはだれですか。

(証人) 「○○○○が洗礼に立ち合いました。」

司) 洗礼は「父と子と聖霊のみ名によって」、水をもって行なわれましたか。

(受洗者、洗礼執行者、証人) 「はい。」

会衆は起立し、司式者は一同に言う。

司) 主イエス・キリストのみ言葉に従って、この洗礼が正しく施されたことを認めます。

続いて「洗礼式文」185ページ「7. 受洗者のための祈り」「8. 新しいしるし」「9. 教会員への勧め」が行なわれる。

但し、緊急洗礼のとき「新しいしるし」が与えられている場合は、「8. 新しいしるし」を省く。

### 〈その神学的根拠〉

「サクラメント（ラテン語。ギリシャ語ではミユステリオン）」は、プロテスタント教会では通常「聖礼典」と訳されますが、ローマ・カトリック教会では「秘跡」、聖公会では「聖奠（せいてん）」、東方教会では「機密」と訳されます。それはまた、神の「恵みの手段 *the means of Grace*」とも呼ばれます。「サクラメント」においては神ご自身が働かれ、それを通して私たちには溢れるほどの神の恵み（恩寵）が注がれるのです。「サクラメント」とは、目に見えない神の見える恵みのしるしなのです。

中世においてはサクラメントの執行者の資格が大問題となったことがありました。不適格な者によって執行されたサクラメントは有効かどうかが議論されたのです。例えば、自分に洗礼を授けてくれた牧師が途中で辞めてしまったとすると、その洗礼が有効かどうか私たちにも気になります。しかし大丈夫。それは有効なのです。私たちがルーテル教会の信仰告白文書の一つである『アウグスブルグ信仰告白』は第8条に「不信仰な司祭によって与えられた聖礼典も同じく有効である」（ドイツ語本文）とも「聖

礼典もみことばも、キリストの設定であり委託であるから、たとえそれが悪人によって与えられても有効なのである」(ラテン語本文)と明示している通りです。

神はその恵みを、サクラメントを通して、一方的に、無代価で、(授洗者も受洗者も) 私たち人間の側の資格を問わずに、私たちの上に豊かに注いでくださるのです。神学校時代に「恩寵無限奨学金」という名の奨学金がありました。その名の通りに神の恩寵は無限なのです。その無限の力を持った神の恩寵(恵み)が私たちの存在をその根底から新たに造り変えてくれるのです。ちょうどカナの婚宴で水が最上のブドウ酒に変えられたように、私たちの存在が神のアガペーの愛によってトランスフォームされるのです。

ローマ・カトリック教会はそのことを「人効的効力(エクス・オペレ・オペランテイス)」によらず「事効的効力(エクス・オペレ・オペラート)」によると受け止めました。ローマ・カトリック教会では、未信者による授洗も有効であると考えています。しかし私たちルーテル教会は、サクラメントをそのように機械的に受け止めるのではなく、どこまでも罪の赦しの約束を信じる「信仰」と結びつけて受け止めることが必要であると考えています。アウグスブルク信仰告白の第13条が次のように告白する通りです。「聖礼典の使用については、次のように教える。すなわち、聖礼典は外的にキリスト者を識別するしるしであるばかりでなく、むしろわれわれに対する神のみ旨のしるしであり証明であって、それによって、われわれの信仰を目ざめさせ、強めるために設定されている。それゆえ、これは信仰を要求する。また信仰において受けとら

れ、それによって信仰がよめられるとき、正しく用いられる」。

### 〈その実際あるエピソードから〉

私は牧師になってちょうど25年になりましたが、昨年2010年9月6日(月)に初めて、一人の信徒がご自分のお母さまに緊急洗礼を授けるというケースを体験しました。これは武蔵野教会で実際にあったことです。くも膜下出血で倒れたご婦人(山口つぎさん、89歳)に、病院への途上にあつた牧師に代わってお嬢さま(山口好子さん、武蔵野教会員)が病室で洗礼を授けてくださったのです。息を引き取られてしばらくしてから私は病院に到着しました。もしもの時には私自身はその場で洗礼を授けようと覚悟をしていました。しかし山口好子姉によって緊急洗礼が行われたと伺い、驚くと共に深く安堵しました。それはまさに神の恵みの出来事であつたと思います。私はその場で臨終の祈りにおいて感謝を捧げました。牧師はいつも神さまのなさる救いのドラマを最前列で目の当たりにすることを許されているように感じます。牧師は確かに三日やったら止められないのです(ただし体力的に三日持つかどうかは分かりませんが)。

倒れる二ヶ月ほど前に、山口つぎさんは既にお嬢さまの好子さんを通して洗礼を受けたいと私に申し出ておられました。私が受洗準備のために、つぎさんが入所されている老人保健施設に最初で最後の訪問したのは、つぎさんが天に召される一月前のことでした。その際にお嬢さまの山口好子さんには、もしもの場合には信徒が緊急洗

礼を行うことができるということをやめ伝えてありました。ここでは「水」と「証人」が必要になるということも申し添えてありました。その言葉の通り、山口好子さんは集中治療室で看護師さんを証人にして緊急洗礼式を行ったのです。それは神の時を知らせた聖霊の働きでもあったと思います。

天に召される前日の9月5日(日)、武蔵野教会での主日礼拝の後に好子さんはお母さまを老健にお見舞いされました。その時お母さまのつぎさんは笑いながらこうおっしゃったそうです。施設の職員でしょうか、ある方が胸に十字架のペンダントをしていたのを見てお母さまは「あなたクリスチャン？」と尋ねたそうです。「いいえ、違います」という答えが帰ってきたので、お母さまはその人に「わたしはクリスチャンよ」と言われたのだそうです。それはお母さまの明確な信仰告白でもありました。そのことがあったのは、お母さまがお嬢さまから緊急洗礼を受けて天に召される前日の出来事でした。実に不思議なことでした。まことに、神のなさることは皆その時に適って美しいと言わなければなりません(口語訳聖書、伝道の書3…11)。

洗礼は神が私たちをしつかりとその恵みの中に捉えてくださるという出来事です。椎名鱗三は受洗時にこう言ったそうです。「ああ、これでオレは、安心してジタバタして死んでゆける」。いかにも椎名鱗三らしい逆説的な信仰告白です。私たちもまた、サクラメントを通して、そのような神の恵みの御業に与っていることを感謝したいと思います。ルターの『小教理問答書』からの一節で終わりたいと思います。 s. p. g.

「わたしたちは、この祈りにおいて、ひとまとめにして、天の父がからだと魂、財貨と名譽にかかわるすべてのたぐいの悪から、わたしたちを救い、そしてついにはわたしたちの臨終にさいして、祝福された終わりを与え、恵みをもって悲しみ多いこの世から、天へと受けいれてくださることを祈るのです。」（主の祈りの第七の願い）

## 【祈り・式文】

### 臨終の祈り

1. 詩篇 司式者は次の詩篇を唱えてもよい。

司) 主よ、み許に身を寄せます。

あなたの耳をわたしに傾け、急いでわたしを救い出してください。

まことの神、主よ、み手にわたしの霊を委ねます。わたしを贖ってください。

司) いかにかに幸いなことでしょう。背きを赦され、罪を覆っていただいた者は。

司) いかにかに幸いなことでしょう。主に咎を数えられず、心に欺きのない人は。

2. 聖書 司式者は次の聖書の一つを読む。

司) 主イエスは言われました。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」

司) 「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。

これは、神の豊かな恵みによるものです。」

3. 特別の祈り ( ) に臨終の者の名前を入れてもよい。

司) 全能の神。

み子イエス・キリストにより、赦しの恵みを与えられた者は、この世の生活を終

えた時、み子のおられるところに、み子ご自身によって迎えられることを、あなたに約束してくださいました。今、愛する兄弟／姉妹／幼子の霊を、あなたのみ手に委ねます。どうか「天地創造の始めから用意されている国を受け継ぎなさい」との喜ばしいみ声を聞かせてください。小羊の血による義の衣をもつて覆い、傷のない者としてみ前に立つことができるようにしてください。

会）アーメン。

続いて一同で主の祈りをしてよい。

司式者は臨終の者の頭に手を置いて言う。

司）主イエスは言われました。

「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる。」アーメン



## 通夜記念式式文（葬式前の記念式あるいは前夜式）

- ・通夜記念式は、自宅、教会その他で行なう。
- ・記念式は、逝去者を偲び、遺族への慰めを祈るために催される。
- ・記念式の中で、或いはその後で、逝去者を偲び、友人、関係者、遺族による思い出が語られてもよい。

1. 讚美歌 讚美歌は歌っても、唱和してもよい。

2. 讚美唱 次の詩篇を交唱、または司式者が朗読する。

司) 主よ、あなたは代々に、

会) わたしたちの宿るところ。

司) 山々が生まれる前から、大地が、人の世が、生み出される前から、

会) 世々とこしえにあなたは神。

司) あなたは人を塵に返し、

会) 「人の子よ、帰れ」と仰せになります。

司) 千年といえども、あなたの目には、

会) 昨日が今日へと移る夜のひとときにすぎません。

司) あなたは眠りの中に人を漂わせ、

会) 朝が来れば、人は草のように移ろいます。

司) 朝が来れば花を咲かせ、やがて移ろい、

会) 夕べにはしおれ、枯れて行きます。

司) あなたの怒りによつてわたしたちは絶え入り、

会) あなたの憤りに恐れます。

司) あなたはわたしたちの罪をみ前に、

会) 隠れた罪をみ顔の光の中に置かれます。

司) わたしたちの生涯はみ怒りに消え去り、

会) 人生はため息のように消え失せます。

司) 人の生涯は七十年ほどのもの、健やかな人が八十年を数えても、

会) その得るところは労苦と災いにすぎません。瞬く間に時は過ぎ、わたし

たちは飛び去ります。

司) み怒りの力を誰が知りえましようか。

会) あなたを畏れ敬うにつれて、あなたの憤りをも知ることでしょう。

司) 生涯の日を正しく数えるように教えてください。

会) 知恵ある心を得ることができますように。

司) 父、み子、聖霊の神にみ栄えあれ、

会) 初めも今ものちも、世々に絶えず。アーメン

3. 特別の祈り | に故人の名を入れてもよい。

司) すべての者の父なる神。

この世の旅路を終え、み心によって召された兄弟／姉妹／幼子を、あなたのみ手に委ねます。

あなたのはかり知ることのできない知恵と全能の力をもって、み子による恵みの約束を成就し、召された者を慈しみをもって受け入れ、とこしえの光によって照らしてください。悲しみのうちにある者を顧み、主にある平安を満たしてください。

死んで復活し、あなたと聖霊と共にただひとりの神であり、永遠に生きて治められるみ子、主イエス・キリストによって祈ります。

(会) アーメン

4. 聖書 次の聖書箇所、或いはその他の適切な箇所を朗読する。

コリントⅡ5・1～10 ヨハネ 11・21～27 ヨハネ 14・1～6

5. 説教

6. 讃美歌

7. 祈り この他、適切な祈りを、また会衆の祈りを加えてもよい。

(司) すべての生命、すべての力の源である全能の神。

み旨によって召された者の在りし日に、あなたが賜った数々の恵みを偲び、また召された者の言葉と生活を通して私たちに与えられた恵みを覚えて感謝します。

どうか、私たちも、常にあなたのみ手に支えられてこの世の歩みを続けて、やがてみ国の栄光に与かることができるように導いてください。悲しみのうちにある

遺族に、あなたの慰めを与えてください。

み子、主イエス・キリストによって祈ります。

(会) アーメン

(ここで遺族、会衆の中から、故人の信仰についての思い出が語られてもよい。)

8. 主の祈り 続いて、一同で主の祈りをしてもよい。

9. 讃美歌 讃美歌は歌っても、唱和してもよい。

10. 祝 福

(司) 全能の神の祝福と慰めが、あなたがたにあるように。

父と子と聖霊のみ名によって。

(会) アーメン

## 納棺の祈り

・一同、逝去者の亡骸のかたわらに集まる。都合によっては納棺の前、或いはその後でもよい。

1. 讚美歌 初めに讚美歌を歌つてもよい。

2. 詩篇唱 司式者は詩篇を唱え、または交唱する。

司) 主はわたしの羊飼ひ、

会) わたしには何も欠けることがない。

司) 主はわたしを緑の野に休ませ、

会) 憩いの水のほとりに伴ひ、わたしの魂を生き返らせてくださる。

司) 主はみ名にふさわしく、わたしを正しい道に導かれる。

会) 死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。

司) あなたがわたしと共にいてくださる。

会) あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける。

司) わたしを苦しめる者を前にしても

会) あなたはわたしに食卓を整えてくださる。

司) わたしの頭に香油を注ぎ

会) わたしの杯を溢れさせてくださる。

司) 命のある限り、恵みと慈しみはいつもわたしを追う。

(会) 主の家にわたしは帰り、いつまでも、そこにとどまる。

司) 父、み子、聖霊の神にみ栄えあれ、

(会) 初めも今ものちも、世々に絶えず。アーメン

3. 特別の祈り (一) 適切に言い換えてよい。

司) すべてのものの造り主、全能の神。

私たちは今愛する者の亡きがらをひつぎに納めるため、ここに集まっています。あなたの大きな恵みによって、愛する者はこの世に生を与えられ、私たちのうちにあり、あなたに支えられて共に生き(主イエスによって、あなたの約束された永遠の生命に与かり、信仰によってその歩みを続け)てきました。

今、走るべき道のりを走り尽くし、(人の思いを超えたあなたの召しによって)

地上の生を終えた兄弟／姉妹／幼子——にあなたが与えてくださった数々の

恵みと、その生涯を通して私たちに与えられた恵みを覚えて感謝いたします。

私たちのために場所を備えると約束されたみことばのとおり、み手のうちに迎え、この世の別れが永遠の別れでないことを覚えさせ、み許において再び顔と顔を合  
わせる日を望ませてください。

私たちは愛する者の亡きがらを、ひつぎに納め、地上における別れをいたします。どうか悲しみのうちにある私たちをみことばをもって励ましてください。これから行なわれることをきよめ、主のみ栄えを顕させてください。

その死によって死に打ち勝ち、今も生きて働いておられる主イエス・キリストの

み名によつてお願いいたします。

4. 祝福

司) 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。

会) アーメン

## 葬式について

### ① 基本的な注意

1. 葬儀は亡くなった人を信仰において葬る仕方を表している。したがって、当該者が信徒でない場合でも、希望によってこれを行なうことができる。いずれの場合でも、キリストによって成就された罪の赦しと永遠のいのちの福音のもとで、死を厳粛に理解して行なうことが求められる。

2. 式を行なうに際しては次のことに留意しなくてはならない。

1 葬りが神の愛への信頼をもって行なわれること。

2 聖書的でない考えが混入することを避けること。

3 キリストの福音が明確に表現されること。

4 ひとりの人の逝去は、当然家族や社会的な関係をもつ人々に関わることであるから、その遺族、関係者と充分打ち合わせて、これを行なうこと。

5 葬りに関わる地方的習慣は、聖書の教えに反しない限りは、これを考慮することができらる。

6 関係する葬祭業者に、教会の見解を明確にして、式を構成すること。

7 葬式（告別式）には参加者が式全体に参加することが基本的に期待されている。



3. 葬式を執行することにより、教会はその式後も牧会的関わりをもち、遺族の家庭へ神の慰めを祈り、祝福を送ること、また故人を覚えることに留意しなくてはならない。信徒の家庭に対しては勿論、そうでない場合も同様である。

4. 葬儀に関する諸式の関わりについては、事情によって諸式を前後して執行しなくてはならない場合がある。しかし、いずれの場合でもそれによって葬儀の本質が損なわれるわけではない。

・通常の場合

(1) 臨終の祈り (2) 納棺の祈り (3) 通夜記念式 (4) 葬式（出棺） (5) 火葬

・ほかの組合せ

a .. (1) 同右 (2) 同右 (3) 葬式（出棺） (4) 火葬

b .. (1) 同右 (2) 同右 (3) 出棺 (4) 火葬 (5) 通夜記念式 (6) 葬式

c .. (1) 同右 (2) 同右 (3) 出棺 (4) 火葬 (5) 葬式

② 実際上の注意

1. 葬式の場所と時について

葬式の場所や時については、一般の諸式についての注意に従う。

2. 式順序について

葬式文の番号の括弧付きの部分は省いてもよい。

3. 葬式場の設営について

a…棺は、可能な限り、聖卓正面にその頭部を会衆側にして縦に置く。

場所の事情によつて縦に置くことのできない場合は、頭部が会衆席から向かつて左（福音側）になるように心がける。

b…棺や写真などが中央聖壇にとつて代わり、またそれが聖卓の高さより高くなるような配置、または花類が聖壇部（聖卓）全体を覆うような装飾は避ける。

c…会堂でない場合は、会堂に準じて場所を作る。

4. 式中で会衆が起立する場合

場所とその教会の習慣を考えてもよいが、福音書の朗読、葬送のことば及び葬送の行進の際は起立する。

5. 弔辞は通夜前夜式の「7.」の後に入れてよいが、葬式に入れる場合は「16.」の後にする。但し式の流れを損なわないように留意し、弔辞が遺族に対して弔慰と慰めの意を表すものであることを明らかにしておくことが必要である。

6. 式の初めに「故\_\_\_\_\_さんの\_\_\_\_\_式を始めます」と言い、またコリントⅡ1:

3〜4などの聖句を加えてもよい。

7. 「主の祈り」は文語を用いてもよい。

## 葬式式文

1. 讃美歌 讃美歌は歌つても、唱和してもよい。  
2. み名による祝福

司) 父と子と聖霊のみ名によって。

会) アーメン

3. 詩篇 次の詩篇を交唱、または朗読する。

司) 深い淵から、主よ、あなたに叫びます。

主よ、この声を聞き取ってください。

会) 嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。

司) 主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら、

会) 主よ、誰が耐ええましょう。

司) しかし、主よ、赦しはあなたのもとにあり、

会) 人はあなたを畏れ敬うのです。

司) わたしは主に望みをおき、

会) わたしの魂は望みをおき、み言葉を待ち望みます。

司) 父、み子、聖霊の神にみ栄えあれ、

会) 初めも今ものちも、世々に絶えず。アーメン

4. キリエ 司式者と会衆は交唱する。

司) 主よ、憐れんでください。

会) 主よ、憐れんでください。

司) キリストよ、憐れんでください。

会) キリストよ、憐れんでください。

司) 主よ、憐れんでください。

会) 主よ、憐れんでください。

5. 特別の祈り 次のいずれかを祈る。

(一)

司) 全能の神、永遠の父。

あなたは、悲しむ者の慰め、また弱い者の力です。どうか、苦しみ、悩みの中にあって、あなたを呼び求める者の祈りに耳を傾けてください。私たちが必要とする時、それにふさわしいあなたの助けと慰めを受け、また、あなたのみ心を悟ることができるようになってください。

あなたと聖霊と共にただひとりの神であり、永遠に生きて治められるみ子、主イエス・キリストによって祈ります。

会) アーメン

(二)

司) 全能の神。

主にあつてこの世を去る者は、この世を離れてもなおあなたと共にあり、喜びと

祝福のうちに生き続けます。地上の旅を信仰をもって終え、その労苦から解かれて休みに入ったに、あなたが与えてくださった恵みを思い起こして感謝をささげます。先立って逝きし者と再び会う時まで、私たちが永遠の門を望みつつ、歩み続けることができるように助けてください。

あなたと聖霊と共にただひとりの神であり、永遠に生きて治められるみ子、主イエス・キリストによつて祈ります。

(会) アーメン

6. 使徒書朗読 司式者は次の聖書箇所から、また適切な箇所を選んで朗読する。

ローマ 8…31〜39 ペトロ 1…3〜9

コリント 1…15…12〜26 黙示録 21…3〜7

コリント 1…15…50〜58 黙示録 7…9〜17

テサロニケ 1…4…13〜18

7. 詩篇唱 次の詩篇を交読、交唱、もしくは司式者が朗読する。口語訳を用いてもよい。

(司) 主はわたしの羊飼ひ、

(会) わたしには何も欠けることがない。

(司) 主はわたしを緑の野に休ませ、

(会) 憩いの水のほとりに伴ひ、わたしの魂を生き返らせてくださる。

(司) 主はみ名にふさわしく、わたしを正しい道に導かれる。

司) 会) 死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。  
あなたがわたしと共にいてくださる。

会) あなたはあなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける。

司) わたしを苦しめる者を前にしても、

会) あなたはわたしに食卓を整えてくださる。

司) わたしの頭に香油を注ぎ、

会) わたしの杯を溢れさせてくださる。

司) 命のある限り、恵みと慈しみはいつもわたしを追う。

会) 主の家にわたしは帰り、いつまでも、そこにとどまる。

司) 父、み子、聖霊の神にみ栄えあれ、

会) 初めも今ものちも、世々に絶えず。アーメン

8. 福音書朗読 司式者は、次の聖書箇所から、または適切な箇所を選んで朗読する。

ルカ 7 … 11 … 17 ヨハネ 14 … 1 … 6 (小児)

ヨハネ 5 … 24 … 29 マタイ 9 … 18 … 26 (小児)

ヨハネ 11 … 21 … 27 マルコ 10 … 13 … 16 (小児)

9. 讃美歌 歌っても、唱和してもよい。

10. 説教 説教の前、或いは後で故人の略歴が紹介されてもよい。

11. 讃美歌又は讃歌 歌っても、唱和してもよい。

次のシメオンの讃歌を用いてもよい。

全) 主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。

わたしはこの目であなたの救いを見たからです。

これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。

次の通常礼拝式文のヌンク・デイミテイスを歌ってもよい。

全) いま、わたしは、主の救いを見ました。

主よ、あなたはみことばのとおり、僕を安らかに去らせてくださいます。この救いはもろもろの民のために、おそなえになられたもの、異邦人の心を開くひかり、み民イスラエルの栄光です。

## 12・祈り

司) 天の父なる神。

会) 憐れんでください。

司) 世の贖い主、み子なる神。

会) 憐れんでください。

司) 慰め主、聖霊なる神。

会) 平安をお与えください。

続いて、司式者は以下のいずれかの祈りを祈る。

司) 恵みの神。

信仰の道のりの終わるまで、あなたの僕らに注がれた恵みのみわざに感謝します。信じる者の魂を、この世の重荷から解き放し、あなたのみ許に憩わせてください。

主イエス・キリストのみ名によって。

会) 主よ、お聞きください。

司式者、または会衆、或いは遺族の代表によって、次の祈りのうちから幾つかの祈りを続ける。

(一)

司) 主にあつて眠る者のために、嘆くことのないように教えられた天の父なる神。

あなたの憐れみをもって、この世の生涯を終えた者を、すべてのあなたの聖徒たちと共に、永遠の喜びに与らせてください。

キリストのみ名によって。

会) 主よ、お聞きください。

(二)

司) 慈しみ深い神。

悲しみにくれる者を顧み、心に痛手を受けている者を、あなたの慰めのうちに保ってください。あなたが共におられることにより、望みと励ましをもってその心を満たしてください。



キリストのみ名によって。

(会) 主よ、お聞きください。

(三) (小児のために)

司) 幼子をみ手に抱き、祝福を与えられた主イエス・キリストの父。

いのちを与え、また召されるあなたのみ手のうちに、幼子の魂を守り、永遠のみ国へ導いてください。子を思う親たちの心に、あなたのみ顔の光を注ぎ、あなたの平安をお与えください。

キリストのみ名によって。

(会) 主よ、お聞きください。

(四) (小児のために)

司) 慈しみ深い父。

召された幼子の姿を心に刻む者の思いを顧み、この世が与えることのできない平安を注いでください。永遠のいのちの約束に頼って生きる私たちを助け、み国の喜びの日を望み見る慰めをもって、心を満たしてください。

キリストのみ名によって。

(会) 主よ、お聞きください。

(五)

司) み子を陰府にまで降された全能の神。

あなたの前に世は起り、また過ぎ去ります。生きている者と死んだ者の主であ

るあなたのもとで、私たちに聖徒の交わりにある慰めと希望をお与えください。天にある教会と共に、私たちも今地上にあつて、あなたのみ名に誉れと讚美をさげることができるようになってください。

キリストのみ名によつて。

会) 主よ、お聞きください。

(六) (洗礼を受ける機会を得ることなく亡くなった人のために)

司) 天の父なる全能の神。

人の生死はすべてみ手のうちにあります。あなたが、愛する  
を私たちに  
与え、私たちの交わりのうちにあなたのみ業を現してください。感謝し  
ます。

はあなたを信じることを公に言い表し、み子の死と復活に与かる洗礼を  
受ける折りを得ないで世を去りましたが、(「あなたへの畏れと愛を示していま  
す。」その他、適切な言葉を加えてもよい。) どうか人の心の奥底を見てくださ  
る主の慈しみのうちに受け入れ、主の愛のみ旨を全うしてください。さるよう  
にお願い  
いたします。

私たちの救い主、イエス・キリストのみ名によつて。

会) 主よ、お聞きください。

(七) (上記6の場合、次の祈りを続けてもよい)

司) 全能の憐れみ深い神。

今この世を去った者をあなたの恵みによって顧みてください。み子を陰府にまで降されたあなたの憐れみによって、あなたの完全なみ旨を成し遂げてください。贖い主キリストのみ名によって。

(会) 主よ、お聞きください。

他の祈りを加えてもよい。

召された者に対して、また召された者を通して与えられた神の恵みを感謝し、キリストにある望みと残された者への慰めを祈ってよい。

結びの祈り

(司) 人の思いを超える愛によって、独り子イエス・キリストを与えられた神。み子によって、死の力を砕き、復活による栄光のみ国を明らかにされたみ業をあげます。死もいのちも、現在のものも将来のものも、主イエス・キリストにあるあなたの愛から、私たちを引き離すことができないことを信じ、あなたの愛にすべてを委ねます。

あなたと聖霊と共にただひとりの神であり、永遠に生きて治められるみ子、主イエス・キリストによって祈ります。

(会) アーメン

13. 葬送の辞 一同起立する。

(司式者は棺の傍らに立ち、次のいずれかの言葉を言う。)

(一)

司) 地上の体が滅びても、新しい天と新しい地が成就される時、主のみ力は卑しい体を変えて、栄光の体にかたどらせてくださいます。

主よ。キリストによつて、復活と永遠のいのちに至る確かな望みを抱き、今愛する者の亡骸を元に戻し（土を土に、灰を灰に、塵を塵に返し）ます。すべてのものの終わりを清め、美しくしてくださるみ業をたたえつつ、救い主、み子イエス・キリストのみ名によつて。

会) アーメン

(二)

司) 私たちの主イエス・キリストにより、とこしえのいのちに復活する確かな望みをもつて、私たちは地上の生涯を終えた兄弟／姉妹——を全能の神に委ね、その体を元に戻し（土を土に、灰を灰に、塵を塵に返し）ます。主が彼／彼女を祝福し、彼／彼女を守つてくださるように。

主がそのみ顔をもつて、彼／彼女を照らし、彼／彼女を憐れんでくださるように。

主が慈しみをもつて彼／彼女を顧み、彼／彼女に平安を賜るように。

会) アーメン

(三)

司) 全能の神が、私たちの兄弟／姉妹——をこの地上の生涯からみ許に召されたので、私たちは彼／彼女の体を元に帰します。私たちは、死者の中から復活し

た最初の者である主イエス・キリストが、私たちを復活させ、朽ちゆく体をその栄光の姿に変えてくださることを知っています。私たちは、私たちの兄弟／姉妹をみ手に委ねます。主が彼／彼女を平安のうちに受け入れ、終わりの日に復活させてくださるよう。

会) アーメン

14. 主の祈り 続いて、一同で主の祈りをしてよい。

15. 祝福祈願

司) 永遠の契約の血による羊の大牧者、わたしたちの主イエスを、死者の中から引き上げられた平和の神が、み心に適うことをイエス・キリストによってわたしたちにしてくださり、み心を行なうために、すべての良いものをあなたがたに備えてくださるよう。栄光が世々限りなくキリストにありますように。

会) アーメン

16. 讚美歌 ここで讚美歌を歌い、または唱和して、葬式を一応終わり、遺族があいさつをするなどしてもよい。

17. 献花または献香 参会者各々が、召天者を記念して花を贈る場合、または祈りの献香を行なう場合には、「父なる神よ、逝きし者を見手に委ねます」と黙想のうちに祈りつつ行なう。

18. 葬送の行進 関係者は二列になり、棺（亡骸の頭部を前方にして）を中央に、その両脇から奉持して出棺し、火葬、埋葬の儀場に向かう。

(火葬後の葬式では、葬送の行進は省かれる。)

司) 十字架に掛けられたひとりと言った。「イエスよ、あなたのみ国においてになるときは、わたしを思いだしてください」。するとイエスは、「はつきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

(出棺に先立って讚美歌を歌い、または司式者が次の聖句を読み、或いは会衆と唱和してもよい。)

(一)

司) 心の貧しい人々は幸いである。

会) 天の国はその人たちのものである。

司) 悲しむ人々は幸いである。

会) その人たちは慰められる。

司) 柔和な人々は幸いである。

会) その人たちは地を受け継ぐ。

司) 義に飢え渴く人々は幸いである。

会) その人たちは満たされる。

司) 憐れみ深い人々は幸いである。

会) その人たちは憐れみを受ける。

司) 心の清い人々は幸いである。

会) その人たちは神を見る。

司) 平和を実現する人々は幸いである。

会) その人たちは神の子と呼ばれる。

司) 義のために迫害される人々は幸いである。

会) 天の国はその人たちのものである。

(二)

司) 万軍の主よ、あなたの住まいはいかに麗しいことでしょう。

会) わが魂は絶えいるばかりに主の大庭を慕い、わが心とわが身は生ける神にむかって喜び祝います。

司) すずめがすみかを得、つばめがその雛を入れる巢を得るように、

会) 万軍の主、わが王、わが神よ、あなたの祭壇の傍にわが住まいを得させてください。

司) あなたの家に住み、つねにあなたをほめたたえる人は幸いです。

会) その力があなたにあり、その心がシオンの大路にある人は幸いです。

司) 彼らは嘆きの谷を通つても、そこを泉のあるところとします。

会) また前の雨は池をもつてそこを覆います。

司) 彼らは力から力に進み、

会) シオンにおいて神々の神にまみえるでしょう。

司) 万軍の神、主よ、わが祈りをお聞きください。

会) ヤコブの神よ、耳を傾けてください。

司) 神よ、われらの盾をご覧になり、

会) あなたの油注がれた者の顔を顧みてください。

司) あなたの大庭にいる一日は、よそにいる千日にもまさるのです。

会) わたしは悪の天幕にいるよりは、むしろわが神の家の門守となることを願います。

司) 主なる神は日です、盾です。神は恵みと誉れを与え、

会) 直く歩む者に良い物を拒まれることはありません。

司) 万軍の主よ、

会) あなたに信頼する人は、幸いです。



## 出棺に際して

・出棺に際しての式は、葬式（18）の葬送の行進に当たるものであつて、火葬、或いは埋葬等の儀場に向かう際に用いる。

1. 讚美歌 初めに、讚美歌を歌い、または唱和してもよい。

2. 聖書

司) 十字架にかけられたひとりは言った。「イエスよ、あなたの御国においてなるときは、わたしを思いだしてください」。するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

3. 祈り

司) 全能の神。

あなたは、み子イエス・キリストによつて、死を滅ぼし、聖徒の墓をきよめてくださいました。また、その栄え輝く復活により、永遠のいのちを明らかにしてくださいました。いま（住みなれた地上の家から）送り出される者が、主が先立つて導かれる道をたどり、主にあつて安らかに憩い、主と同じ姿につくり変えられて目覚めることができるようにしてください。

復活といのちの主、み子イエス・キリストによつて祈ります。

(会) アーメン

4. 葬送の行進 関係者は二列になり、棺（亡骸の頭部を前方にして）を中央に、その

両脇から支えて出棺し、火葬、埋葬の儀場に向かう。

・ 出棺に際し、またはそれに先立って司式者は次の聖句を朗読する。或いは会衆一同で唱和してもよい。

(一)

司) 心の貧しい人々は幸いである。天の国はその人たちのものである。

悲しむ人々は幸いである。その人たちは慰められる。

柔和な人々は幸いである。その人たちは地を受け継ぐ。

義に飢え渴く人々は幸いである。その人たちは満たされる。

憐れみ深い人々は幸いである。その人たちは憐れみを受ける。

心の清い人々は幸いである。その人たちは神を見る。

平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。

義のために迫害される人々は幸いである。天の国はその人たちのものである。

(二)

司) 万軍の主よ、あなたの住まいはいかに麗しいことでしょう。

わが魂は絶えているばかりに主の天庭を慕い、わが心とわが身は生ける神にむかつて喜び祝います。

すずめがすみかを得、つばめがその雛を入れる巢を得るように、万軍の主、わが王、わが神よ、あなたの祭壇の傍にわが住まいを得させてください。

あなたの家に住み、つねにあなたをほめたたえる人は幸いです。

その力があなたにあり、その心がシオンの大路にある人は幸いです。

彼らは嘆きの谷を通っても、そこを泉のあるところとします。

また前の雨は池をもつてそこを覆います。

彼らは力から力に進み、シオンにおいて神々の神にまみえるでしょう。

万軍の神、主よ、わが祈りをお聞きください。

ヤコブの神よ、耳を傾けてください。

神よ、われらの盾をご覧になり、あなたの油注がれた者の顔を顧みてください。

あなたの大庭にいる一日は、よそにいる千日にもまさるのです。

わたしは悪の天幕にいるよりは、むしろわが神の家の門守となることを願います。

主なる神は日です、盾です。

神は恵みと誉れを与え、直く歩む者に良い物を拒まれることはありません。

万軍の主よ、あなたに信頼する人は幸いです。

## 火葬に際して

- ・一同は逝去者の棺を囲む。
- ・交唱、または朗読する。

### 1. 詩篇

司) 憐れんでください。神よ、憐れんでください。

会) わたしの魂はあなたを避けどころとし、災いの過ぎ去るまで、あなたの翼の陰を避けどころとします。

司) いと高き神を呼びます。わたしのために何事も成し遂げてくださる神を。

会) 天から遣わしてください。神よ、遣わしてください。慈しみとまこととを。

### 2. 祈り

司) すべての生きている者と死んだ者の主であって、すべてをみ手のうちに治められる神。

どうか、私たちの涙を拭い去り、私たちが目をあげて、復活の主を仰ぐことができるようにしてください。地上の体が滅びても、新しい天と地が実現する時、主のみ力は朽ちゆく卑しい体を変えて、栄光のからだにかたどらせてください。主今、私たちは、主イエス・キリストによって、復活と永遠の命に至る確かな望みを抱き、逝きし者の亡骸を、火(土、水)にゆだね、土を土に、灰を灰に、塵を

塵に返します。

すべてのものの終わりを清め、美しくしてください。恵みのみ業をたたえつつ、救い主、み子イエス・キリストのみ名によつて祈ります。

会) アーメン

### 3. 祝福祈願

司) 永遠の契約の血による羊の大牧者、わたしたちの主イエスを、死者の中から引き上げられた平和の神が、み心に適うことをイエス・キリストによつてわたしたちにしてくださり、み心を行なうために、すべての良いものをあなたがたに備えてくださるように。栄光が世々限りなくキリストにありますように。

会) アーメン

## 火葬後の祈り

・火葬後、教会や自宅等に遺骨を安置した時、詩篇42、46、116、139等を朗読し、次の、或いは他の適切な祈りをしてよい。

司) すべてのももの造り主、全能の神。

この世からみ許に召された兄弟／姉妹／幼子をみ心にとめてください。主を信じる者がキリストの死に与かると共に、またその復活の新しい命に生きることができ、喜びに満たされることができるよう、励まし、助けてください。栄光に与かり、喜びに満たされることができるよう、励まし、助けてください。私たちの目から涙を拭い取り、あなたのみ国を望み、この世にある限り、恵みの中に確かな歩みをする事ができるように強めてください。

み子、主イエス・キリストによって祈ります。

会) アーメン

## 納骨の祈り

・葬式の後、墓所に納骨する時期に決まりはないが、余り遅くならない時期を考えた方がよい。

・納骨は、納骨の祈りの前、或いは後、または説教の後で行なってもよい。

1. 讚美歌 初めに、讚美歌を歌い、または唱和してもよい。

2. 詩篇 司式者が朗読、または会衆と交唱する。

司) 万軍の主よ、あなたの住まいはいかに麗しいことでしょう。

会) わが魂は絶えているばかりに主の大庭を慕い、わが心とわが身は生ける神にむかつて喜び祝います。

司) すずめがすみかを得、つばめがその雛を入れる巢を得るように、万軍の主、わが王、わが神よ、あなたの祭壇の傍にわが住まいを得させてください。

会) あなたの家に住み、つねにあなたをほめたたえる人は幸いです。

司) その力があなたにあり、その心がシオンの大路にある人は幸いです。

会) 彼らは嘆きの谷を通っても、そこを泉のあるところとします。

司) また前の雨は池をもつてそこを覆います。

会) 彼らは力から力に進み、シオンにおいて神々の神にまみえるでしょう。

司) 万軍の神、主よ、わが祈りをお聞きください。

司) ヤコブの神よ、耳を傾けてください。

司) 神よ、われらの盾をご覧になり、

会) あなたの油注がれた者の顔を顧みてください。

司) あなたの大庭にいる一日は、よそにいる千日にもまさるのです。

会) わたしは悪の天幕にいるよりは、むしろわが神の家の門守となることを願います。

司) 主なる神は日です、盾です。

会) 神は恵みと誉れを与え、直く歩む者に良い物を拒まれることはありません。

司) 万軍の主よ。

会) あなたに信頼する人は、幸いです。

司) 父、み子、聖霊の神にみ栄えあれ、

会) 初めも今ものちも、世々に絶えず。アーメン

### 3. みことば

司) みことばを聞きなさい。

わたしは天からこう告げる声を聞いた。「書き記せ。『今から後、主に結ばれて死ぬ人は幸いである』と。」「霊」も言う。「然り、彼らは労苦を解かれて、安らぎを得る。その行ないが報われるからである。」「

イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死



んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」

4. 讚美歌 讚美歌を歌い、または唱和してもよい。

5. 説教

6. 特別な祈り 司式者は次の祈りの中から、或いは適切な祈りをする。

司) 共に祈りましょう。

(一)

司) 全能の神。

あなたはみ子イエス・キリストの死によって死を滅ぼし、聖徒の墓をきよめてくださいました。主の栄え輝く復活によって永遠の生命を明らかにし、主にあつて死ぬ者に平安と希望を与えてくださいました。主が私たちのために、死と墓に対して勝利をおさめられたことを信じて、眠る者が、あなたによって覚えられ、み国の栄光に与かることができるようにしてください。また、この世にあつてあなたを待ち望む私たちを、天にあつて主のもとにあるすべての者と共に、とこしえの交わりのうちを保ってください。

いのちの主である、み子イエス・キリストのみ名によってお願いします。

会) アーメン

(二)

司) 主イエス・キリスト。

あなたは十字架の死をもって死の刺を取り除いてくださいました。どうか、あなたの僕である私たちが、あなたが先立ち、導いてくださる道をたどり、ついにはあなたにあって安らかに眠り、あなたのようになって目覚めることができるように、恵みを与えてください。今この墓に遺骨を納める者を、あなたが受け入れてくださっていることを信じます。この世における私たちの歩みをも、常にみ手のうちに保ってください。

(会) アーメン

## 7. 祝 福

(司) 永遠の契約の血による羊の大牧者、わたしたちの主イエス・キリストを、死者の中から引き上げられた平和の神が、み心に適うことをイエス・キリストによってわたしたちにしてくださり、み心を行なうためにすべての良いものをあなたのために備えてくださるように。

栄光が世々限りなくキリストにありますように。

(会) アーメン

(ここで納骨してもよい。)

## 8. 讚美歌 適切な讚美歌を歌ってもよい。

(参列者が献花をしてもよい。)

## 周期記念会の祈り

・召天者の記念は、自宅または教会その他で行なうことができる。

・記念式は、召されてから1週間、1ヶ月、50日目に当たる適切な時期を選び、また1年、3年、7年、12年、30年、40年に当たる時に行なうものとする。

### 1. 讚美歌

### 2. み名による祝福

司) 父と子と聖霊のみ名によって。

会) アーメン

3. 詩篇唱 次の詩篇を交読、交唱、もしくは司式者が朗読する。口語訳を用いてもよい。

司) 主はわたしの羊飼い、

会) わたしには何も欠けることがない。

司) 主はわたしを緑の野に休ませ、

会) 憩いの水のほとりに伴い、わたしの魂を生き返らせてくださる。

司) 主はみ名にふさわしく、わたしを正しい道に導かれる。

会) 死の影の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。

司) あなたがわたしと共にいてくださる。

会) あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける。

司) わたしを苦しめる者を前にしても、

会) あなたはわたしに食卓を整えてくださる。

司) わたしの頭に香油を注ぎ、

会) わたしの杯を溢れさせてくださる。

司) 命のある限り、恵みと慈しみはいつもわたしを追う。

会) 主の家にわたしは帰り、いつまでも、そこにとどまる。

司) 父、み子、聖霊の神にみ栄えあれ、

会) 初めも今ものちも、世々に絶えず。アーメン

4. キリエ 司式者と会衆は交唱する。

司) 主よ、憐れんでください。

会) 主よ、憐れんでください。

司) キリストよ、憐れんでください。

会) キリストよ、憐れんでください。

司) 主よ、憐れんでください。

会) 主よ、憐れんでください。

5. 祈り 該当する名を入れる。

司) 祈りましょう。

恵み深い神。

今、私たちは、過ぐる年(日)にみもとに召された

を記念しています。

あなたが、彼／彼女を通して与えてくださったさまざまな恵みを感謝します。あなたは、み子キリストの死と復活によって、私たちを永遠の死から解放し、新しいいのちを与えてくださいました。復活の望みを与えられ召された——と  
共にささげる私たちの讚美を祝福してください。あなたの慰めと望みとをもつて  
私たちを満たし、召された者と共に復活の恵みに与らせてください。  
私たちの主、イエス・キリストによって祈ります。

(会) アーメン

6. 聖書 以下の聖書の箇所、或いは故人に関係する適切な箇所を選んで朗読する。

マタイ5…3〜10 ヨハネ11…21〜27

コリント1…15…12〜20 コリント1…15…50〜58

テサロニケ1…4…13〜14

7. 説教

8. 讚美歌

9. 祈り 司式者と会衆は次の祈りを交唱する。

(司) いのちの源である神は、み子イエス・キリストによって、私たちを神の子とし、  
主を信じる者はたとえ死んでも生きると教えられました。私たちは今、この世の  
旅路を終えた者が、み手のうちに憩いを与えられていることを信じ、神の恵みを  
祈り求めましょう。

(会) 私たちは、今住んでいる地上の幕屋が壊れても、神が備えてくださる家

があることを知っています。

司) 地上における年が満ちて、天にある民の数に加えられた者が、み子イエス・キリストの赦しと憐れみのうちに、とこしえに主の宮に住むことを、私たちは信じます。

会) それは、人の手によらない永遠の家です。

司) 主はご自身、私たちを迎えると約束し、「わたしのいる所にあなたがたもいることになる」と言われました。

会) 私たちは、今住んでいる地上の幕屋が壊れても、神が備えてくださる家があることを知っています。

司) 私たちが嘆きのうちにあるときにも、あなたはいのちと望みとを与えてくださいます。

会) あなたの前には、溢れる喜びがあり、あなたの許には永遠の楽しみがあります。

(適切な祈りを用い、或いは加えてもよい。)

司) 天の父。

私たちのいのちは主と共に、あなたのうちに隠されています。信仰をもってこの世を去った人々が、なお、あなたのみ手のうちに保たれていることを信じて感謝します。なお地上の歩みを続ける私たちも、同じ主の民として保たれ、共に主の恵みをほめたたえることができるようにしてください。

私たちの贖い主、またいのちの主である、み子キリストによって祈ります。

(会) アーメン

10. 主の祈り

11. 祝福

(司) 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたと共にあるように。

(会) アーメン

12. 讚美歌

(関係者による故人の信仰についての感話を加えてもよい。)

## 【リビングウイル―医師の立場から―】（実際の範例）

（ルーテル医療従事者の会が2003年10月に発行した小冊子「リビングウイル―尊敬ある死を選び取るために」の中から「実際の範例」を掲載）

ここに掲げてあるのは実際にリビングウイルを書くに当たつての範例です。

勿論、範例でありますので、これをどのように利用し、また変形なさるのもご自由です。各個教会で、一つの型をお決めくださるのも良いのではないかと考えています。

「緊急時の意思表示書」には信仰者の立場が明記されていませんが、勿論信仰者としての立場を明記されても良いと存じます。ただ緊急時という医療の事情、医療者の時間的余裕などを考慮して省いたほうが妥当ではないかと考えました。

「葬儀に関する牧師への希望書」はリビングウイルとは異なります。ただ教会生活をしていた者として欠くことのできない希望書ではないかと考え、一つの範例として掲げてあります。

なおこれらの範例は、医療従事者の会の生命倫理勉強会で検討し、さらに東京池袋教会の信徒の方々にもご批判いただいたりして作成したものであることを追記させていただきます。

（岡安 大仁）



## 緊急時の意思表示書（A案）

主治医 殿

私の生命、意識回復が不能となり自分の将来を決める能力を失ってしまった時には、この文書を私の意思表示書状として下さい。

1. 私の回復不能が明らかとなった時は、それ以上の延命措置は希望しません。
2. 脳死が十分に推定される時は、正規の診断基準によらなくても私の死として、一切の生命維持装置をはずして下さい。
3. 私の痛みなどの苦しみが強いときには、モルヒネなどの使用を含めできるだけ緩和して下さい。そのためたとえ死の時期が早まることがあっても一向にかまいません。
4. 私の臓器の提供については  
イ) 臓器の提供をいたします。（ドナーカードにも書きました。）  
ロ) 臓器の提供をいたしません。
5. 私の献体については  
イ) 希望いたします。  
（書類を提供してあります。献体先）  
ロ) 希望いたしません。
6. 私の病理解剖については  
イ) 主治医のご希望に従います。  
ロ) 希望いたしません。

署 名            ○ ○ ○ ○ 印 生年月日  
保証人           ○ ○ ○ ○ 印 続柄  
記入年月日        ○ ○ 年 ○ 月 ○ 日

注

これはあなたから主治医宛の意思表示書です。

① 意思表示書とはリビングウイルのことで、生前指示書とも言います。

② 延命措置とは（人工呼吸器、輸液、輸血、心臓ペースメーカー、人工心肺装置、胃ろう造設、鼻腔栄養、その他）

③ 臓器の提供、献体、病理解剖は、選択肢のどちらかを選んで、一方を二本線で消す。

④ 保証人は親族代表が望ましいですが、ご意思通りで結構です。

⑤ 遺言書は別個にお書きになってください。



7. 私は病理解剖については

イ) 主治医のご希望に従います。

ロ) 希望いたしません。

署 名            ○○○○ 印    生年月日

保証人 1.    ○○○○ 印    (続柄)

          2.    ○○○○ 印    (続柄)

記入年月日      ○○年 ○ 月 ○ 日

注

① 意思表示書はリビングウィルのごとで生前指示書とも言います。

② 延命措置とは（人工呼吸器、輸液、輸血、心臓ペースメーカー、人工心肺装置、胃ろう造設、鼻腔栄養、その他）

③ 臓器の提供、献体、病理解剖は、選択肢のどちらかを選んで、一方を二本線で消す。

④ 保証人1は親族代表が望ましいですが、ご意思通りで結構です。

⑤ 保証人2は所属教会の主管牧師、または役員になつていただくと、よろしいのではないのでしょうか。

⑥ 遺言書は別個にお書きになってください。

## 葬儀に関する牧師への希望書（案）

日本福音ルーテル〇〇教会  
牧師 〇 〇 〇 〇殿

葬儀は所属する〇〇教会の主管牧師の指示のもとに行わせてください。

### 場 所

- イ) 日本福音ルーテル〇〇教会で行ってください。
- ロ) 〇〇市の市民聖苑で行ってください。
- ハ) 自宅で行ってください。

### 方 法

所属する教会の主管牧師先生の司式で、

- イ) 教会の友達と親族だけの静かな一番質素なやり方をしてくさるように望みます。
- ロ) できるだけ賑やかに華やかにして下さい。
- ニ) その他

### 墓地・納骨

- イ) 教会の墓地に納骨の約束がしてあります。牧師先生のご指示に従います。
- ロ) 家の墓地に家族と一緒に納骨して下さい。
- ハ) その他

私の好きな聖書の箇所は、(例)

コレヘトの言葉 3 : 3～10、ローマ書 12 : 19、  
コリント第二 : 12 : 9～10

好きな讃美歌 (例)

430、271、333、331、90

(続く)

略 歴

生年月日

出生地

父〇〇〇〇、母〇〇〇〇の第〇子として生まれる

受洗〇〇〇〇教会 年 月 日

免許

職業

結婚

家族

その他

署 名

保証人（続柄）

記入年月日

年 月 日

印

印

注

- ① いつ召されてもいいように、用意して牧師へ届けて置くと安心とします。
- ② 書き直しは新しいものが有効です。

【いざという時の連絡先・記入フォーム】（参考例）

私の緊急時には下記〇囲み連絡先を優先にお願いします	
1. 私の氏名： 血液型： 住所： TEL：	2. 職業 勤務先： 住所： TEL：
3. 緊急連絡先氏名： 住所： TEL：	続柄：
4. 家族氏名： 住所： TEL：	続柄：
5. 主要疾病： 通院・科： 主治医：Dr.	TEL：
6. 延命措置希望：あり・なし	ドナー登録：あり・なし
7. 所属教会： 住所： 信仰する宗教： 緊急洗礼希望：あり・なし	牧師名： TEL： 受洗： 年 月 日

## 【日本福音ルーテル教会・東教区墓地管理運営規則】

第1条 日本福音ルーテル教会東教区は、所属する教会員とその親族のために、東教区が管理する以下の墓地を設置する。

1. 小平墓地…東京都東村山市萩山1-16-1 小平霊園第23区29側4番
2. 我孫子墓地…千葉県柏市鷲野谷 355-2 ラザロ霊園 D-17
3. 仙台墓地…宮城県仙台市青葉区郷六字大森2の1 みやぎ霊園第西15区第2種  
77・78号

4. 横浜墓地…神奈川県横浜市緑区長津田4212番地 環境霊園横浜みどりの里  
区8列6番

第2条 東教区常議員会は前条四墓地に対し、担当常議員を置いて全体を統括し、会計は東教区会計が統括責任を持つ。

第3条 東教区墓地委員会

四墓地の管理運営のため、日本福音ルーテル教会東教区常議員会は東教区墓地委員会（以下墓地委員会と称す）を設置する。

1. 委員会 委員会は、各墓地の運営委員長及び教区担当常議員他若干名を加えた委



員で構成する。

2. 役員 委員会は、委員長・書記・会計を選出し、東教区常議員会の承認を得る。
3. 任期 委員の任期は2年とし、再任をさまたげない。

#### 第4条 委員会の任務

墓地の管理運営が適正に行われるために配慮し、必要な実務を行う。

1. 委員長 毎年文書をもって墓地運営状況を委員会に報告し、その報告を東教区常議員会ならびに東教区総会に提出する。

2. 書記 必要文書を作成し、納骨予約簿、納骨簿、その他を保管する。

#### 3. 会計

- (1) 毎年文書をもって決算報告を作成し、東教区常議員会及び東教区総会に報告する。
- (2) 委員会の諸経費は東教区総会において承認された予算の中から支出する。
- (3) 会計年度は暦年とする。

#### 第5条 墓地運営委員会

各墓地に運営委員会を設置しそれぞれの墓地を管理運営し、納骨式、春季、秋季墓前礼拝その他を執行する。

1. 委員会は若干名の委員によって構成され、委員長を置く。
2. 運営委員会の費用は、別途定める。

3. 委員の任期は2年とし、再任をさまたげない。

#### 第6条 墓地使用者

以下の各号に該当する者は、納骨予約または納骨ができるものとする。

1. 東教区内の教会に所属する教会員
2. かつて東教区内の教会に所属する教会員であつた者
3. 本条1、2の教会員の親族
4. 特別の事由により墓地委員会の承認を得た者

#### 第7条 墓地取得に関する費用

納骨予約及び納骨を希望するときは、墓地委員会の許可を得て以下の費用を納入する。

1. 納骨予約費 150、000円 予約時に納入する。
2. その他実費

#### 第8条 墓地管理費

墓地委員会は墓地の管理を円滑に行う為、納骨予約者並びに納骨委託者より年間2、000円の管理費を徴収する。

2. 徴収は郵便振替で行い、墓地購入の翌年度よりこれを徴収する。
3. 永代管理費はこれを100、000円とする。

4. 永代管理費は納骨の時点からのみ有効とする。

#### 第9条 納骨及び改葬

納骨を希望するときは、あらかじめ納骨願いを墓地委員会に提出し、墓地運営委員、もしくは、所属教会牧師の立ち会いのもとに納骨をしなければならない。

2. 納骨予約者が墓地の使用を必要としなくなった場合には、直ちにその旨を墓地委員会に申し出るとともに、墓地使用承諾書を返却しなければならない。また、納骨委託者が自己の都合により納骨を東教区が管理する墓地以外に移す場合は、所定の改葬願を墓地委員会に提出しなければならない。

但しこの場合、権利を他に譲渡することはできない。また、既納の費用は一切返却しない。

3. 東教区四墓地の納骨予約者、また納骨委託者が他の東教区墓所への改葬を希望するときは、墓地委員会の許可を得てこれを行うことができる。

但しこの場合改葬等に必要な費用は、納骨予約者また納骨委託者が負担する。

#### 第10条 合葬

墓地委員会は、納骨後50年を経たものを合葬することができる。

1. 墓地委員会は、第8条の墓地管理費を10年間滞滞し、遺族との連絡がとれない時、その遺骨を合葬することができる。

2. 墓地委員会は、納骨委託者が希望するときは、合葬することができる。その際委託者は、墓地管理費として20,000円を前納しなければならない。

#### 第11条 墓前礼拝及び記念会

毎年定期的に行う墓前礼拝は墓地委員会主催で行うこととする。その費用は墓地委員会会計より支出する。

1. 東教区内の教会は、納骨委託者の願いにより墓前において記念会を行うことができる。但し、この場合の費用は各個教会もしくは委託者の負担とする。

2. 前項の記念会等のため納骨堂開扉の必要が生じた場合は、運営委員会の承認を得なければならない。

#### 第12条 墓所前における儀式

墓所前における儀式については、これを日本福音ルーテル教会本来の慣行に従って実施するものとし、納骨委託者の中でこの儀式を肯じえないときは、委員会は墓所の使用権を解除することができる。

#### 第13条 規則の改正

本規則の改正は、東教区常議員会がこれを行い、東教区定期総会で承認を得るものとする。

付則

(1) 当規則は1991年4月1日から発効する。

但し新設の仙台並びに我孫子墓地については、墓所完成時から本規則を適用する。

(2) 本規則の改正(第6条3、第8条2)については、2001年1月1日より施行する。

(2000年3月20日東教区総会決議)

(3) 本規則の改正(第3条1、2、3、第5条(追加条項)、以下、条項1条ずつ繰り

下がる。第7条1、2、第8条(追加条項)、以下、条項1条繰り下がる。第10条

1、2、第13条(追加条項)については、2008年4月1日より施行する。(2

008年3月20日東教区総会決議)

(4) 本規則の改正(第1条4、第2条、第3条、第7条1、第8条4、第9条3)につ

いては、2009年7月1日より施行する。(2009年3月20日東教区総会決

議)

## 【東教区墓地使用予約申込要領】（横浜の場合）

### 1. 要領

同封されている「東教区墓地管理運営規則」をご参照いただき、『東教区共同墓地使用申込書』にご記入の上、東教区墓地委員会事務局まで郵送でお送りください。そして必要経費を下記の口座にお振り込みください。

申込書と入金の確認によって受理されたものとし、「墓地使用承認書」を郵送いたします。

### 2. 東教区事務所

〒16210842 東京都新宿区市谷砂土原町1-1

日本福音ルーテル教会 東教区墓地委員会

電話03-3260-8624（FAX兼用）

※お申し込みの際には、「墓地申込書在中」とご表記ください。

※申込数・申込者名等の確認、または住所・連絡先等の変更など、申し込み内容についてのお問い合わせは、毎週火・水・金曜日10:00～15:00に上記までご連絡下さい。

### 3. 入金の方法

＜振込先金融機関＞三井住友銀行 飯田橋支店

＜振込口座番号＞（普通）2716858

<振込口座名> 宗教法 人 日本福音ルーテル教会

東教区 教会墓地会計

<予約費> 150,000円

墓地使用承認証の送付のあるまで、振込を確認できるものを保管してください。

事務処理手続上、承認書送付までに1ヶ月程度かかることがありますのでご了承下さい。

**埋葬（納骨）に際しての御注意**（2011年4月現在）

1. 埋葬（納骨）について

埋葬費用（1体35,000円）及びプレート彫刻代金（1枚42,000円）が別途必要となります。（詳しくは下記霊園管理事務所にお尋ねください。）

また「墓地使用承認証」とは別に、墓地委員会事務局発行の「墓地埋葬承認書」が必要となりますので、埋葬の際には必ず墓地委員会事務局までご連絡ください。

なお埋葬のときには牧師の立会いが必要です。

**【連絡先】**

環境霊園「横浜みどりの里」

横浜市緑区長津田町4212番地

管理事務所 電話・045-989-1005

FAX・045-989-1013

## 東教区共同墓地使用申込書

日本福音ルーテル教会 東教区墓地委員会 御中

下記の通り東教区共同墓地使用を希望いたしますので、必要経費を添えて申し込みます。なお今後「東教区墓地管理運営規則」に変更があっても、規則に同意いたします。

申込書記入年月日 \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日

申込者住所（〒 \_\_\_\_\_ ）

電話 \_\_\_\_\_（ \_\_\_\_\_ ）

申込者氏名 \_\_\_\_\_ 印

所属教会名 \_\_\_\_\_ 教会

所属教会牧師氏名 \_\_\_\_\_ 印

予約申込 \_\_\_\_\_ 体分

希望する墓地（○をつけてください）

1. 小平墓地
2. 我孫子墓地
3. 仙台墓地
4. 横浜墓地

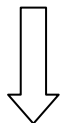
教区記入欄	
申込番号：	墓地番号：
申込番号：	墓地番号：



## 東教区墓地（小平・横浜・我孫子・仙台）使用申込み手続

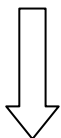
教区事務所に使用申込みを行う。

03-3260-8624



教区事務所より、申込書や規則など、必要事項が郵送される。

申込書に必要事項を記入し、所属教会の牧師の承認をもらって、教区事務所に返送。記載されている口座に申込金（15万円）を振込む。



書類と入金を確認され次第、墓地使用承認書が郵送される。

手続き完了（墓地使用承認書を保管する）

\*なお、墓地管理費として、年額 2,000 円（永代管理費として 100,000 円を一括納付しても良い）。

\*納骨に際しては、所属教会の牧師と日程などを決め、教区事務所にお問い合わせください（墓碑記名のための別途料金が必要です。料金は納骨場所の石材店によって異なります）。

## 【冠婚葬祭費用覚書例】（教会用）

〇〇教会に於いて行われる冠婚葬祭に関しては、その経費について次のように取り決めます。

1. 冠婚葬祭を〇〇教会で行うことを希望する方には、原則的に以下の経費を〇〇教会に一括してお支払いいただきます。

教会への献金	70,000円
牧師への謝礼	30,000円
オルガニストへの謝礼	10,000円
その他の経費（クリーニング代等）	10,000円

（お花代は実費）

なお、葬儀の場合、前夜式も〇〇教会にて執り行う場合には、その他の経費以外の献金、謝礼は同額を申し受けることといたします。

2. 上記経費は一括して牧師、あるいは教会会計係が受け取り、冠婚葬祭の行われた次の日曜日に、牧師と会計係でその額を確認します。

(1) 上記の牧師謝礼、オルガニスト謝礼は、明記されている額をそれぞれに支払います。オルガニストには、謝礼の他に交通費の実費並びに食事代1,000円を「教

会への献金」の中から支払います。

(2) 看板を書かれた方にはその経費として2,000円、並びに交通費実費、食事代1,000円を「教会への献金」の中から支払います。

(3) お手伝いをお願いし、お手伝いして下さった方々には、交通費実費と食事代1,000円を各々「教会への献金」の中から支払います。

3. お支払いいただく方の要請により、牧師、オルガニストなどへの謝礼額が明記されている場合には、その意向を受け入れ、明記された額を牧師、オルガニストなどに支払います。

またお支払いいただいた額が、明記された総額より少ない場合には、「教会への献金」を減らすこととします。「教会への献金」を充当してもまだ不足の場合には、牧師と会計が協議し、各自への謝礼を決めることとします。

この取り決めは、従来より行われてきた冠婚葬祭の際の経費支払いについて、間違いの無いように明文化したものです。役員会で、必要に応じて上記内容の変更することができま

以上

## あとがき

本書は、2010年7月3日(土)小石川教会で開催された第17回東教区宣教フォーラムのテーマ「この私が死んだらどうなるの？」から、その報告書を主体に編纂し、参加者のみならず多くの信徒、関係者に読んで頂くことを願って発行されました。

東教区宣教フォーラムは1992年の日本福音ルーテル教会宣教百年の集いの中で神学校の江藤直純校長が提唱した信徒運動の一環として開始され継続されています。

第17回では私たちが一度は経験する、避けることができない死に正面から向かい合い、不安、恐れを持つだけでなく、キリスト者としての答えをみつきたいと考えました。このフォーラムは、このテーマにふさわしい講演を賀来周一牧師がして下さり、最後の時に向かい合っているピース・ホスピスのチャプレンをされておられる田中良浩牧師、神学校で研究、教えて下さっている石居基夫牧師に加わって頂きました。また、当日の参加者にはアンケートも書いていただき、その内容を本書に収録致しました。短時間のうちに多くの示唆を含み、死に前向きに向かい合っている回答が記されていることに感銘を受けました。

編集するにあたり、旅立つ時を自らが迎える準備や、家族・関わりのある人のために考えておくことの一部を参考資料として収録しました。その過程で、私たちのルーテル教会では多くの文献があり、様々な準備がなされていることがわかりました。そ

の時が意に沿うように役立てて下されば幸いです。

編集中の2011年3月11日午後2時46分に東日本大震災と大津波、福島第一原子力発電所の事故が起きました。報道からでは直接、多くの死を看ることはできませんが、被災された方々の話と数字から想像できます。ルーテル教会では世界の信徒と共に祈りと支援に迅速に立ち上がり、行動できていくことは大きな慰めです。東北地域で火葬できないご遺体を東京でも受け入れおり、その場にルーテル雪ヶ谷教会の田島靖則牧師が立ち会い祈ってくれていると聞いております。突然に襲った別れの意味を私たちも、これから考え続けなければならないと思います。

発行では、東教区常議員会のご理解のもとに出版準備金の利用が許され、第17回宣教フォーラム準備委員会のメンバーから選出された清野博之兄（藤が丘教会）、山口好子姉（武蔵野教会）、水上利正兄（本郷教会）と共に編集いたしました。基となった報告書の作成に携わって下さった方々と共に感謝致します。

木村 猛（保谷教会）

---

「ふるさとの御国へ」

2011年6月12日（ペンテコステ）発行

発行者 大柴譲治（東教区長）

発行所 日本福音ルーテル教会東教区  
宣教フォーラム準備委員会

〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町 1-1

Tel・Fax 03-3260-8624

Web <http://www.jelc-higashi.org/>

E-mail [higashi-jimu@xqj.biglobe.ne.jp](mailto:higashi-jimu@xqj.biglobe.ne.jp)

印刷所 キュービシステム(株)

---

落丁・乱丁の場合にはお手数ですが発行所宛お送り下さい。送料は発行所負担でお取り替え致します。

Printed in Japan